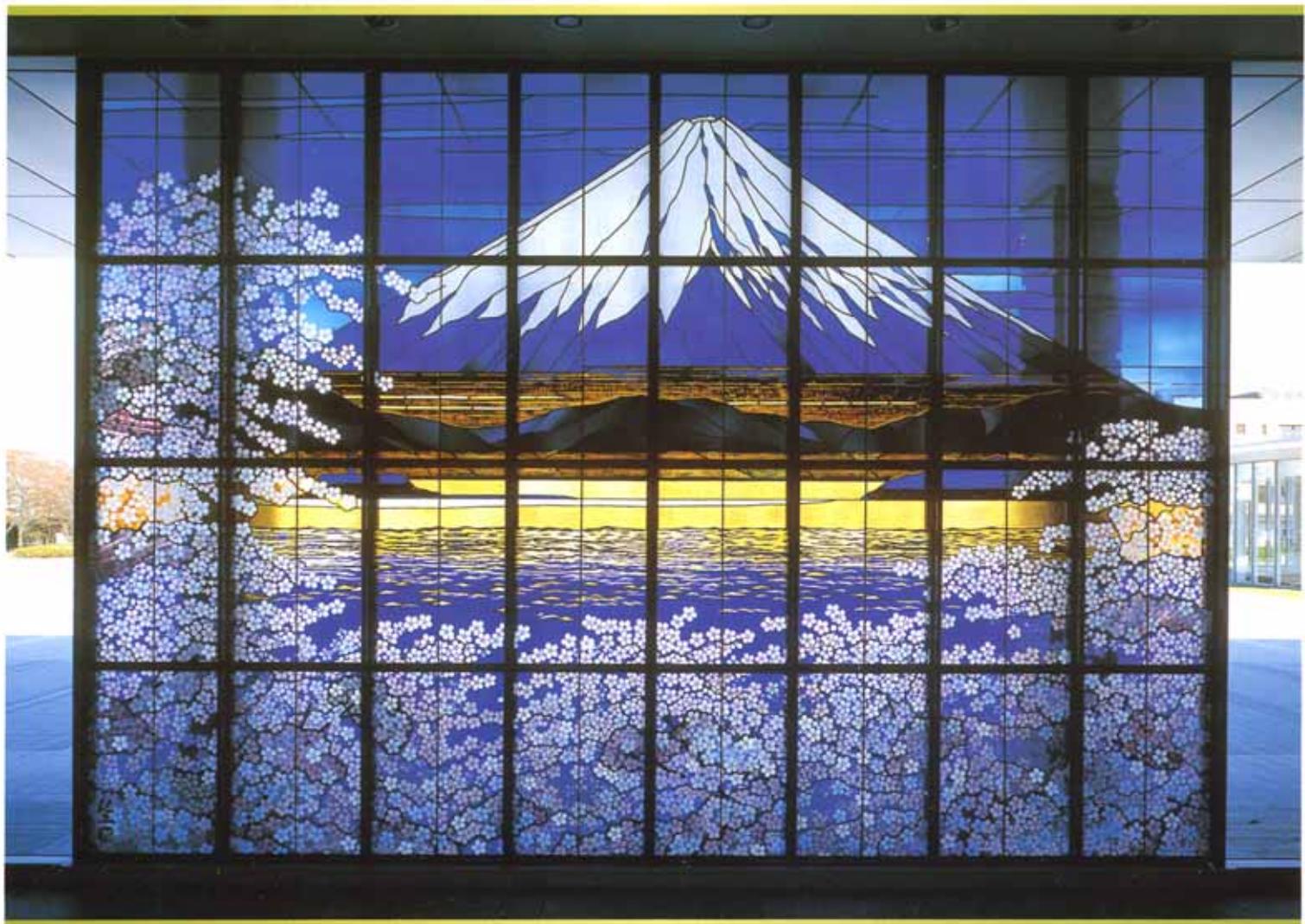


防衛大学校同窓会機関誌

小原台だより



(若人の城)

Vol. 10
(50周年記念特集)

平成15年1月1日
発行 防衛大学校同窓会

編集 洞澤佳廣 合田直樹 工藤武司
印刷 (株)エイコープリント



平成15年年頭のご挨拶

阿部 博男

全国各地で、また日本を離れゴラン高原、東チモール、インド洋上、南極等任務遂行中に平成十五年の新年を迎えられた同窓生の皆さん、明けましておめでとうございます。

まず最初に、昨年十一月十六日、無事防衛大学校創立五十周年同窓会行事を終了することができましたことを報告させて戴きます。皆様方から頂戴しました数々のご支援に対して心から御礼申し上げます。

創立五十周年行事を開始するに当たり、十月八日、諸行事が成功裡に成就することを念願し、防衛大学校において達磨の片目を入れる儀式がありました。そして、去る十二月十八日には、全ての行事が所望の成果を得て終了したことを祝い、もう一つの目を入れる行事を済ませました。その席上、西原校長から同窓会の協力に対し、深甚な謝意を頂戴しました。同窓会記念行事の際に頂戴した感謝状と合わせ、深く恐縮したところであります。校長をはじめ防衛大学校の創立五十周年行事に対する取組は、早くから計画的、積極的で、その上現場では素晴らしい協力を戴きました。同窓会としても学校当局に呼応し平成八年に記念事業委員会を立ち上げ、学校の施設整備に併せて、卒業生の思いを後輩に申し送るために、記念講堂正面にステンドグラス「若人の城」、中央広場に彫刻像「国の守り」を寄贈することとしました。創作して戴いたステンドグラス原画の平松礼二、彫刻像の高橋洋の両先生には、我々

の思いを深く理解して戴き、素晴らしい作品を作つて戴くことができました。この両モニュメントは、防衛大学校を築立つ後輩の思いの中、永く刻まれていくものと確信しております。

この様なすばらし作品を寄贈できたのも、同窓生一同に代わり、七年の長期間、周密な計画と果敢な実行を実践した佐久間委員長以下記念事業委員会のメンバー一人一人の真摯な活動に負うところが大きく、この場を借りて深く感謝を表させて戴きます。

この他に、記念事業委員会が計画した事業が幾つかありますが、一つ大きな計画が残っております。それは、MCI (Miritaly Cyber Institute)です。これらのIT化社会の中で、われわれの軍事に関する知識、経験をまず相互に同窓のネットワーク内に陶冶し、質を高め、軍事に無関心な社会に、必要性に併せて提供しようとするものです。

ITの活用について、いまだ評価が分かれておりますが、同窓生の熱意と努力で使い易く、高品質なデータベースが生まれることを期待しております。

次に、世代交代について述べます。同窓会は、昭和三十六年設立以来、四十年間一期生が会長を務めて参りました。五十周年の記念すべき節目の年を終わつた今日、「新しい酒は新しい皮袋に收めろ」との例えどおり、諸業務のけじめを付けて、委員会の任務が終了する段階で、現同窓会本部の体制を一新いたしたいと考えております。

昨年二月から各期生会代表（一期から十期）から意見を聴取し、推薦を戴き、次期会長には六期生の陸上要員からとうことになりました。

同窓会長を出す機会のなかつた二、三、四、五期の諸兄には誠に申し訳なく思つております。後輩期が会長になると、先輩期の同窓会活動への参加が消極的になると心配する向きがあります。先輩の方々には宜しくご配慮をお願い申し上げます。

最後に、同窓生各位並びにご家族皆様のご多幸とご健勝を心より祈念申し上げ、新年のご挨拶と致します。

防衛大学校五十周年記念行事

同窓会事務局

平成十四年十一月十六日（土）、記念行事は、曇りでやや肌寒い天候の中の午前10時、正門から真っ直ぐ伸びた石畳の道の先に立つ学校本部庁舎玄関での受付から始まった。

受付窓口は、50周年記念事業（記念モニメント、記念マーチ等）関係、殉職御遺族関係、それに陸海空の同窓生関係と設け、受付リボンの取り付け、行事案内や校内見取り図等の資料を配付するなど整齊と為された。参加者の多い陸上窓口は、更に期別で二つに分け、それぞれの窓口は同窓会本部事務局員と小原台勤務の現役同窓生が担当した。和やかな受付中、はや、久闊の挨拶を交わす北海道から沖縄に至る全国から参加した同窓生の姿があつた。

最初の行事は、顕彰碑献花式である。前日から横須賀プリンスホテルに宿泊されていた御遺族を同窓会本部事務局員添乗の学校提供マイクロバスでお迎えにあがり、受付後、本館の御遺族控え室にて休憩していただいた。当日は、各御家族の校内案内役として殉職者の友人同期生に多大の協力を貢献した。

慰靈祭は、例年、開校祭行事（小原台事務局担当）として同窓会が行っているが、今年は、記念行事の一環として午前11時から厳粛に執り行われた。新設された記念講堂北側道路沿いにある顕彰碑周



りの式場は、同窓生の手によって綺麗に掃き清められ、学生儀仗隊の見守る中で同窓生会長、校長「慰靈の辞」等の弔辞後、白菊を献花し故人を慰靈し偲んだ。参加者は、御遺族、会長以下同窓会関係者、校長以下学校関係者、同期生会長等である。今回は節目と言うこともあり、87柱の全御遺族に同窓会からの案内状を送り、28家族、53名の御遺族関係者の参加があつた。献花した同窓生の数は、数え切れなかつた。献花式後、参加者は、学校大会議室において慰靈会食を行つた。尚、学校施設立て替えに伴い、図書館機能が新設なつた新図書館に移動した後、50周年記念事業の一つとして現図書館の一部を殉職者顕彰室に新しく整備することとなつてゐる。



開校祭の学生が販売する弁当等で、同窓生が、三々五々、昼食を取り終わった午後1時過ぎから記念講堂で、三浦朱門氏の記念講演が開始された。三浦先生は、卒業式のご来賓として来校して戴くとともに創立以来の卒業式におけるご来賓の祝辞を一冊の本として綴られた方である。また、当日は、所用で欠席であったが、ご夫人の曾野綾子氏も時期を変えて卒業式等のご来賓として来校して戴いている。

聴衆は、御遺族家族、記念事業関係者、同窓生及びその家族、学生そして開校祭に見えた市民の方々で、一五〇〇名程度であつた。演題は、「望ましき自衛官像」

目次

平成十五年年頭のご挨拶
五十周年特集

防衛大学校五十周年記念行事	1
五十周年記念事業報告	1
M C I 事業提案書	1
防大に奉職して二十五年	1
望ましき自衛官像	1
三浦朱門氏を囲む在校生代表との懇談会	1
五十周年記念顕彰碑献花式によせて	1

小原台は今	14
同窓会行事	14
記念行事類末記	14
代議員会議決結果	14
各種競技会	14
同窓会名簿の発行予定	14

小原台は今

同窓会行事

記念行事類末記

代議員会議決結果

各種競技会

同窓会名簿の発行予定

同窓会アラカルト

防衛大学校学生歌作詩者の解題

ジャカルタ生活

世界学生ヨット選手権に参加して

今、ラグビーに学ぶ

京都大学アメフト部水野監督について

人に恵まれる

大空と共に

インド洋に展開して

湯治温泉宿「ごぜんの湯」の坊主から

「えひめ丸事故を通しての経験」	1
卒業式等のご来賓として来校して戴いている。	1
期生会だより	1
支部だより	1
会計報告	1
防大同窓会総会のご案内	1

期生会だより

支部だより

会計報告

防大同窓会総会のご案内

で、主として学生を対象とする意義深い講演であった。講演内容は、本冊に掲載されているとおりである。尚、後日、テープから起きた講演録が、三浦先生の加筆等を経て印刷製本され、全学生を含めた関係者にお渡しすることとなつてゐる。余談ながら、三浦先生は、当夜、学生との懇談後、校内に宿泊されて翌日の学校行事に参加された。

卒業式同様に赤絨毯の引かれた記念講堂ステージでは、講演に引き続き、各種贈呈行事等が行われた。この催しを「各種贈呈行事等」と銘打ったのは、各種贈呈と記念事業でお世話になつた方々への感謝状贈呈式と贈呈品である記念マーチの披露演奏、記念ビデオの試写等を一緒に行つたからである。



式典は、先ず、佐久間50周年記念事業委員会委員長の記念事業経過報告から始まつた。次いで、同窓会長から学校長に記念事業の「醸金者名簿」、「記念マーチの樂譜等」、「記念ビデオ目録、同シナリオ」が贈呈された。尚、本冊、記念事業

経過報告にあるとおり、事業の大物である記念講堂のステンドグラス及び記念広場の彫刻像は、既に、それぞれ、講堂及び図書館の竣工に会わせ本年2月末と昨年10月始めに贈呈行事を行つていた。

観客は、講演会後に開校祭の各種催しで会場を後にした学生等を除き約一〇〇名であつたが、楽しい演奏会であつた。



演奏後、再度、黒子の作業で楽器、譜面台、椅子等がかたづけられ、ステージにスクリーン設定がなされて記念ビデオの試写が行われた。ビデオは、当日の記念行事も収録することとなつており、完成には至つていなかつたが、期待の持てる作品との評を得た。平成十五年春先には、記念品として醸金者各人に配達されることとなつていて、完成品の受領が待ち遠しい。

記念行事最後の催しは、祝賀会である。

祝賀会は、各種贈呈行事後の休憩、そして移動の後、場所を学生食堂に移し、夕暮れの午後5時から始まつた。招待者71名、同窓生六二五名（家族を含む）と四個大隊それぞれ招待された学生二〇〇



名の合計約九〇〇名の参加があり、ウエルカム・ドリンクの勢いも手伝い開会宣言の前から大賑わいとなり、廣い学生食堂も手狭に感じられる程であった。会では、同窓会長挨拶後、同窓生、学生の紹介とともに言える学生歌、応援歌及び逍遙歌の作詞、作曲者への感謝状授与が行われ、平松画伯及び松本前校長から祝辞を頂戴した。懇談風景は、TBS報道特集で放映されたが、同窓生が乗艦する砕氷艦「しらせ」から届いた南極の氷でお酒もすすみ誠に盛大であった。

夕闇迫る午後6時半、祝賀会は参加者の学生歌大合唱後、現役代表として防大幹事奥村陸将の乾杯で中締めとなり散会し、同窓生は臨時運行の京急バスで小原台を後にした。

五十周年記念事業報告

記念事業委員会

一 全般

平成十四年度は、昨年同窓生の皆様に御報告した「防大創立五十周年同窓会記念事業実施計画」に基づき、一つ一つの事業を計画に従い着実に実行してまいりました。特に、記念事業の柱であるモニュメント制作及び寄贈に際しては、防衛大学校側と密接に連携して防大行事の一環として除幕式を執り行い、所定場所に無事設置することが出来ました。又、平成十四年十一月十六日の同窓会記念行事については、同窓会本部に編成された同窓会記念行事実行組織が中心となり、委員会と一体になって細部の実施計画を具体化し、学校側の協力をいただきながら周到に諸準備を進めてまいりました。お蔭様で、全国から多数の同窓生及び御家族の参加をいただき、また在校学生の参加も得て、母校創立五十周年をお祝いするにふさわしい盛会にして、かつ感銘深い諸行事ができましたことを、先ず皆様に御報告いたします。

この際、同窓会記念行事の準備、実行に際し、特に各行事を担当された同窓会本部の各位の真摯な取り組みと、防大同窓会小原台事務局をはじめ放送委員会や防大吹奏楽部等実際にご支援いただいた皆様に対し、記念事業委員会として深甚なる感謝の意を表します。

従いまして、同窓生の皆様には、遅く

同窓会記念行事という大きな節目を終え、これから記念事業委員会の活動も、終末段階にはいります。従つて、今回は記念事業の特集号として、これまでの事業活動を委員会として中間的に総括して、同窓生各位に御知らせする事に致します。

先ず、今までの記念事業の全般的な経過については、同窓会記念行事において佐久間委員長から参加者に報告致しました内容を次章に掲載し、続いて、記念特集号の意味合いを深めるため、記念事業の各担当者から、実際に担当した事業ごとに実施した内容の概要について紹介させていただきます。

委員会としましては、今後、三浦先生講演録の記念冊子化等各事業の補備事項を完結し、記念品の一つである記念ビデオを完成して、醸金者の皆様への発送を確実に実行したのち、皆様からいただいた貴重な淨財に基づく事業経費の支出を総合的に整理し、事業会計の決算報告として纏めます。そして、約七年有余の間に亘つて、真摯に取り組んできました記念事業を総括して最終的な報告事項として取り纏め、今年六月頃に予定される代議員会に最終報告を実施すると共に必要事項を同窓会本部に申し送る予定であります。

従いまして、同窓生の皆様には、遅く

なりますが次年度発刊の「小原台だより」において、募金の最終結果や事業会計決算を含めた記念事業委員会からの最終報告を実施させていただきたいと思います。なお、昨年十二月二十日の代議員会において、昨年十月に委員会から同窓会に提案しました「MC-I事業提案書」の主旨を踏まえて、同窓会本部から新たにMC-I事業化に関する同窓会の事業提案がなされ、「平成十五年度から同窓会として段階的に事業に着手していく」ことに決定されました。これにより、同窓会本部に本年三月末までに設置されるMC-I準備委員会で平成十五年度の事業推進要領等が検討され、六月の代議員会に報告・承認されれば、先ず同窓会ホームページが開設される予定ですので、開設され次第、委員会の最終報告内容を掲載したいと考えておりますことを申し添えておきます。

二 同窓会記念行事における佐久間委員長の記念事業経過報告

方針としては、防大の事業に対する協力を主とし併せて同窓会独自の事業を行う事、事業の内容は後世に遺す価値のあるものを重点とする事、事業の計画実施に当たっては、将来の節目も視野に入れながら、二十世紀後半の歴史を踏まえつつ新世紀へ向けての飛躍を理念とする事、の三点を掲げました。

防大に対する協力は、学校中央地区にモニュメントを設置する事を全体の中心として位置付けるとともに、殉職同窓生の顕彰室整備に対する支援、五十年小史作成に対する協力を行う事としました。同窓会が計画実施する事業は、五十周年を記念する記録の作成、講演会の開催、祝賀会の実施、マーチの作成等を内容としました。また、募金活動を平成九年から開始する事になりました。

以下、募金活動及び各事業の経過について申し上げます。

募金活動は、当初は目標を二億円としましたが、モニュメント制作をお願い致しました関係者の格別な御厚意により所要経費の縮小が可能になつた事、並びに祝賀会を同窓会本部が行うようになつた事から、平成十一年度の代議員会において、目標額の一億二千万円への変更と、その枠内での事業予算が承認されました。募金の実績は、総額約一億二千二百万円の淨財が寄せられ、目標を達成する事が出来ました。同窓生各位の御協力に感謝致しますとともに、この中には、殉職同窓生等の御家族並びにタイ・シンガボ

防衛大学校の創立五十周年に当たつて、同窓会の記念事業委員会が計画・実施してきました事業の経過について、報告致します。

平成七年十一月の同窓会総会において、記念事業の実施並びに記念事業委員会の設置が決定され、委員会の任務として、防大が行う事業に対する協力、同窓会としての事業の企画・実行、事業に必要な経費の募金活動、の三項目が示されました。第一回の委員会は平成八年七月に開催し、以後、防大当局の意向を踏ま

ール支部からの醸金が含まれている事を申し添えておきます。醸金者の方の氏名を記した芳名録は、本日防大へ贈呈すると共に一部を同窓会本部で永久保存致します。

モニュメントのうち、記念講堂のステンドグラスは、最も早くから準備作業を始めました。制作全般の指導をお願いしました清家清先生に防大を訪問して戴いたのは、五年前の十二月であります。寒い風の吹く日でありますたが、先生には時計台の上まで上って戴き、防大全体の風景の中での講堂の位置付け等を確認して戴きました。清家先生は、東京工大及び東京芸大の名誉教授であり、また、防大の草創時期に久里浜の教室で講義を戴いた恩師であります。先生は、平成十年三月の卒業式に御参列戴き、その後の講堂設計とステンドグラス設置場所についての具体的な御指導によつて、講堂の入口中央にステンドグラスを飾る事になりました。

原画制作については、当初の構想を変更せざるを得ない事態が生じましたが、多摩美術大学教授の平松礼二先生が、それまでの経緯を御承知の上で快諾して戴きました。私達は、平松先生にお願いする事が最も望ましいという結論を得ましたが、全く面識のない先生にどのようにお願いするか悩んだ折に、自らその役をかつて戴いた方があります。それは、この席にお越しの、ステンドグラス制作に豊富な経験をお持ちでデザイン・システム相談役の横田至明氏であり、あらためて感謝申し上げる次第であります。本日御夫人と共に御臨席戴きました平松

先生は、国内外において活躍されている日本画家であり、一昨年一月からは、二十一世紀に輝く画家としてその作品が月刊誌「文芸春秋」の表紙を飾つております。先生は、昨年五月に防大を訪問して戴いた後、防大はもとより各自衛隊の関係資料を広く検討され、限られた期間内で集中的にこの制作に取り組んで戴き、昨年六月に原画「若人の城」が完成しました。このタイトルは、申すまでもなく学生歌の歌詞から採つたものであり、守るべき対象である日本の象徴としての富士山に、陸・海・空を示す「咲き誇る桜」「金色に輝く海」「紺碧の空」を配して、全体として国を守る若人の城としての小原台の場を描いて戴きました。

この原画に基づくステンドグラスの制作は、清家先生の教え子の角永博氏が代表を勤めておられます株式会社デザイン・システムにお願い致しました。制作作業は、横田氏を統括責任者として、現代壁画研究所の湯河原工房が担当する事になりました。作業は、繊細で華麗な原画を出来る限り忠実に表わす事を目指して進められ、そのため工房の担当者は、新しい技法に挑戦して作品の制作に取り組んで戴きました。また、平松先生は、度々工房へ足を運ばれ直接作業の御指導を戴きました。

本年二月二十八日、完成したステンドグラスが記念講堂に設置され、講堂の落成式に併せて、除幕式並びに同窓会から防大への寄贈を行なう事ができました。また同じ場所で、平松先生から防大に原画が寄贈され、これに対して学校長から先生に感謝状が贈られました。

もう一つのモニュメントである彫刻像は、図書館及び中央広場の建設工事の進行に合わせて計画が具体化しました。平成十二年春に、防大当局から中央広場の構想とモニュメントの許容重量等が示され、委員会における検討の結果、文武両道を表わす彫刻像を中央広場の芝生部分に設置する事にしました。

制作者の選定については、三越美術部の支援を得る事とし、二十一世紀に輝くと期待される彫刻家を推薦して戴き、作品の写真・デッサン、展覧会展示作品等による検討を進め、最終的に愛知県立芸術大学教授の高橋洋先生にお願いする事として、昨年一月に制作受諾のお返事を戴きました。高橋先生は、国画会を中心として、昨年一月に制作受諾のお返事を戴きました。高橋先生は、昨年末から共に御臨席戴いております。先生は、昨年二月以降度々防大を訪問され、昨年夏には複数の案の中から「兜」をモチーフとする事が決まりました。秋には、若人の無限の可能性を表現する天を指す「兜」に日輪と羽根ペンを配したブロンズ像と、学生綱領の三徳目及び陸・海・空を示す黒御影石の「三本柱の台座」から成る構想が固まり、タイトルは防大応援歌から「國の護り」を採る事となりました。

粘土による原型の制作は、愛知県日進市の高橋先生のアトリエで本年二月から開始され、次いで石膏像の制作に移りました。この石膏像を用いて造形及び色付けの完成度を高める作業が続けられ、七月には仕上げを終えた石膏像が鋳造のため富山県新湊市の工房へ送られました。

モニュメントの制作を請け負ったのは、図書館落成式に併せて、除幕式並びに同窓会から防大への寄贈を行なう事ができました。また同じ場所で、平松先生から防大に原画が寄贈され、これに対して学校長から先生に感謝状が贈られました。

モニュメントの制作をお願い致しましたお二人の先生からは、等しく防大五周年記念事業に携わる事が光榮であるとのお言葉を戴き、他の仕事に優先して制作に当たつて戴きました。誠に有難い事であります。高橋先生は、昨年末から病床に臥せられた時期がお有りだつただけに、本日の感慨はいかばかりかと拝察しております。

さらに、平松先生は、ステンドグラス原画の版画百部を同窓会に寄贈して戴きました。委員会において検討の結果、先生のお気持を活かすためには、防大卒業生が勤務する全国の部隊等に配布する事が最善と判断し、同窓会から各自衛隊等に贈呈致します。また、高橋先生は、彫刻像のレプリカを寄贈して戴き、彫刻像除幕式の日に同窓会長が受領致しました。ステンドグラスの原画及び彫刻像のレプリカは、昨日から明日までの間、記念講堂で実施中のモニュメント制作過程展示の場で御覧戴く事が出来ます。これらの作品は、将来防大資料館が完成した後は、その中に飾る方向で防大による検討が行われております。

同窓会記念事業の中心となつたモニユ

メントは、小原台を飾る香り高い芸術品として学生の心を豊かにすると共に、将来にわたって卒業生の心の故郷となり続けるものと信じております。また、この作品が、お一人の先生をはじめ多くの方々の熱意と御尽力によつて出来上がつた経緯が、語り継がれる事を願つております。

なお、モニュメントのパンフレットを作成して平松・高橋両先生へお送りし、また防大及び同窓会本部へ送付しました。

殉職同窓生の顕彰室整備は、母校創立五十周年の節目に際して、同窓会としては非とも行うべき事業と認識しております。ただし、顕彰室が設けられる予定の資料館の開館が平成十六年度になるたまに委員会としては顕彰室整備事業を同窓会の手に委ねる事になります。しかし、顕彰室に殉職同窓生の刻銘板を設置する事は既に決定されており、その仕様並びに顕彰室に隣接して設けられる予定の卒業生コーナーのレイアウトは、本年中に防大へ通知する事にしております。

五十年小史作成に対する協力は、防大の要請に基づき、「防衛大学校五十年のあゆみ」と題する小冊子を作成し、防大及び同窓会本部へ送付しました。

記念記録の作成に関しては、複数の案を検討の結果、約五十分程度の記念ビデオを作成することになり、六期生の桑原泰彦会員の手による「任重く道遠し」と題するシナリオに沿つて、長年カメラを通して防大の歴史を記録してこられた陸上自衛隊OBの久保田博幸氏の協力を得ながら、作業を続行中であります。本

日は、約十五分の紹介版の試写を実施すると共にビデオの目録及びシナリオ台本を防大へ贈呈致します。

この記念ビデオは、本日の記念行事の映像を含めて完成させ、小記念品としてモニュメントの絵葉書セットと共に、明年二月醸金者全員に贈呈するほか、地方連絡部及び同窓会の本部・各支部へ送付致します。

同窓会主催の記念講演会は、検討の結果三浦朱門先生にお願いする事とし、昨年十月に快諾を戴きました。先程行われました講演は、先生の広く深い学識と透徹した歴史観に基づく感銘深い内容であり、また防大の初代校長横智雄先生の教えに通じるものがあるとの思いが致しました。

三浦先生は、本人の御希望により、殉職同窓生慰靈碑献花式に参列され、今夜は校内に宿泊されて学生と懇談されることになつております。本日の講演録は、明年一月発刊の「小原台だより」に掲載するほか、同窓会の本部及び支部等に送付することにしております。

なお各支部は、記念事業の一環としてそれぞれの計画に基づく地方講演会を開催しており、そのための経費を配布致しました。

記念マーチは、各種観閲式における防大学生隊の行進並びに日常の課業行進に使用される事を期待して作成する事とし、具体的な企画及び実行は防大吹奏楽部OB会にお願いしました。一般公募作品については、一次審査の合格曲七曲を対象とし、海上自衛隊横須賀音楽隊の演奏協力を得て、本年六月、二次審査を行

いました。審査には、同窓会長をはじめ、防大の校長及び職員・学生、部外の専門家、各自衛隊音楽隊長、防大吹奏楽部OB会等が当りました。審査においては二曲を選考の予定でしたが、優劣つけ難い作品揃いで、防大の要望もあり最終的に四曲を選定しました。

これに専門家作曲の四曲を合わせた八曲の楽譜とCDを、本日防大に贈呈致します。また、防大吹奏楽部による披露演奏が行われ、明日の防大記念行事における観闈式の際に、初めて防大行進曲として使用される予定であります。

以上は当初の構想に基づく事業の概要でありますが、委員会は、これに加えて、五十周年を機会に一つの種を蒔き将来これを育てて行く記念植樹の構想を同窓会に提案致しました。「MC-I (Military Cyber Institute)」と仮りに名付けた構想であります。その目的は、我が国の国家運営に当たつて軍事的視点が欠落する事が多い現状の改善に資するため、防大同窓生の力を結集してインターネットを利用した「軍事的識見が整理総合されているセンター」を構築し、それを基に國家・社会に対しても軍事的配慮の重要性を発信することになります。

この構想の同窓会に対する提案並びに必要な経費の執行は、昨年の代議員会において承認されました。委員会においては、志方副委員長をリーダーとして記念事業委員以外の同窓生を含めたMC-I検討チームを編成し、また構想を実現するための事業モデルの研究を同窓会員が經營する企業に委託し、その成果を本年八月末に受領しました。委員会は、研究成

果を踏まえて、同窓生の理解が得られ、かつ同窓会が実行に移せるような構想案を作成し、十月二十三日に同窓会長に手渡しました。

同窓会本部は、委員会提案書の取扱いを、来月の代議員会に諮られる事と承知しております。委員会としては、同窓会が、目的の一つに掲げながら今日まで具動に挑戦する意義は極めて大きいものと体化することの出来なかつた社会的な活動を考えており、同窓生各位の御賛同が得られる事を期待しています。

委員会は、今後、記念講演講演録の作成、「小原台だより」記念事業特集号による報告、醸金者に対する記念品の送付、委員会活動記録の作成等を行い、代議員会における事業及び会計最終報告と同窓会本部への引継ぎをもつて任務を終了し、明年六月末に解散する予定であります。

過去七年間における委員会の会議開催数は四十回に及びました。多くの課題を巡つて激論を交わす事もありました。しかし、志方・石塚両副委員長の優れたリーダーシップと、二代にわたる宇野・田村事務局長の的確な企画・調整のもと、各委員は、長期間にわたりて計画並びに部内外の関係先との調整及び契約作業等に当たり、任務を全うしようとしております。その献身的で見事な努力に対し、委員会の責任者として心から敬意と謝意を表します。

この七年間に同窓会記念事業に対して寄せられました、同窓生、防大当局、そして各種事業に御協力戴きました多くの方々の御支援は、防衛大学校に対する熱い想いと期待の現れであると強く感じて

おります。

私達の母校が、次の節目に向けてさらには輝かしい歴史を築く事を願い、皆様の御支援に重ねて御礼申し上げまして、報告を終わらせて戴きます。（平成十四年十一月十六日、防大記念講堂にて）

三 各主要事業の実施内容の概要

(一)ステンドグラス

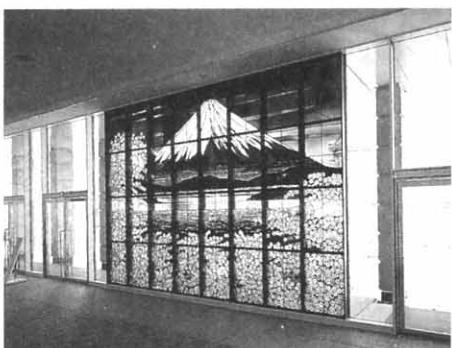
ステンドグラス「若人の城」は防大の記念講堂の建設にあわせ、記念講堂に「防大を象徴するモニュメント」としてのステンドグラスを同窓会として設置・寄贈したものです。記念講堂の建設工程を勘案し、五十周年事業委員会として最も早期に着手した事業であり、平成八年に構想を概定し事業をスタートいたしました。

当初順調にスタートした本事業も平成十二年になつて、当初予定の制作者を変えざるを得ない事態となる等の曲折を経た後、平成十三年六月末には原画が完成しました。

そして、平成十四年二月にはステンドグラスとして完成し、記念講堂へ設置され、平成十四年二月二十八日の記念講堂落成式時、同窓会から防大へ寄贈いたしました。

西欧で発達したステンドグラスは、その類い希なる不変性・耐久性により幾世紀にわたり変わらず人々に語りかけているものが数多く存在しています。ステンドグラス「若人の城」にも、変わらぬ精神と思いが込められています。いつまで

も防大生の精神の揃り所として存在する事を願っております。



▲講堂正面入り口のステンドグラス

(二)経過の詳細

○ 制作者の選定

平成八年十月、海自鹿屋基地資料館のステンドグラス制作に御尽力いただいた平山郁夫画伯に本事業の核となる原画の制作をお願いし承諾を得ました。

翌九年十一月には設置場所と記念講堂の設計との整合などの全般指導を清家

清先生に依頼し、制作にはデザイン・システム社を、ステンドグラス本体の制作作業には財團法人日本交通文化協会現代壁画研究所を選定いたしました。

何れも海自鹿屋基地資料館のステンドグラス制作に尽力された、経験豊富な、望みうる最良のメンバーがありました。

ところが、平成十一年の同窓会代議員会時点から十二年末にかけて、原画制作者の平山郁夫画伯に対する一部同窓生の反対意見・行動が画伯個人やご家族迄も巻き込み御迷惑をかける事態となりまし



▲平松画伯作「若人の城」

た。ここに至り、画伯からには事業への協力辞退の申し出がなされ、事業委員会としても平成十二年末、平山画伯への協力依頼を断念いたしました。（細部については、平成十三年一月小原台だより（Vol.8）2ページに掲載しております）

その後、防大当局との協議検討を重ね、中斷している記念事業としてのステンドグラス事業の継続を確認し、清家先生ほか制作関係者の専門的助言を得ながら、再度原画制作を依頼する画家の選考を実施しました。

そして、候補に挙がつた二十一世紀をリードする気鋭の日本画家の中でも実績・画風・画壇での評価等を勘案し、平松礼二画伯を最も望ましい画家として選定いたしました。

平成十三年四月、当該美術界に造詣の深い制作関係者の横田至明氏を仲介にして、本事業の主旨、これまでの経緯等をお話しし原画の制作を依頼して、画伯の承諾をいただきました。

こうして、制作の柱となる原画制作者

本事業に深いご理解を示された平松画伯は、依頼を承諾された折り「意義のあるこの事業に参加出来る事は光栄であります」とその思いを吐露されました。

本事業に深いご理解を示された平松画伯は、依頼を承諾された折り「意義のあるこの事業に参加出来る事は光栄であります」とその思いを吐露されました。

○原画の制作

画伯は、極めてご多忙な身でありながら、この事業に全力を傾注され、防大はもとより自衛隊の各部隊に至るまで広く関係資料を収集し、更には現地に赴き「若人の城」をいかに表現するかその構想づくりに心血を注がれました。日本の象徴富士山をメインに絵を構成することを考えられた画伯は各所でスケッチを重ね、制作資料の収集に努められましたが、この時のスケッチの一部は制作過程の資料として防大に寄贈されました。

制作意図について、画伯ご自身次のように語られています。『紺碧の空、金色に輝く海、咲き誇る桜、永遠の象徴富士山を求めて相模湾を取材地に決めました。構想時に考えたことは、「日本」「人間」「安全」「幸福」「自信」「勇気」などについてでした。この国と美しい自然を守る純潔な若い力を称え、その強さと美しさを表現するため、自然が一番美しく輝く季節「春」を描きました。小原台から希望の翼をつけ、任地に飛び立った若人が、やがて困難や辛苦に遭遇したとき、若き日々、魂を鍛えた小原台を思い出し、いつでも翼を休めに帰郷出来るよう願つて

描きました。】

このようないで、連日早朝から終夜まで筆を執られ、限られた期限の六月末には原画が完成いたしました。

○ステンドグラスの制作

ステンドグラス本体の制作作業は、横田至明氏を統括責任者として現代壁画研究所で制作することになり、原画入手の平成十三年七月初旬から二ヶ月かけて、原画から本体の五分の一の線分図を作成し、各部分のガラスの色合い、材質、制作手法等作業の細部を検討し、材料の色ガラス、鉛線、型紙、手法に見合う特殊工具等を準備しました。

制作は九月から始まり、先ず線分図を原寸大に拡大した型紙を作り、それに原画と対比しつつガラスの色等をあわせ、全体の構図・色合い等を検討しました。そしてこの型紙を細かな部分毎に切断し、これに合わせてガラスをカットし、パネル毎に並べてガラスの色合い・構成の確かさを確認しつつ各部のパーツを確



▲工房内の作業風景

定しました。それらのパーツに絵付け、加工、焼き付けを施し原画と対比しつつ鉛線で各パーツをハンダ付けして、ついで六回にわたり平松画伯から現地工房において指導を頂きました。ステンドグラス制作に当たった工房にとつて今回の作業は、約二千もの桜花が咲き誇る約八十分の精緻華麗な絵が原画として提供されたことで、これに負けないようあらゆる技術を駆使し、可能な限り原画の雰囲気そのままをガラスで再現しようという担当者の思いが意氣込みとなり、工房の全力を挙げた作業となりました。五ヶ月間の血のにじむような努力が、平成十四年二月二十二日完成検査時の平松画伯の「よくぞここまで」という感嘆となり、記念講堂正面を飾るに相応しいものとなりました。

○講堂への設置

ステンドグラスの設置場所は、防大を訪れ現場をつぶさに検討された清家先生の指導もあり、五十周年記念講堂の正面入り口で、且つ学校のメインストリートといえる学生舎道路の行く手正面で、朝日に輝くように、当初南北で計画されていた講堂入り口を東西方向に変更し現在の位置に決定したものです。

平成十四年二月二十五日、ステンドグラスの各パネル三十二枚は湯河原の工房を出て防大に搬入され、一日がかりで枠に組み込まれました。初めてその全容が姿をあらわしたステンドグラスに立ち会いの人々から歓声が上がりま

した。

ステンドグラス及び原画を覆う白幕が外されると、講堂のホワイエは感嘆の声に満たされました。

防大同窓生の母校に寄せる熱い思いと、関係者の防大に寄せる強い期待がこのステンドグラスの完成につながつたものとの感を強くしました。



▲ステンドグラスセッティング時の平松画伯（後列右から5人目）と制作関係者

光に映えるその状景は、守るべき対象である日本のシンボルとしての富士山に、陸・海・空を示す「咲き誇る桜」「金色に輝く海」「紺碧の空」を配し、全体として国を守る「若人の城」小原台の生氣あふれる姿そのものであります。

○ステンドグラスの完成・除幕、原画・版画等の寄贈

ステンドグラスの除幕式は、記念講堂の落成式にあわせ学校行事として平成十四年二月二十八日に実施されました。

学校長以下の学校関係者、阿部会長以下の中窓会関係者等六十八名及び平松画伯ご夫妻、清家先生他のステンドグラス関係者八名が参加し、記念講堂落成のテープカット、安全祈願、施設見学の後、落成式・除幕式が行われました。

佐久間委員長の経過報告の後、平松画伯から原画が、阿部会長からステンドグラスがそれぞれ目録として学校長に贈呈されました。



△除幕式

その後、平松画伯から原画の役割を終えた日本画「若人の城」が防大に寄贈されました。又同様に、この絵の構想の基となつた「さくら」「富士山」「御殿場市」「逗子」「葉山長者が崎」のスケッチ及び下絵六点も、制作過程展示終了後学校に寄贈されました。これらの作品は、計画中の防大資料館に飾られる予定です。また原画の制作を終わられた画伯は、この事業に参加できた記念にと、作品「若人の城」をF8号の精緻な版画にされ、京都の工房で作成した限定版百部を同窓会へ寄贈されました。これらの版画は、防大卒業生が活躍している陸・海・空の部隊等に配布することといったしま

○制作過程展示・同窓会からの感謝状の贈呈

開校祭・同窓会記念行事にあわせ、平成十四年十一月十五日から十七日までの三日間にわたり、記念講堂ホワイエにおいて、ステンドグラス・彫刻像それぞれの構想段階から完成に至るまでの制作過程を写真パネル、原画、スケッチ、下絵、レプリカ等をもつて展示いたしました。



▲制作過程

創立五十周年に際して防大が整備した施設等の中心部で、防大の諸行事が行われる記念講堂の前庭部分にあたり、学生・職員はもとより全国から行事に参加する父兄をはじめ、内外の来校者が訪れる場所であります。このため、モニュメントには創立五十周年にあたって改めて頗みる建学の精神の表現と共に、記念撮影の背景として周囲の景観に調和する造形が求められました。



▲「新たなシンボル「国の護り」」

○計画の始動 ②経過の詳細

また、十六日の同窓会記念行事の中で、阿部同窓会会长から平松画伯・デザインシステム社・現代壁画研究所にそれぞれ感謝状が贈られました。

(竹下 茂之委員)

①概要
彫刻像「国の護り」は、防衛大学校同窓会が、五十周年事業の一環として防大に寄贈するため、ステンドグラス「若人の城」と対を成すモニュメントとして制作され、中央広場に設置されたものです。彫刻像が設置されている中央広場は、

彫刻像「国の護り」を制作していただいた愛知県立芸術大学教授 高橋 洋先生は、防大に対して深い理解を示されると共に強い期待を抱かれ、約二年間に亘って情熱的に制作に取り組みました。そして、文武両道をモチーフにした藝術的香りの高い彫刻像「国の護り」が完成し、平成十四年十月八日、除幕とともに同窓会から防大に寄贈され、校長から高橋先生に感謝状が贈られました。そして同日、高橋先生は「兜の記念碑「国の護り」について」という次のような一文を寄せられました。

○制作者の決定

「初めて記念碑設置の候補地に立ち、同窓会の構想を伺い、又防衛大学校の想いを知った時のことを昨日のように思い出す。この大学の精神は「真勇」であり「廉恥」「礼節」である。又「文」と「武」がバランス良く教育に採り入れられ、その指導を受けて「陸・海・空」の若人は自らの肉体と精神を成長させ、卓立つて行く。その人々は國を護り、そして世界の平和をも願つてゐる。

五十年の歴史の中に共通した理念、精神、これを基にしてこの形が出来た。この兜を使つた「國の護り」の記念碑は、この様な多くの人々の想いが籠つた「形のメッセージ」である。」

○構想の具体化

平成十三年二月、高橋先生は構想を始めたため防大を初訪問、その後も度々防大に足を運ばれ、夏には武の象徴たる「兜」を主題とする事が決定されました。秋には、若人の無限の可能性を表現し天輪と勉学を象徴する羽ペンを配するというディテールと、学生綱領の三徳目及び陸・海・空を示す「三本の柱の台座」で

支えるモニュメントの構成が先生から披露され、委員会も了解し、その後、彫刻像の名称は応援歌の一節から「國の護り」とすることとなりました。

設置場所は中央広場の芝生上で、ステンドグラスと相対し、方向は広場全体の整合性と記念撮影時の陽光等の効果を総



▲「アトリエの高橋洋先生」

合的に考慮して西向きと決定しました。彫刻像の大きさは、広場とのバランスを考慮し、高さ5m（像・プロンズ製3.5m・台座・黒御影製1.5m）重量は約6tとなりました。

○制作の開始

粘土による原型の制作は平成十四年二月、彫刻家 加納秀美氏を助手として、愛知県日進市の高橋先生のアトリエにおいて開始されました。四月中旬には石膏による雌型取り、雄型の制作（於 東京赤木石膏研究所）へと作業が進められました。この石膏像雄型は作品の仕上がりに大きく影響を与えるものであるため、里帰りした高橋先生のアトリエにおいて、造形や仕上がりの表面状態に至るきめ細かい作業が続けられる一方、五分の一大のマケットにより風格と品位を醸し出すための着色の検討も進められました。



▲「マケット」



▲「台座の設置 (14.5.14)」

○石膏像からプロンズへ

石膏像の仕上げと着色は、五月下旬の委員会による視察を経て、更に完成度が高められ、七月十五日、富山県新湊市のクロタニコーポレーションに移送され、プロンズ像の鋳造工程へと移行しました。

○彫刻像の完成・除幕及びレプリカの寄贈

プロンズ像は、工場に於ける高橋先生の監督を受けつつ九月初旬に仕上がり、委員会による確認を経て細部の仕上げが行われ、九月二十四日には防大へ輸送されて台座と結合され、彫刻像「國の護り」として完成いたしました。

十月八日、新図書館の落成に併せて彫刻像の除幕と共に同窓会から防大に寄贈され、校長から高橋洋先生に感謝状が贈呈されました。また、将来資料館に展示することを視野に入れて別に制作された、本体の五分の一大のレプリカが同日、高橋先生から防大同窓会に寄贈されました。

台座は岡崎市の武嶋石材店において無垢の黒御影石により制作され、五月中旬、建設工事途中の中央広場に設置されました。これに先立ち中央広場の施設工事を担当した石本設計事務所と安藤建設の協力により、地震時の建築物への影響や像自体の安定についての検討が行われ、充分

な安全性を確保する処置が施されました。



▲「除幕式に於ける学校長からの感謝状の贈呈」

○制作過程展示・同窓会からの感謝状贈呈

制作過程の展示については、ステンドグラスの項で記述されていますので重複を避けここでは割愛いたします。

十一月十六日の同窓会記念行事当日、記念講堂において阿部同窓会会长から高橋先生に対し制作へのご尽力とレプリカの寄贈に対し感謝状が贈呈されました。

彫刻像を生み出す構想の段階から設置までの長期間にわたる高橋先生の情熱的な取り組みと、先生の健康を気遣い常に寄り添いサポートされた奥様、加納先生、三越日本橋本店美術部、毎日アートコレクションの積極的な支援を得て素晴らしい作品が完成したことに対し、プロジェクトに携わった関係者一同感謝を込めてお礼を申し上げます。

（村岡 亮道委員）

①防大における記念講演の実施 (三)記念講演

平成十四年十一月十六日 一三〇〇～一四三〇の間、防大記念講堂において防大創立五十周年を記念する講演会を実施しました。講師は三浦朱門氏にお願いし、「望ましき自衛官像」という演題で実施していただきました。聴講者は、記念行



▶「三浦先生」



▶「上級生による講演」

事に参加した同窓生（家族を含む）約六百名に、招待者（ご遺族を含む）約百二十名と防大在校生・職員の約千名を加えた約千七百名になりました。

講演の要旨は、「防大五十年の歩みの背景に常にあつたのは、「憲法の問題と且つ戦後の日本人の軍事的無知」というものである。これらの事は五十年経つた今も基本的には変わっていない。さらに加えて着目すべき事は軍及び軍人が持っている保守性というものである。これらのが困難な事柄を超克するためには、自らのアイデンティティを確立するとともに他人や他国のことも良く理解できる人間にならなければならない。これから先も様々な障害があるだろうが、恐れず勇気を持って自分に誠実に、そして民族に対する責任感を持つて、問題の解決に向かって行っていただきたい。」というものでした。参加者は大きな感銘をもつて聴講しておりました。

との懇談会における「三浦先生談話録」と併せ本記念特集号に掲載させていただきました。

また本講演を、防大創立五十周年を記念する冊子にまとめ、一月末までに二千二百部を作成いたします。これらの記念冊子は、主として防大在校生や陸・海・空の各幹部候補生学校等に配布し、将来の自衛隊を担う若い幹部候補生の座右の書として活用していただくことにしておられます。

②同窓会支部が実施する地方講演会への支援

各支部は、それぞれが計画する創立五十周年記念事業の一環として地方講演会を独自に開催しております。この地方講演会を支援する目的で、所要経費をそれぞれの支部に対しても平成十四年十月までに配分いたしました。

(原 充宏委員)

支部等名	実施日時	演題等	講師
北海道 地域支部	十五・二・二十二 (ホテルラフィート 札幌(予定))	十周年を迎えて [防衛大学校創立五 十年]	防衛大学校 副校長 安岡 義純氏
東海支部	十四・十二・十五 (名古屋ホテル・キ ヤッスルブランザ)	勝利への道	防衛大学校 アメフト部監督 木野 錦一氏(七期生)
関西 地域支部	十四・八・二十五 (金沢全日空ホテル)	「おしゃべりコンサ ート」	防衛大学校 教授 金沢工業大学 下垣 真希さん
北陸支部	十四・三・二(大 阪ホテル・ニューオ ルタニ)	「教育と付加価値に ついて」	防衛大学校 教授 高森 年氏
広島 地域支部	十四・十一・二十三 (広島弥生会館)	私が選んだ道に悔 いはない」	防衛大学校 教授 野川 豊氏
西部 地域支部	十五・二・二十二 (福岡全日空ホテル) (予定)	「最近の国際情勢と 防大教育(仮題)」	防衛大学校 教授 西原 正氏
沖縄 地域支部	十四・九・七 (パシフィックホテ ル沖縄)	中の中出来事、現職 官に望むこと等」	元航空幕僚長 藤田幸生氏

四記念マーチの作成

①概要

外国の士官学校や旧陸海軍等の行進曲には、その組織をイメージさせるような独自性のある名曲があります。

残念ながら防大には、観閲行進、課業行進等に使用されるそのようなオリジナルの行進曲が事実上無かつたことから、創立五十周年を記念して、同窓会として記念マーチを作成して防大に贈呈しようという事が本事業であります。

一月から防大吹奏楽部OB会に担当していただきましたが、その際委員会では次の事項を方針として五十周年に相応しい曲を作成する事にいたしました。即ち、○日々の課業行進、観閲行進などに常用でき、防大生の生活・訓練等に密着して輝かしい伝統作りの一環となること。

○防大らしい若さ溢れたメロディーで、題名には日本語を用いること。
○なるべく多くの曲を募り、そしてその中から複数曲を選考すること。

②専門作曲者への依頼

専門の作曲者の人選は、防大、自衛隊に正しい理解を有し、音楽界においても実績のある著名な方々の中から次の四氏に白羽の矢を立て、作曲を依頼いたしました。

○北村憲昭氏：防大吹奏楽部指導者に正しい理解を有し、音楽界においても実績のある著名な方々の中から次の四氏に白羽の矢を立て、作曲を依頼いたしました。

○吉永光里氏：防大生の若い感性に近く、自衛隊を良く理解している女性シンガーソングライター。

○藤倉大氏：防大吹奏楽部指導者

月からは、贈呈曲の編曲、良質の録音及びDAT化、CD化、楽譜の作成・配布準備等を実施して、予定通り十一月十六日には記念講堂において、作曲者参加のもと防大吹奏楽部の演奏で贈呈曲の披露及び防大への贈呈式を行うとともに、翌十七日の小泉総理臨席の開校祭観閲式において、初めて贈呈曲が観閲行進曲として演奏されました。

審査メンバーは、阿部同窓会会长を審査委員長として、同窓会・防大吹奏楽部OB会関係者、学校長をはじめとする防大関係者、陸・海・空の各音楽隊長・専門の作曲家等の音楽関係者等十三名で構成し、決められた審査手順に基づき、厳正かつ整齊と審査を行いました。

当初計画では、優秀曲二曲を選抜する予定にしておりましたが、防大側からのたつての要望もあり、二曲を追加し、公募曲は四曲を贈呈することがになりました。贈呈曲はそれぞれ優れた特徴を有しており、今後の防大において諸活動に貢献するものと確信しています。

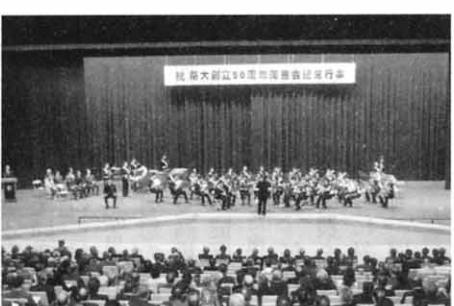
公募曲の募集開始から約一年後の平成十四年六月九日、楽譜審査を通過した七曲の演奏審査を防大において、海自横須賀音楽隊の演奏支援を得て実施しました。審査メンバーやは、阿部同窓会会长を審査委員長として、同窓会・防大吹奏楽部OB会関係者、学校長をはじめとする防大関係者、陸・海・空の各音楽隊長・専門の作曲家等の音楽関係者等十三名で構成し、決められた審査手順に基づき、厳正かつ整齊と審査を行いました。

審査メンバーやは、阿部同窓会会长を審査委員長として、同窓会・防大吹奏楽部OB会関係者、学校長をはじめとする防大関係者、陸・海・空の各音楽隊長・専門の作曲家等の音楽関係者等十三名で構成し、決められた審査手順に基づき、厳正かつ整齊と審査を行いました。

○田辺恒弥氏：第二期生として防大入校後、音楽界に転身し、現在、武蔵野音楽大学作曲科の教授。

③公募曲の審査

公募曲の募集開始から約一年後の平成十四年六月九日、楽譜審査を通過した七曲の演奏審査を防大において、海自横須賀音楽隊の演奏支援を得て実施しました。



▲披露演奏

④CD化等

当初計画では、百五十枚のCD作成を予定しておりましたが、各方面からの要望があること、経費面でも千枚作成しても大差がないこと等から千枚作成しました。当初計画百五十枚分については、事業委員会の経費負担とし残余八百五十枚分については防大吹奏楽部OB会の負担といたしました。なお、作曲の著作権は

防大ではなく同窓会が保有することになりました。

CD及び楽譜は防大及び各自衛隊の音

動中の作曲者。

○吉永光里氏：防大生の若い感性に近く、自衛隊を良く理解している女性シンガーソングライター。

○藤倉大氏：防大吹奏楽部指導者

経験者で現在、英国において作曲活

樂隊等に配布し、今後の演奏活動等に活用していただけたようでした。

(5)贈呈曲の概要

防大に贈呈いたしました八曲の概要是次のとおりです。

(曲名・作曲者名・作曲者のコメントの順で記載)

○部外作曲家への依頼曲

*「勇姿」北村 恵昭 (オーケストラ指揮者)

恒久平和を担う若人の意氣を想い、その志に応える曲とした。多くの人に訴えるため「For Peace Forever」の語感をモチーフにした。

*「み・ら・い・へ」吉永 光里 (シンガーソングライター)

歌詞を付けたロック調の原曲を作つてから行進曲にアレンジした。歌え

る、明るい、若い、活潑、歯切れ良い、メロディが覚えやすいを基に前向きなイメージ、未来へ一步でも前進する若い足音に花を添えられたら嬉しい。

*「栄華壯觀」藤倉 大 (英國在住作曲者)

学生が堂々と行進し、その先には世界を舞台にして活躍する姿があるといいうイメージを基に作曲した。

*「我が山河」田辺 恒弥 (武藏野音大作曲科教授)

日本人なら誰でもが心のどこかに持っている「日本」への愛着、誇り及び四季の変化の美しく豊かな表情を念頭に、明るくさわやかな行進曲とした。

第二期生であったことに心から誇りました。

○一般からの公募曲

*「飛翔」神 明 (陸自・中央音楽隊)

防大の制服姿は爽やかで凛々しく、若々しい躍動感とともに国防という崇高な使命感を輝くまなざしから感じ、四年間の厳しい規律と訓練を経て校章の如く逞しく、力強くはばたく姿をイメージした。

*「輝く紋章」堀 滝比呂 (陸自・中央音楽隊)

校章及び襟章をイメージした。祖国と国民の盾となると志願した若人の心意気を詠つた。

*「小原台の青春」澤辺 泰紀 (海自・横須賀音楽隊)

前途有望な若人が爽快と、かつ優雅に行進する様をイメージし、曲の一部に学生歌を取り入れ愛校精神の鼓舞を図つた。

*「若き精銳」岩下 章一 (海自・東京音楽隊)

将来の自衛隊を背負つて立つ小原台の若き精銳が訓練や勉学に励む、希望に満ちた激励とした姿をイメージした。

（田中 厚彦委員）

（五）記念品等の作成

①記念ビデオ

防大五十年の歩みを回顧し同窓会の志を思う縁とすべく、記念ビデオを作成しました。

タイトルは「任重く道遠し（小原台を

駆けた若人）」です。構成は、防衛大学校の誕生と発展、防大生の生活、防大五十年の回顧、同窓会活動、現在の防大、及び創立五十周年記念行事等とし、防大発展の姿と新たな飛躍のための努力を強調することにしました。この中で、BGMとして記念マーチも取り入れています。

マザービデオ（DVD）一巻を防大へ寄贈すると共に、醸金者への記念品及び地連広報用等として約八千本のVHSビデオを作成しました。ビデオの制作は、各自衛隊関連のビデオ制作協力に実績のある「あだちビデオ制作室」に委託すると共に、シナリオ作成については六期生の桑原泰彦会員にお願いし、写真・映像資料等の提供や編集支援について陸上自衛隊OB久保田博幸氏の絶大な協力をいたしました。

収録時間は、約五十分で、創立五十周年記念行事や式典の模様も取り込むため、完成は平成十四年十二月となりました。同窓会記念行事においては、ビデオ未完成の段階のため、贈呈目録及びシナリオ台本を同窓会長から防大校長にお渡しすると共に、ビデオの縮小版（約十五分もの）を参加された皆様に紹介させていただきました。



（小泉 進委員）

因みに、タイトルの「任重く道遠し」は二期生卒業式において小泉信三先生が卒業生に対して期待を込めて諭された言葉です。それは「任重く道遠し。私は、諸君が十分の用意を持っていることを信じます。諸君が常に心に世界の平和と国民に対する奉仕を忘れず、いよいよ心身を鍛練して、よく任務に堪える人となることを期待します。」という言葉の中か

ら引用させていただきました。なお、作成した本ビデオは、非売品ですが、若干の予備もありますので、醸金者以外で希望される卒業生に別途実費領布も予定しています。（細部については、次章の最後に掲載しています。）

部を出版して、防大の要望を満たすことになりました。

ブックレットは「防衛大学校五十年のあゆみ」と題し、予定通り刊行し、記念式典において来校者に配布され、好評を博しました。

(福地 建夫委員)

③モニュメントの絵葉書セット及びパンフレットの作成

○モニュメントの絵葉書セット

記念事業に対する醸金者への記念品として絵葉書セット八千部を作成して記念ビデオと共に送付することにしました。絵葉書セットは、ステンドグラス、彫刻像、中央広場及び防大全景の四枚の写真で構成しております。

○パンフレット

モニュメント（ステンドグラス及び彫刻像）の写真入りパンフレットを同窓会名で作成し、三千部防大に寄贈しました。このパンフレットは五十周年記念式典招待者及び在校生に配布されました。

また、追加処置として千二百部を作成し、約千部を同窓会五十周年行事に参加した卒業生に配布するとともに、モニュメント制作者の平松、高橋両先生に各五百部ずつを贈呈いたしました。

(村岡 亮道委員)

(六)醸金者への記念品の発送

①同窓会記念事業に賛同され募金に協力していただいた七千七百有余名の醸金者に対し、小記念品として「記念ビデオ」と「モニュメントの絵葉書セット」の二点を送付する準備をしています。

(内村 彰和委員)

(七)MC-I事業提案書の作成と同窓会への提案

防大の創立五十周年記念事業を記念してステンドグラスやモニュメント等を残すことの他に、これを機会に新しくスタートするような事業は考えられないものどうかとの提案が、記念事業委員会の席上でありました。他の事業が記念事業

の実施とともに終わるのに反し、この提案はそこから始まる事業であり、「記念植樹」の一つであるとも言えます。このような提案の中の一つが本構想で、その主旨は「全国に散らばっている同窓会会員の軍事に関する識見を結集して、國家・社会に対し軍事的考慮の重要性を正しく発信するメカニズムを構築する」、また「それには事務所や多大な設備投資などを必要とせず、同窓会の限られた資金で設置・運用できるようインターネットを利用したシステムではどうか」というも

のでした。

現役の会員の皆様に対しても、各駐屯地・基地ごと集約した形で送付します。この際、梱包は、個人宛の荷姿を各部隊ごと小梱包し、更に駐屯地・基地ごと大梱包し、それぞれに名簿を添えて送付します。

・タイ・シンガポールの醸金者に対しては両国の大使館を通じて送付する予定です。

・名簿は平成十四年十二月末現在を平成十五年一月中旬までに掌握・最新化し、記念品が作成され次第同二月初旬頃から発送する予定です。

③再発送の処置

・万一、宛先不明等で返送される記念品につきましては、速やかに住所を再確認して、二次発送を行います。

・再発送は二次までとさせていただき、不明及び残余の記念品は同窓会本部へ申し送ります。

記念事業委員会は、便宜上この提案を「MC-I (military cyber institute)」と仮に名付け、同窓会が行う中・長期的活動の一部と位置付けて、記念事業委員会として「提案書」を作成して同窓会に答申することとしました。記念事業委員会は、そのための経費として記念事業醸金のうちから平成十四年度に五〇〇万円を充当し、「MC-I 提案書作成のためのプロジェクト・チーム (MC-I 検討チーム)」を編成しました。MC-I 検討チームは、同窓会本部の中に連絡用のパソコン一式を設置するとともに、この構想を実現するためにはどのような事業モデルの選択肢があるかを検討するため、同窓会員が経営する企業に研究を委託し、その研究成果に基づいて「提案書 (案)」を作成しました。

IV 顕彰室・資料館の整備支援

防大の創立五十周年事業の一つとして、防大の歴史や学生生活を内外に伝えるための「資料館」の整備が計画されました。そのねらいとするところは、「学校の歴史的経緯、教育研究成果、校友会活動を含む先輩・学生の活動成果、卒業生の活躍の状況等を学生・職員に認識させ、誇りを持たせる訓育環境を設置するとともに、見学者に対しても、一日で防大の沿革や現状等が理解できるようにし、一般社会に防大への正しい理解と関心を

MC-I 事業提案書」に纏め、同窓会本部に答申しました。提案書の内容は、MC-I 構想の趣旨・原則・範囲等のいわば構想の「理念」、構想実現のための事業モデルに関する複数の「選択肢」、各モデル案の「経費見積」等がありました。

(参考)「MC-I 事業提案書・防大同窓会への提案」抜粋

MC-I 構想のキーワードは「結集」・「軍事」・「発信」の三つです。すなわち、「全国に散らばっている同窓会員の識見を「結集する」こと、安全保障や防衛といった概念だけではなく「軍事」という側面も考慮に入れること、それを同窓会の事業の一つとして国家・社会に「発信する」ということです。同窓会が提案書に示された構想を、実現可能な形として発足させることになれば、同窓会が親睦団体の域を越えて、国の政策決定や社会システム作りに「発信力」を持つことができることになり、その意義は極めて大きいものであると考えられます。

(志方 俊文副委員長)

記念事業委員会は、案に示された幾つかの選択肢を、同窓会の一事業として実現可能なものかどうかという観点から吟味し、その検討結果を「防衛大学校同窓会・防大創立五十周年記念事業委員会、一般社会に防大への正しい理解と関心を

MCI-事業提案書（防大同窓会への提案）抜き

平成十四年十月二十三日
抜き

まえがき

●これまでの経緯

平成六年、当時の中尾時久（一期・陸）同窓会会长の発議によって、同窓会の活性化を目指とした「防衛大学校同窓会・将来構想委員会（将来構想委）」が発足した。同窓生の殆どが現役の自衛官であった時期の同窓会活動は、どうしても式典への参加や事務連絡に終始する傾向にあつた。自衛隊を退官した同窓生が増えたつれて、同窓会活動は相互の親睦だけではなく、何らかの「構想（方向性）」を持つた活動も行うべき時期に至つたのではないかとの認識が同窓生の中に生まれた。

「将来構想委」は、志摩篤（一期・陸）、小西岑生（一期・海）、阿部博男（一期・空）会員を中心としてOBとなつた同窓生が、現役同窓生の支援を受けながら、約二年間にわたりて、会則改正、事業構想、財政構想等の分野について活発な審議を行い、その成果を平成七年十一月の総会で報告した。この活動によって、会則が改正され、同窓会本部を小原台から東京都内に移すなど、諸活動の基盤を確立することができた。

平成七年の総会においては、将来構想委の答申の提案を受けてその内容を実行に移すための委員会を設けることが決定

された。これに基づき、当時の小西岑生同窓会会长のもとに、阿部博男会員を委員長とする「事業推進委員会」が発足した。この推進委は同窓会の今後の活動の基盤を決定するため、約一年間にわたつて真摯な活動を行つた。その成果として、「支部等の育成」・「ホームカミングデイの実施」・「学生の悩み相談」・「趣味の分野の期生間交流」等を実行しつつ、中・長期的活動として「同窓会ネットワークの構築」・「同窓生の各種能力の活用」、「防衛問題への寄与」等を中心とした活動を推進することが決定された。

平成七年の総会においては、事業推進委員会とともに「防大創立50周年記念事業委員会（以下、記念事業委）（佐久間一（一期・海）委員長）」の設置が決定された。記念事業委は、防大創立50周年としてふさわしいもので後世に残す価値あるものを事業の重点とし、21世紀における飛躍を基本理念として事業構想を具体化し、記念講堂ステンドグラス及び中央広場モニュメントの寄贈、顕彰室・資料館の整備支援、記念行事（記念講演会、祝賀会等）の実施、記念マーチや記念ビデオの作成、醸金者名簿の作成等の事業を計画してきた。

これらの記念事業の内容を詰める段階のように、この機会に種を蒔き、将来こ

れを育ててゆくような活動を提案する考えが平成十二年夏から浮上した。それは「全国に散らばつてゐる同窓生の軍事に関する識見を結集して、国家・社会に対する軍事的考慮の重要性を正しく発信するメカニズムを構築してはどうか」、また「それには事務所や多大な設備投資などを必要とせず、同窓会の限られた資金で作れるインターネットを利用したシステムではどうか」というものであった。記念事業委は、便宜上この提案を「MCI（Military Cyber Institute）」と名付け、同窓会が行う中・長期的活動の一部と位置付けて、構想を具体化するための事業を50周年記念事業の一環として平成十三年度の代議員会（平成13年12月7日）に提案した。代議員会においては、記念事業委がMCI提案書を作成して同窓会に提案すること、並びにそのため経費として記念事業醸金のうちから平成十四年度に五〇〇万円を充當することが承認された。

記念事業委は、「MCI提案書作成のためのプロジェクト・チーム（MCI検討チーム）」を編成し、MCI検討チームは、同窓会本部の中に連絡用のパソコン一式を設置するとともに、この構想を実現するためにはどのような事業モデルの選択肢があるかを検討するため、同窓会員が経営する企業に研究を委託し、その研究成果を平成十四年八月末に「MCI事業モデル提案書」（以下、「モデル提案書」と呼称する）として受領した。

●本提案書の主旨

記念事業委は、MCI検討チームから

報告された「四つの事業モデル」（内容については、「MCI事業モデルの提案書」参照）を平成十四年九月二十五日の委員会で審議し、同窓生の理解を得られ、かつ同窓会が実行に移せるよう「一つの現実的な構想案」に纏めることを決定した。本提案書は、記念事業委として、正式に同窓会本部に提出する「防衛大学校同窓会・防大創立50周年記念事業委員会、MCI事業提案書」である。提案書は、第1章にMCI構想の趣旨・原則・活動等のいわば構想の理念、第2章に構想実現のために研究を委託した成果である複数の事業モデル案の内容、第3章に各モデル案の特徴と評価、第4章に各モデル案の評価を踏まえて記念事業委として同窓会に提案する事業の提案内容を記載している。

記念事業委としては、同窓会が、本提案書に示す「事業化構想」を活かして、平成十五年度に独自のホーム・ページを開設する活動を実行に移すことを採択し、「MCI準備委員会」を設置して、積極的に取り組むことを期待している。さらに、平成十六年度以降の活動については、同窓会が年度ごとに活動実績と情勢を勘案して判断すべきことであるが、本提案書に示した中期的な構想を実現することによって、同窓会が親睦団体の域を超えて、目的の一つでありながら今日まで具体化することの出来なかつた国家・社会的な活動、すなわち国の政策決定や社会システム作りに軍事的側面を加えることの重要性を「発信する」価値は、極めて大きいものと確信する。

平成六年に一期生が中心となつて挑戦

した「将来構想委員会」の構想が策定され、から8年後、また平成七年の「事業推進委員会」による再挑戦から7年後の今日、同窓会が新しい世代に移行する重要な節目の時期に、一期生のリーダーシップのもとに、MCI事業が「具体的な同窓会事業活動案」として、同窓生の前で次の世代に「提示され」「採択され」「手渡される」意義は大きい。防衛大学校が創設され半世紀を経過した今、その50周年記念事業の一環として、MCI事業構想をスタートさせることは千載一遇の機会である。同窓生各位の御賛同を得られることを強く期待してやまない。

第一章 MCI事業の構想

1、MCI事業の趣旨

わが国の国家運営では、何か物事を決めるに際して、政治・経済・外交・安全保障（以下、本文では軍事と表現する）の四本柱のうち、軍事的視点が抜けていることが多い。これには幾つかの原因があるが、その一つは、軍事に関する知識や体験が整理総合されていないため、軍事的視点からの考察をすることが難しいことである。

政治、経済、外交についての政策判断や学術研究をする際に、参考にできる「軍事的識見が整理総合されているセンター」が無いために、どうしても軍事的な視点が疎かになるのである。現在、意ある者が中心となつて運営している軍事・防衛の課題を中心とした研究所も幾つかあって心強い限りであるが、それぞれが研究の基礎となる識見を整理総合す

る段階で時間と労力を必要とすることがら、研究そのものに充當する時間や労力が不足する共通の問題に直面している。もし、このようなセンターが設立されれば、これらの各研究所も資料を効率的に整えることが可能となり、一举に研究効率を上げることが可能となる。

他方、現在の政治・外交・経済界では、それを良いことに、意識的に軍事的な思考を排除する傾向さえある。反対に、これに気がついている政治家、財界人、外交官は多いのだが、自分の力で軍事・防衛に関する識見を整理統合する余裕がないのが現状である。

ここに提案する「MCI（Military Cyber Institute）構想」は、このようなわが国の現状を改善するために、防大同窓生の力を結集して国家・社会のための活動を開拓しようとするものである。名稱については未だ仮称であつて、同窓会が本構想を実行に移す場合には、さらにつつに理解しやすい名前（例えば、防衛情報機構、DIO）等に変えるべきものであるが、ここでは便宜上「MCI」と呼ぶことにする。

2、MCI事業実現のための課題と対策

軍事・防衛に関する識見を整理・総合できるセンター設立の趣旨に賛同が得られたとしても、現実にこれを実現するためには、二つの大きい問題を克服しなければならない。第一は、わが国でも最高

レベルの軍事知識や体験を持った者が識見を結集することである。第二は、実行のための組織と当面（おそらく一二三年）の資金を準備することである。ある程度

の年月継続した実績がないと、官公庁や産業界や研究所等から「運転資金」に見合うだけの「資料提供料（委託料）」を得ることは難しいからである。

まず、第一の問題は、防大同窓会会員の知識を結集して設立するのが一番早道である。これに勝る母胎は日本には無いはずであり、防大同窓生の力を結集してもそれが出来ないとすれば、日本にそれを出来る集団はないからである。もちろん、発足後は、防大同窓生以外の者の参入も受け入れる必要がある。

現在、軍事の各部門で貴重な識見を身についた同窓生が日本全国に散在して、それぞれに活躍しているが、それらの識見は「結集され」「総合化され」ではない。各同窓生が自分のカバーできる識見を予め登録してセンターワーク（センターの専従員がこれを組織化して各分野からの資料要求に応えられる態勢をとる）がMCIの具体的なイメージである。これからますます発達するコンピューター・ネットワーク技術を活用して迅速に情報を交換し、各種の情報を集積・分析・加工して付加価値を加えること等によって、MCIは軍事に関する高いレベルの識見を結集し、国内外に安全保障関連の役に立つ情報を仕事提供し、同窓会はこれを通じて内外に大きい「発信力」を持つことができるようになるであろう。

第一は、「任意団体」のまま同窓会の下部組織として活動規模を少しだけ拡大する選択肢である。本来、会員相互の親睦を目的とする「任意団体」である同窓会は、もともと財産的権利能力がなく、受託活動（第三者から活動を委託され、それを行つて収入を得る活動）に限界があり、大々的な活動はできない。しかしながら、防衛大学校同窓会の「下部組織」として、常に完全な監督下におくことができるメリットはある。

第二は、防大同窓会の外に出して、防大同窓会が外部より何らかの形で関与する組織形態とする選択肢である。「何らかの組織」としては、次のようなものが考えられる。

●「特定非営利活動団体（NPO）」とする。（同窓会が人材を送り込むことによつて関与することができ

- 「財團法人」とする。(この場合は、資金供給源の影響を強く受ける)
- 「既存の財團法人の下部組織」とする。(自主性を失う可能性が大きい)
- 「株式会社」とする。(営利追求が第一義となり、設立の目的に反する)

MCIを「特定非営利活動団体(NPO)」として設立することは、それほど困難ではない。MCIは利潤追求を目的としておらず、12分野にわたる特定非営利活動の幾つか活動に該当すると考えられ、また対象となる団体が満たすべき条件の全てを満たしているからである。しかししながら、構成員の資格について不当な条件を設けることができないから、いわゆる「好ましくない者」を排除することが難しいことが一つの難点である。

以上述べたとおり、MCI事業をどのような組織形態で行うかは大きな課題であり、MCIの目的である「防大同窓会員等の識見を結集して国家・社会に対し軍事的考慮の重要性を正しく発信することを実現するためには、「何らかの組織」を設立することが必要である。その具体的な方策については、第4章において提案する。

3. MCI運営の原則

MCIの設立は、情況不明の中で「0」から「1」を創出するものであるから、柔軟な対応を必要とするが、それだけに次の七つの原則を堅持する必要がある。

● 第1原則（目的の原則）

MCIは、防大同窓会員等の識見を「結集」して、国家・社会に対し軍事的考慮の重要性を正しく「発信」する

ことを目的とするもので、全ての活動は、この目的に沿うものでなければならぬ。政治的活動、利潤の追求、他の行動（防大同窓会員以外の者の排除）等は決して行わない。

● 第2原則（自主活動の原則）

「何らかの組織」としての正式発足までは、原則として「自主活動」により体制を整備する。すなわち収入は期待しない。「防大同窓会員の社会的貢献活動」として一定の期間（当初の段階）は、同窓会の資産で運営する。特定の政党・集団・企業等からの資金を投入すれば設立は容易であるが、運営の自主性を失う可能性が大きいからである。

● 第3原則（負担軽減努力の原則）

後は、「申し込み」があれば「受託作業」を行い、同窓会の負担を「軽減」する。ただし、この努力はあくまで一次的なものとする。（親方、日の丸的な体質は排除する）

● 第4原則（チェック機能担保の原則）

毎年度のMCI活動内容については、同窓会の意志に基づいて決定する。すなわち、前年度の代議員会にそれまでの活動結果を「報告」するとともに、次段階に進むか否かの「決定を仰ぐ」ことによって、各段階で代議員会のチェックを受けることとする。

● 第5原則（ハイエスト・クオリティ維持の原則）

MCIは、コンテンツの軍事的識見の質に関する限り、わが国で最高レベルを維持するよう努める。防大同窓会員名簿の更新・維持・閲覧のサービス

生の軍事的識見を結集して出来あがめたMCIより高い質のサイトがわが国で出来ることがあれば、それは防大教育の鼎の軽重が問われるからである。

● 第6原則（公開と秘密保全の原則）

MCIは、あくまで防大同窓会員の財産であり、同窓会員は全ての情報を自由にアクセス（ただし、アクセスのために必要なIDを持つための費用等は会員の負担となる）できる。ただし「限られた情報」すなわち受託作業で委託者が「秘密」の保全を要求した情報等については「秘密保全」を厳守する。

● 第7原則（多数参加・相互依存の原則）

MCIは、ハイエスト・クオリティを維持するといつても、貢献意識や情報処理能力の高い一部の同窓会員の独占物になつてはならない。可能な限り、多数の同窓会員等が参画するように常に努力しなければならない。また、現在すでに活動中の「自衛隊に関係の深いシンクタンク（例えば、日本戦略研究フォーラム、ディフェンスリサーチセンター、平和安全保障研究所、森野軍事研究所等）」の研究活動や、自治体の防災訓練（CPX）支援会社（例えば、SBS社）の営業活動をMCIのデータベースにより支援し、相互依存の体制を確立しつつ部外力の活用、ベンチャーエンタープライズの育成に留意する。

4. MCI事業の活動（内容区分）

MCI事業の活動は、内容によつて二つに区分する。すなわち、同窓会員自身のために行うサービスである「自主活動」と、他の組織や個人から委託された活動

を有料で行うサービスである「受託活動」である。任意団体である同窓会が、同窓会員のため「自主活動」を行うことは当然であるが、運転資金を確保するため有料で行う「受託活動」は原則として不可能である。したがつて、当初は「自主活動」を行い、その後見えて同窓会が「何らかの組織」を作る段階においては、その組織の性格によつては「受託活動」が可能となる。以下、それぞれの活動の内容について説明する。

（一）自主活動

● 情報システムの構築・データベースの構築（同窓会員、軍事的知見、軍事情報、検索制御及び利用者登録データベース）、ネットワークシステムの構築

● ホームページサービス・MCIの紹介

介、軍事トピックス、各データベースへのリンク、掲示板へのリンク、各種検索リンク、各種登録

● 同窓会名簿閲覧サービス・同窓会員名簿の更新・維持・閲覧のサービス

● 掲示板サービス・軍事イベント等の情報照会、チャット窓口、その他コンシエルジュ

● 軍事的知見保有者の紹介・知見保有者の自動検索（自動検索）、能力者間のメーリングリスト作成（MCI仲介）

● 軍事関連情報及び資料の紹介・軍事情報

報の閲覧、ダウンロード（自動検索）、

情報源の紹介（MCI仲介）

●ボランティア活動支援..各種ボランティア活動の組織つくり支援

- (2)受託活動
- 軍事専門家の派遣..コメンテーター、防衛庁事務手続き代行

●軍事関連情報及び資料の紹介..閲覧、ダウンロード自由に（自動検索）、情報源を紹介（MCI仲介）

- スピード突貫翻訳..豊富な要員により短時間に大量の翻訳（特にロシア語、中国語）
- 防衛関連資料の電子化..戦史、防衛庁資料等、特に専門家でないと出来ない分野

●教育..管理者或いは子供教育、徳操教育

●防衛諸活動支援..軍事関連資料の収集、軍事関連資料の作成、データー加工、防衛庁提出物の事前審査、各種分析、シミュレーション、その他

- 受託活動を行うに際しては、受託の契約から業務処理の統制、成果物の提供にいたるまで一切の責任はMCIが負う。また、予想される受託先としては、「既存の研究機関」「防衛産業」「マスメディア」「防衛庁等官庁」「地方公共団体」「その他」が考えられる。

- 5、活動の段階的区分（フェーズ）

MCI構想は、本来、中・長期的なものであるから、「小さく産んで、大きく育てる」を原則とし、活動は次のような

五つのフェーズに区分して段階的に充実し発展させる。

●フェーズ1（防大ホームページ開設段階）..

(1)防大同窓会ホームページを開設する。

(2)データベースの構築を開設する。

(3)ホームページサービスを開設する。

(4)同窓会名簿閲覧サービスを開設する。

(5)掲示板サービスを開設する。

●フェーズ2（情報システム構築段階）..

(1)情報システムを構築する。

(2)献志願者の登録を開始し、登録者の取り扱う部門を決定する。当初の貢献志願者数は、同窓生（現役の同窓生を除く）約八、〇〇〇名の1%（約一〇〇人）と見積もってスタートする。

(3)軍事的知見保有者の紹介を開始する。

(4)新組織発足の準備を実施する。

●フェーズ3（タスク・フォース編成段階）..

(1)分野別タスク・フォースを編成する。例えば

●フェーズ4（デモンストレーション段階）..

(1)MCI活動（タスク・フォース活動を含む。）を部内外に展示する。

(2)同窓会ホームページの一部としての「防大同窓会MCIサイト」を完成させる。

(3)新組織発足の準備を実施する。

●フェーズ5（新組織発足段階）..

(1)新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

(2)全ての自主活動を実施する。

(3)出来ることから逐次に受託活動を開始する。

(4)軍事関連情報及び資料の紹介を開始する。

(5)コンテンツの充実を図る。（これは、どのフェーズでも常に行う）

●フェーズ6（タスク・フォース編成段階）..

(1)分野別タスク・フォースを編成する。例えば

●フェーズ7（タスク・フォース編成段階）..

(1)分野別タスク・フォースを編成する。

●フェーズ8（タスク・フォース編成段階）..

(1)分野別タスク・フォースを編成する。

●フェーズ9（タスク・フォース編成段階）..

(1)分野別タスク・フォースを編成する。

●フェーズ10（タスク・フォース編成段階）..

(1)分野別タスク・フォースを編成する。

第4章 MCI事業の提案内容
－ 地方自治体の防災CPX統裁支援
タスク・フォース

●（1）MC-Iの目的
防大同窓会員等の識見を「結集」して、国家・社会に対し軍事的考慮の重要性を正しく「発信」することを目的とする。

●（2）名 称
当面は「MC-I（Military Cyber Institute）」と仮称する。

●（3）新組織（何らかの組織）発足の段階で、同窓会が「正式名称」を決定する。一例として、「防衛大学校同窓会・軍事情報機構」などが考えられる。

●（4）新組織発足段階
（1）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（2）全ての自主活動を実施する。

（3）出来ることから逐次に受託活動を開始する。

●（5）活動の着実な拡大
第1章第5項に示した活動の段階的区分（フェーズ）に従つて、着実な活動の拡大を図る。

●（6）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（1）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（2）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（3）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（4）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（5）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（6）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（7）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（8）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（9）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（10）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（11）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（12）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（13）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（14）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（15）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（16）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（17）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（18）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（19）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（20）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（21）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（22）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（23）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（24）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（25）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

第4章 MCI事業の提案内容

1、方針

●（1）MC-Iの目的
防大同窓会員等の識見を「結集」して、国家・社会に対し軍事的考慮の重要性を正しく「発信」することを目的とする。

●（2）名 称
当面は「MC-I（Military Cyber Institute）」と仮称する。

●（3）新組織（何らかの組織）発足の段階で、同窓会が「正式名称」を決定する。一例として、「防衛大学校同窓会・軍事情報機構」などが考えられる。

●（4）新組織発足段階
（1）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（2）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（3）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（4）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（5）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（6）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（7）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（8）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（9）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（10）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（11）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（12）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（13）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（14）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（15）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（16）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（17）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（18）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（19）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（20）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（21）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（22）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（23）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（24）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

（25）新組織（何らかの組織）を発足させること。この時点で組織の正式名称を決定する。

第1章第3項に示したMCI運営の原則を堅持する。

2、組織

(一)組織形態

当初は、防衛大学校同窓会の「下部組織」として「MCI準備委員会」を設置する。受託活動を開始する段階において、新組織（第1章第2項に示した「何らかの組織」）を発足させ、MCIの目的に沿った活動を実施する。

(二)新組織の選択肢

NPOの発足は、特定非営利活動促進法（以下、NPO法）に掲げる必要がある。NPO法第2条別表に、次の12分野のいずれかの活動に該当することが必要となつていて、①保険・医療または福祉の増進を図る活動、②社会教育の推進を図る活動、③まちづくりの推進を図る活動、④文化、芸術またはスポーツの振興を図る活動、⑤環境の保全を図る活動、⑥災害救援活動、⑦地域安全活動、⑧人権の擁護または平和の推進を図る活動、⑨国際協力の活動、⑩男女共同参画社会の形成の促進をする活動、⑪子供の健康育成を図る活動、⑫前各号に掲げる活動を行う団体の運営又は活動に関する連絡、助言または援助の活動。

本年の国会でNPO法の一部が改正され、次の5分野が加えられる予定である。

⑯職業能力の開発および雇用機会の創出を図る活動

⑰消費者の保護を図る活動

⑯経済活動の活性化を図る活動

⑯職業能力の開発および雇用機会の創出を図る活動

⑰消費者の保護を図る活動

⑯経済活動の活性化を図る活動

⑰消費者の保護を図る活動

⑯経済活動の活性化を図る活動

⑰消費者の保護を図る活動

(三)MCI準備委員会の組織案		
①委員会・委員長以下 約10名（無報酬とする）	②委員会・委員長以下 約10名（無報酬とする）	③委員会・委員長以下 約10名（無報酬とする）

平成十四年度は、同窓会が平成15年度に「MCI準備委員会」を設置するまで、記念事業委の「MCI検討チーム」が継続してフェーズ1の準備を実施する。

職名	人 数	任 務・役 割
委員長	1	委員会を代表する
監事	1	業務全般、とくに経理の適切な実施を監督する
企画総務部	2	組織の運営および涉外事項を担当する
経理部	1	経理の責任者
データ管理部	3	ハード・ソフト・セキュリティを管理する
業務管理部	1	自主活動および受託活動を管理する
業務部	1	タスクフォースを管理する
タスクフォース	15x 班の数=a	平成16年度は、5個班でスタート：小計75名
合 計	10 + a	当初は5個のタスクフォースで開始：合計85名

部門別に各班 (交通費・活動費の実費のみ支給)	約10~20名(平均15名)	(2)タスク・フォース…

3、事業実現のためのプログラム

●設立認証の決定

●設立登記申請のための事前準備

●設立登記申請書類の作成

●設立登記の申請

●各種届出の実施

(一)平成十五年度から十八年度にかけて、第1章第5項に示した活動の段階的区分（フェーズ）に従つて、計画的に活動を進展させる。

(2)各年度の段階区分は次のとおりとし、

(一)全般

①平成十五年度の事業（フェーズ1、フェーズ2）及びそのための準備作

業の所要経費は、代議員会の承認を得た上で、50周年記念事業醸金の準備経費（一五〇〇万円）を充当する。

(2)平成十六年度から平成17年度までの間（フェーズ3、フェーズ4）の所

四各年度における事業活動については、別紙「年度別MCI事業活動」を参照

4、経費計画

●平成十七年度・フェーズ4（デモンストレーション段階および新組織発足を準備する段階）

●平成十八年度・フェーズ5（新組織発足および一部の受託活動を開始する段階）

●平成十九年度・フェーズ6（新組織

発足および一部の受託活動を開始する段階）

各年度の予算額及び収支バランス見積 (単位は万円)

費目		15年度	16年度	17年度	18年度	19年度
支出	支出システム構築費	800	0	0	0	0
	システム維持費	30	60	60	60	60
	データ処理費	80	60	60	60	60
	事務所借上費	0	0	0	0	0
	MCI基幹要員数(人)	10	10	10	10	10
	人件費	100	100	100	100	100
	活動費	480	240	240	240	240
	タスクフォース要員数(人)	0	75	90	10+(80)	10+(140)
	タスクフォース交通費等	0	270	324	36+(288)	36+(504)
	タスクフォース準備活動費	0	60	406	0	0
受託作業・必要経費		0	0	0	312	2,450
予備費		10	10	10	4	0
計		1,500	800	1,200	1,100	3,450
収入	本部運営訓練支援	0	0	0	0	2,500
	防衛関連研究支援	0	0	0	550	850
	戦史等の電子化	0	0	0	50	100
	スピード翻訳等、その他	0	0	0	0	0
	同窓会の支援(期待分)	1,500	800	1,200	500	0
	計	1,500	800	1,200	1,100	3,450
収支		0	0	0	0	0

注1: タスクフォース要員数の欄に示した()内の数字は、受託作業の必要経費から交通費等を支払う人数の意味。

注2: 平成18年度の受託作業の利益率は、コンピュータ上のものが多く、人件費を小さく見積もることができる。288万円/600万円=48%とした。

注3: 平成19年度の受託作業は、訓練支援が中心で、日当や消耗品費を必要とすることから、利益率は1,000万円/3,450万円=29%とした。

注4: タスクフォース交通費等の欄の()内の数値は、当該の受託作業に従事する要員に支払われる金額、それ以外の数値は別の作業のために従事している要員の分である。

要経費は、代議員会の承認を得た上で、同窓会の資金を投入する。
③平成十八年度(フェーズ5)は、新組織による受託活動の収益を期待するが、初年度の収益が運営経費を賄うまでに至らないことが予期されるため、代議員会の承認を得た上で、引き続き同窓会資金の投入を予定する。

④平成十九年度以降については、新組織による自立した運営経費の確保に期待する。

⑤平成十六年度から平成十八年度までの間に投入する同窓会資金の総額は、二五〇〇万円を予定する。この資金は、新組織による受託活動の収益が順調に得られるに至った段階で、同窓会へ還元することを基本と期待する。

あとがき

いま我が国は大きい歴史の転機に立っている。我が国が国家の四本の柱である「政治」、「経済」、「外交」、「軍事」のうち、軍事的要素を考慮に入れず、長年にわたり経済的要素だけを考慮に入れてきたのである。「軍事」という言葉を意識的に避けて、「安全保障」、「防衛」、「危機管理」という用語で代用してきたが、それも限界に達したようである。政治や外交において、「耳さわりの良い平和論」だけが強調されるようになつたのには、幾つかの原因があるが、その一つは、軍事に関する知識や体験が整理総合されていないため、軍事的視点からの考察をすることが困難であったからである。

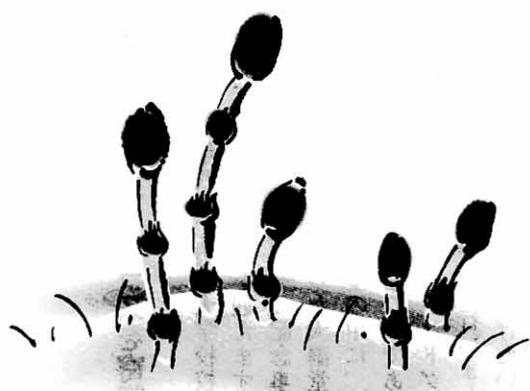
政治、経済、外交についての政策判断や学術研究をする際に、参考にできる「軍事的識見」が整理総合されているセンター」がないために、どうしても軍事的な視点が疎かになるのである。他方、現在の政治・外交・経済界では、それを良いことに、軍事的な思考を排除する傾向さえある。これに気がついている政治家、財界人、外交官、企業人は多いのだが、自分の力で軍事・防衛に関する識見を整理統合する余裕がないのが現状である。

防衛大学校創立50周年記念行事の一環として、多くの同窓生から寄せられた醸金の一部を使い、「軍事的識見が整理総合されているセンター」、すなわち、「MC-I (Military Cyber Institute)」を設立することは、形を変え

た「記念植樹」もある。いま、我々防大同窓生はMC-Iという小さい苗を荒れ野に植えようとするものである。これは、現状を嘆くのみでなく、目に見える形でそれを打開しようとする新たな挑戦であり、未知の世界に乗り出すためには勇気と決断が求められる。

記念事業委員会としては、同窓会が本提案書の趣旨を深く理解して頂き、MC-Iの実現のための決定をされることを期待している。また、同窓会の呼びかけに対し、一人でも多くの同窓生がこの植樹計画に参加してもらいたいと考えている。

最後に、本提案書を作成するに当たり、記念事業委員会の各委員をはじめ、自発的にMC-I検討チームに参加して頂いた多くの同窓生の御協力に深く感謝いたしました。



防衛大學校長「西原正教授」紹介

防衛大学校校長の西原先生をご紹介いたします。先生は昭和十二年、大阪の生まれで、三十七年に京都大学の法学部を卒業しておられます。そしてその後米国

のミシガン大学に留学され、約六年間過ごされました。そしてその後、そこから印度ネシアに二年ほど、現地にありました京都大学東南アジア研究センターに所属して、印度ネシア政治や対外関係の勉強をされました。昭和四十八年に帰国され、京都産業大学で助教授として勤務され、五十二年に防衛大学校校の教授になられました。四十八年と五十二年の間に米国のサウスカロライナ大学の客員教授になられたり、あるいは京都産業大学の教授になられたりされました。五十年から現在まで、ずっと防衛大学校校に関連する——関連するといつたら語弊がありますけれども——お勤めになりながら、五十四年にはオーストラリアの国立大学国際関係学部の客員研究員として本日はお招きいただきましてありがとうございます。大変光栄に存じます。防衛大学校の同窓生の前で、こうやって方の何人かは「なんだ。自分の学校のこ

キャンベラに出張されたり、あるいは五
十六年には米国ロックフェラー財団国際
関係部門客員研究員としてニューヨークへ
に行かれたりということをされておりま
す。そのほかに平成五年には、防衛研修
所の第一研究部長も、防衛大学校の教
授を兼ねながら務められました。平成九
年四月に社会科学教室の主任になられ
て、一昨年、平成十二年四月、防衛大學
校校長になられました。この間、日本
国際政治学会会員、あるいはアジア経済
学会会員、財団法人平和・安全保障研究所
所研究委員、国際戦略研究所理事等、その
他もちろんの役員についておられます。
今日は特にお願ひをいたしまして、お忙
しい中、「前進する防衛大学校、その
理念と成果」という題で、今から40分か
ら50分、お話を下さるようにお願いしてあ
ります。副題は「防大に奉職して二十五
年」となつております。ご静聴をお願いいた
します。では、よろしくお願いいいた
します。

同窓会がステンドグラスを寄贈

学校はどういうところにあるのだろうか
ということを、私なりに少し申し上げて
みたいと思つております。

防大に奉職して二十五年

防大教授 西原正

本日はお招きいただきましてありがとうございます。防衛大学校の同窓生の前で、こうやつて防衛大学校のお話をすることは、私にとっては義務でございますけれども、皆様方の何人かは「なんだ。自分の学校のこ

とを、ほかの大学を卒業したやつが話すのか」と思われるかもしれません。しかし私自身、防衛大学校にこれで25年間勤めたことになります。一九七七年、昭和五十二年に参りまして、二十二期の学生からお付き合いがございます。そういう

ことのむしろ楽しさといいますか、満足感も感じてきた次第です。しかし防衛大学校校の存在も、日本の社会の中で次第に受け入れられてきていると私は感じております。

学校になつたと思います。しばらく前に私は膨大の「十年史」を読む機会がありました。それを見ておりましたら、一九六五年、昭和四十年の出版物ですが、現在理工学一号館といいまして、正門を入つてすぐ左側の一角にあたるところに、大講堂建設予定地と点線で囲つてある箇所があるのを見つめました。したがつて創立十周年を迎えた頃には、そういう

う構想があつたことになりますが、一度もそれが実現されなかつた。今度初めて五十年経つて講堂が出来たことになります。

防大発展七つの節目

過去五十年の歴史の中で、防衛大学校の歴史はいくつかの節目がありました。見る方によつて、どこに節目をおくかという点は違つてくると思いますけれども、私なりにいくつか申し上げてみたいと思います。七つの節目になります。

もちろん最初の節目は、防衛大学校が出来た頃から小原台に移つたことでしょ
うが、小原台に移つた一九五五年に航空要員の学生が初めて入つてきた。これが一つ新しい節目だと思います。それまで陸と海だけでした。学生もしたがつて四〇〇人くらいから五三〇人になつたと記録でみております。

その二つ目の節目は六十二年なんです。理工系の研究科ができました。
それから三つ目の節目としまして、一九七四年に人文社会科学系の専攻コースができました。私は七十七年に防大に着任いたしましたので、社会科学教室ができましてから三年目ということになります。防衛大学校の理工系で入つてきました学生の第一期生にしました。人文社会の学生の第一期生は第二十期の学生になります。人によってはこれを〇期生といつております。そういう面で私は二十一期の学生ですか、人社系二期生からお付き合いがあつたことになります。

六番目に二〇〇〇年を一つの節目と考
えたいんです。この年、防衛大学校は教育制度を大改革いたしました。それまでは電気教室とか、土木教室というように、

その次の四番目の節目としまして、少し飛びますけども、一九九二年に二つ大きな事が起きました。一つは防大の卒業生に対しても正式に与えられたことです。これまで大学卒業相当という方に對しても正式に学士号が正式に与えられたことです。これまでは大学卒業相当という言い方しかなされておりませんでしたけれども、正式に学士号、英語で言えば「Bachelor's degree」というのが与えられました。もう一つは、この年に女子学生が入つてきただことです。これはいざれも九十二年です。

その次の第五の節目は九十七年に新たな研究科として総合安全保障研究科ができました。それまでは理工系だけの研究科でした。今まで日本の中でも、安全保障という正式な名前を使つてゐる研究科の大半はどこにもまだありません。そういう面では非常にユニークな研究科ですし、すでにこの三月で第四期生が卒業することになります。毎年二十名の人が出たとすれば、今年でもう八十名の安全保障研究をした人が自衛隊の中、あるいは一般社会で勤務していることになります。ついでに申し上げますと、第一期生の総合安全保障研究科学生二十数名の中には二名マスコミから來っていました。産経の記者と読売の記者が来てくれましたけども、そのいずれも、今それぞの新聞で安全保障の分野で大活躍をしておられます。そういう面でも防衛大学校の総合安全保障科が大きな貢献をし始めているということになります。

六番目に二〇〇〇年を一つの節目と考
えたいんです。この年、防衛大学校は教育制度を大改革いたしました。それまでは電気教室とか、土木教室というように、

「教室」を中心において教育の体制を作つておりましたけれども、一〇〇〇年度、平成十二年四月から「学群制度」というものを導入しました。これを簡単に説明差し上げるのは難しいんですけども、要はそれまでは専攻学科として十六学科があり、それをまとめた形で十教室がありましたが、それをまとめた形で十教室がありましたが、それをまとめた形で十教室がありました。なぜ「学群」というのかとしたのです。なぜ「学群」というのかといふことなんですね。「学」と「群れ」ですね。しかし先生方の中には、「学群」の「ぐん」って「軍隊」の「軍」に、(笑い)

間違えられるから反対だという人もいました。「学ぶ」と「群れ」です。いくつかの研究分野をまとめて傘をかぶせる

（笑い）

一、二の例を申し上げますと、応用化

学群というのがありますて、そこには学科が三つあります。応用物理学、応用化学、そして地球海洋学科があります。別の例を申し上げますと、電気情報学群というのがありますて、電気電子工学科、通信工学科、情報工学科及び機能材料工学科から成っています。そういうことで、学科は全部で十四ござります。そのうちの十一までが理工系、三つが人文・社会科学系です。

学群制度に時間とりましたけれども、最後に七つの節目として、昨年、防衛大学校の理工学研究科に博士課程ができましたことを紹介したいと思います。

これも防衛大学校の歴史にとっては総合的な、効率のいい運営を弱めできました。つまり、一般大学全体の観点から

大學教育行政を進めていかなくちゃいけないときに、学部が人事、科目などでそれぞの自治を強く主張するものですから、学長とか総長の権限が、なかなか下

に及ばなくて弊害が続いていました。これが一般の大学の弱点でありまして、文部科学省はこれを変えようとしているわけですね。学部長の権限よりも、学長および総長の権限を強めるべきだ、こういう傾向がありますから、防大では「学部」は使わないことにしましょう、ということになりました。

したがつて、今、防衛大学校にいらつしゃいますと、もうなにがなんだか分からぬような教育制度になつてていると思われるかもしませんが、その後のレベルの学科名を見ていただきますと、比較的よくお分かりになれると思います。

一、二の例を申し上げますと、応用化

学群というのがありますて、そこには学科が三つあります。応用物理学、応用化学、そして地球海洋学科があります。別の例を申し上げますと、電気情報学群というのがありますて、電気電子工学科、通信工学科、情報工学科及び機能材料工学科から成っています。そういうことで、学科は全部で十四ござります。そのうちの十一までが理工系、三つが人文・社会科学系です。

学群制度に時間とりましたけれども、最後に七つの節目として、昨年、防衛大学校の理工学研究科に博士課程ができましたことを紹介したいと思います。

これも防衛大学校の歴史にとっては総合的な、効率のいい運営を弱めできました。つまり、一般大学全体の観点から

大學教育行政を進めていかなくちゃいけないときに、学部が人事、科目などでそれぞの自治を強く主張するものですから、学長とか総長の権限が、なかなか下

はいちばん母体が大きくて、一、六〇〇人くらいの学生がおります。それから研究科は理工系と社会科学系で合わせて、だいたい一六〇人くらいおります。博士課程は六人ですが、三年課程ですので、まもなく十八名くらいになります。

今申し上げましたようないくつかの節目を通つて、私たちの防衛大학교校は大きく進展してきました。これ以外にもいろいろな節目を考えたいとおつしやる方もいらっしゃると思います。例えば、一九七二年に沖縄が本土に復帰してから、初めて沖縄から学生が防衛大に入つてきてくれました。これも防大の歴史の中では重要な出来事です。

教育訓練理念の基本は不变

こういった節目を通して防大は変わつてきましたが、防大の教育理念は創立以来変わっておりません。つまり、幹部自衛官を養成するということ、そのためには一般大学生と違つて、防衛大학교生は、自衛隊のリーダーとなるための基本的な教育を受けているくてはならないということです。それは勉強ばかりではなくて、体力の増進も必要であり、同時にまた、リーダーとして人の前に立つだけの仁徳、人格がなくちやいけない。そういう面で「知・徳・体」の三つをきちんとやつて育てていくことが、防衛大학교の基本であると信じております。

そういう点で私は学生によくこういうことを言います。「防衛大学校では、一般大学とは異なる教育を受けているという誇りを持つべきだ。一般大学では、知

育を中心にやついているだらうけれども、人くらいの学生がおります。それから研究科は理工系と社会科学系で合わせて、だいたい一六〇人くらいおります。博士課程は六人ですが、三年課程ですので、まもなく十八名くらいになります。

防衛大学校では「知・徳・体」の三つをきちんとやろうとしているし、そういう教育を受けて卒業してくれることを期待している」と言つております。

現在学生は、先ほどちょっと申しましてけれども、だいたい全部で一、六五〇人。厳密にいえば一、六五一人です。毎年、定員四六〇人を探つて、その四倍(四年制)ですから、実際は一、八〇〇人くらいのなくちやいけないんですが、何人か辞めていきますから、だいたい一、六〇〇人とか一、六五〇人になります。

そのうちの約一三〇人が女子学生です。七パーセントくらいにあたります。

増加した留学生

一つ防衛大学校で新しい傾向がありますのは、この学生の中の留学生の数が次第に増えているという点です。現在、留学生は五十八名おり、八ヶ国から来ております。いちばん最初に防衛大学校に留学生が来たのは一九五八年です。タイから来ましたけれども、その後はタイとシンガポールだけから留学生が来た時期が長く続きました。しかしここ五、六年の間に、留学生が増えました。これも冷戦後の一いつの動きなのですけれども、防衛大学校は、相互の信頼醸成を培うのに重要であるという観点から防衛交流の名で士官学校レベルの交流を進めてきました。その結果、今のような状況になつていています。

八ヶ国を申しますと、韓国、ベトナム、タイ、シンガポール、フィリピン、インドネシア、モンゴル、それにルーマニア

になります。近い将来いくつかの国がさらに留学生を派遣してくるだらうと、内局から連絡を受けております。

この留学生の世話も実は大変でして、

昔のように数が少なければ割合に世話は易しかつたのですが、いまのようによくありますと、言葉がなにも分からないで入つてくる留学生がたくさんいるものですから、苦労します。最初の一年間は普通の勉強はしないで、日本語だけ勉強するんですね。そして一年経つてから初めて防大の授業を受け始めます。そこで日本語を勉強している学生のことを「ゼロ学年」と言つております。一年経つてやつと一学年になりますが、学生舎の中にいますから、毎日の生活は他の学生の生活と変わりませんが、訓練なんかは別です。指導官は随分苦労しているようです。四月に入つてきた留学生に対しても、言葉もなにも分らないわけですから、「朝は六時半に起きるんだよ」というのをどうやって伝えるかですね。こういうことで最初はパントマイムのように、手真似でやつていると聞きます。それからすでに何国かは留学生の先輩がいるわけですから、その先輩の部屋の近くに新入りを配置して説明させることをやつております。

留学生に関しては、留学生をお世話し、ホームステイなどを手伝う、いわゆる「留学生協力家庭」というのが横須賀周辺にあります。この数が随分あります。三十家庭、もう少しいるかもしれませんのが、これも近年防大で見られるようになりました活動の一つでござります。

盛んな防大の国際交流

それからまた、海外の士官学校から士官候補生でやはり短期間防大に派遣されてくるのが随分多いのです。アメリカの三つの士官学校以外にオーストラリア、それからタイなんか二桁の数の士官候補生を送つてこようとしております。それから韓国。ヨーロッパは来ません。韓国から随分多くの学生が来ます。

この関連では、今年から新しいことが始まります。それは防大の三年生を一名、韓国の空軍士官学校に一年間留学させるということです。防大はこれまで短期間の派遣はやつてきましたが、長期間の派遣はしてきませんでした。しかし日韓の防衛交流の一環として、一年間韓国へ送ることを決めました。韓国の学年は三月一日に始まるそうですから、学生を一昨日送つたばかりです。「朝雲」新聞にも出ておりましたが、その学生は出発前中

谷防衛厅長官、事務次官、官房長、それ

から人教局長に表敬しました。学生も随分緊張したと思うんですけれども、防衛厅がこれを重視しているという姿勢が、これで韓国側に対して示されたと思います。

あと二つ国際交流の点で申し上げたい

のですが、その一つは四年前から行つて

いる「国際士官候補生会議」というもの

です。今年で五年目になります。これも三月に行いまして、来週の月曜日から一週間、十三か十四の国の士官学校から学

生代表が防大に来てくれて、国際会議を開催します。学生がイニシアティブをとつてテーマを決めたり、それから組織運営をやつたりします。もちろん英語で行います。十何人か来る外国の士官学校の学生と、その倍ぐらいの日本側の学生を入れて会議をやります。講堂などで行いますから、残りの学生にも会議の様子を見るように指示しています。場合によっては質問をして、会合に参加できるような仕組みを作っています。今年は基調講演を藤繩前統幕議長にしていただくことになつております。

もう一つ、防衛大学校ではご存知のように「防衛学教室」というのがございました。現在は「防衛学教育学群」という名に変わっていますけれども、ここでは毎年やはり外国の士官学校の教官を集めたセミナーを行つております。今年の夏は「士官学校における歴史教育について」というテーマでセミナーを開催する計画をしております。昨年は、科学技術教育を士官学校ではどのように行つているのか、ということをテーマにして実

施しました。

まだ不十分な英語教育

というわけで、おそらく防衛大学校初期にご卒業なつた方からご覧なれば、随分変わったことを今はやつているんだなと思われると思いますが、教育理念の基本は変わっていません。ただ自衛隊のニーズが変わり、社会のニーズが変わりますので、時代の要請に応じて新しい教育課程を設ける必要があります。

英語の教育は以前よりもずっと強調しております。TOEICの試験を全学生に強制的に受けさせますが、これがまた実はちょっと問題でして、一、六五〇人の学生全員に英語に関心を持たせるというのは不可能ですね。「防大生のTOEICの成績は今何点ですか、平均は何点ですか」と皆さんから聞かれると困惑してしまいます。ちょっと恥ずかしいくらいに高くないんです。ですから、これはやらないちやいけません。今年は平均点が四一三点でした。昨年は四〇二点か三點だったのですから、十点上がつたということでお々はそれなりに喜んでいます。

しかし隣の韓国士官学校では、全学生が卒業するまでにTOEICを七〇〇点どらないとダメなのだと聞いています。ですから我々もつと真剣にやつています。ですから我々もつと真剣にやつていて、なかなかちやいけないなと思っておりまます。TOEICの試験はだいたいたくさん問題があつても、答えは四つのうち一つ選ぶようになつてますから、全部最初の解答だけ丸にしても、25パーセント

ぐらいの点はとれるのぢやないかと言う人もいます。しかしその点すら達していない学生もありますから、恥ずかしい状況です。防大生には、もちろん優秀なのもおりまして、帰国子女もあります。したがつて九〇〇点ぐらい行く学生もおります。実は昨年も今年もトップはシンガポールの学生でした。九〇〇何十点取りました。したがつて留学生はいい刺激を防大の学生に与えています。

少子化傾向の影響はまだ小さい

ここまでお話をしたところで、我々今、学校当局として、もう少し広い立場から見て、どういう問題を抱えているだろうか、あるいはどういう問題にこれから直面しそうか、というようなことを少し申し上げたいと思いますが、それはいくつかございます。

一つは少子化傾向のインパクトです。若年層の人口が減つていく傾向にあります。そうした傾向が、防衛大学校に入つてくる学生の数にどういう影響を与えるだろうかということです。少子化傾向が進むと、大学に入るのがだんだんと易くなる。競争率が低くなりますが、そうすると、学力低下を招きます。あまり勉強しなくても大学には入れるじゃないかといふことで、高校生が勉強しなくなれるかもしれない。そういう傾向がすでに見られますが、そういう状況にある時に防大に入つてくる学生を、毎年四六〇人採るとすると、学力の低いのが入つてくることになるのではないか。そのままやつておりますと、自衛隊幹部の能力が低

ぐらいの点はとれるのぢやないかと言ふ人もいます。しかしその点すら達していない学生もありますから、恥ずかしい状況です。防大生には、もちろん優秀なのもおりまして、帰国子女もあります。したがつて九〇〇点ぐらい行く学生もおります。実は昨年も今年もトップはシンガポールの学生でした。九〇〇何十点取りました。したがつて留学生はいい刺激を防大の学生に与えています。

下することになりますから、自衛隊に大きな影響を与えます。

実は私などは、この問題に強い関心をもち、同時に懸念をしておりまして、いろいろなデータを見ております。今のところ少子化傾向が進みますと、一般的の日本の大学は大きく二つの傾向に分かれると、もう一つはいわゆる二流、三流であつた学校が、表現が非常に悪いのですけども、ますます落ちていく。二つに大きく分かれてしまう。東京大学のようにいい大学は別に少子化傾向が進んだって、優秀な学生は東大に行こうとするでしょう。ところが、地方、あるいは東京でも、三流、四流の大学は学生の定員割れが生じる。あるいはそなならないようになると、全体のレベルが下がつてしまふ。どんどん二分化していく傾向にあるとみておりますが、防衛大学校は今のところ一流校のグループのどこかに一生懸命食いついているという状況でございます。これが続く限りは少子化傾向のインパクトは受けなくて済むかもしれません。

しかしこれは油断できませんので、私たちはこれに細心の注意を払つております。もし防大入校生の学力低下の兆候が始まれば、それを是正するには、二つ方法があると思います。一つは入校生の数を少なくして少数精銳制でやつていぐ。もう一つは、四年制のところ五年制ぐらいにして、一年目は基礎からもうい

つべんやり直して、きちんとやつて、それから卒業させる。あるいは訓練の時間数をもう少し減らして、まず、基本的な勉強、基礎学力をつけて、それから後に訓練をするというようなやり方に変えていかなくちゃいけないかもしません。そういうような問題でござります。

国立大学の独立法人化の影響は大きい

生はそつちに行つた方がいい研究ができる
そうだと言つて移籍してしまう心配があります。
あるいは我々がいい先生を一般
大学から採ろうとしても、「いや、防大
では研究費が少ないようですね」と断ら
れるかもしれません。独立法人化した大
学の研究教育環境に劣らないものを、私
たち防衛大学校でも作っていかなければ
いけないなと思つております。やはりい
い先生が来てくれることが教育の質を高
めるわけで、それがいい自衛官を作つて
いくことにつながると思います。

拡げたい防大生の学外交流の場

もう一つの点は、学生と話しておりま
すと、「自分たちは横須賀の端の小原台
でずっと勉強しています。社会の動きに
ついて、なかなか知る機会が少ない。そ
して卒業すると幹候校へ行き、それから
自衛隊へということですから、社会を知
る機会、あるいは同じ年代のほかの青年
と接触する機会が非常に少ない」と苦言
を呈します。これは防大創立以来からそ
ういう問題があつたと思われますけれど
も、学生もいるかもしれませんから（笑
い）、優秀な学生で、先生から「君は行
つてもいいよ」と許可があつたもの、あ
るいは「あそこの大学のこの授業を取り
たい」といった学生で、「それは君のた
めになるから行つてくるといいよ」とか、
きちんとした教官の指導の下に聴講でき
る仕組みはできないかなということなん
です。

も、外との交流とか接触に対する学生側の要望が割合強くございます。

帰国子女優遇には壁

学省の親方日の丸じゃなくて、それぞれの大学が自分たちの経営方針を立ててや

こういうのが一般に言われているイメージですが、果たしてすべての国立大学がそういうことは思いません。非常にジグザグした移行になると想いますが、にもかかわらず国立大学がそういう傾向になりますと、防衛大学校のいい先

防衛大学校はしたがつて、できるだけ開かれた、そういう面でも魅力ある大学にしていかなければいけないと思うんですね。ですが、ここでもいくつか難しい点がございます。例えば防衛大学校を開かれたものとして、一般の大学の学生の希望で防大の授業を受けることができるようになります。また防大の学生が、ほかの大学に行つて授業を受けることができるよう

それからもう一つは、帰国子女が割合
に防大に入りやすくするのもいいんじや
ないかという点です。つまり、いろんな
バックグラウンドを持った学生が防大に
入ってくるということは、学生の思考の
多様化を促すことにもなるかもしれませ
んし、いいんじゃないかといつておりま
す。しかしこれは、実は「言うは易し」

歴史教育、日本語表現能力など

くて、外の事をもう少し知りたいとい
ような希望が強くなっています。

もう一つの点は、基本的に防大の学生をスキップと育てるために、これまでの教育で不十分なところを、もつと積極的に改善していきたいということです。例えば、先ほど申しました英語なんか、もつとやらないちゃいけないと思いますが、

することが考えられます。しかし防衛大
学校という特殊な使命を持つた大学で、
防大生には非常に規律を重んじさせてお
くちゃになります。現在、防大で見られ
るのは、一部の先生が自分の演習ゼミ
学生を、他大学で知っている先生のゼミ
学生と交歓ゼミをする形式です。何人か
の教官がそういうことは行っています。
そこで四年生で成績が優秀な学生には、
週に一回ぐらい他大学で授業が聴講でき
るような仕組みを作りたいと思つており
まして、学内で今検討してもらつております。誰でもいいといいますと、ろくな
防大で勉強してなくて、外部で遊んでく
る学生もいるかもしれませんから（笑
い）、優秀な学生で、先生から「君は行
つてもいいよ」と許可があつたもの、あ
るいは「あそこの大学のこの授業を取り
たい」といった学生で、「それは君のた
めになるから行つてくるといいよ」とか、
きちんとした教官の指導の下に聴講でき
る仕組みはできないかなということなん
です。

帰国子女優遇には壁

それからもう一つは、帰国子女が割合
に防大に入りやすくするのもいいんじや
ないかという点です。つまり、いろんな
バックグラウンドを持つた学生が防大に
入ってくるということは、学生の思考の
多様化を促すことにもなるかもしれません
し、いいんじゃないかといつておりま
す。しかしこれは、実は「言うは易し」

歴史教育、日本語表現能力など

もう一つの点は、基本的に防大の学生
をスキップと育てるために、これまでの教
育で不十分なところを、もつと積極的に
改善していくことです。例えば、先ほど申しました英語なんか、もつ
とやらなくちゃいけないと想いますが、

それから物理、数学、化学なんかの基礎知識が十分なくて入ってくる学生が多いんです。高校できちんとやつてくれていないことが大きな原因なんです。

防衛大学校では入校後の学生に対しても一斉に試験をやりまして、成績の低いものは特別に集めて補備教育というのをやつています。しかしそれ以外に私は、歴史教育が防大ではまだ不十分だと思つております。

歴史教育の点はもう、いうまでもない
ことかと思いますが、防大を卒業し、幹
部自衛官となるためには、やっぱり日本
の近現代史についての基本的な理解、あ
るいは世界の近現代史についての基本的
な理解が必要です。第二次世界大戦はな
ぜ起きたのか、どこで日本は失敗した
のか、江戸末期から明治以後の日本がど
ういうふうに進んできたか、あるいは、
第二次世界大戦で日本は何をしたのかな
どなどについて、防大で教育を受けない
で自衛官になるというのは望ましくあり
ません。私は「南京虐殺」について、き
ちんとした教育がなくちゃだめだと言つ
ています。「南京虐殺」について講義を
する場合には、一方的な見解だけじゃな
くて、両方の見解を紹介し、日本社会や
海外で議論になつていることを、学生が
知つておかなければならぬ。こう思つ
ております。

もう一つは先ほど申しましたように、
日本語表現能力です。先日、入学試験で
立ち会われた防大の英語の先生に、「学
生の英語の成績はどうでしたか」と聞き
ましたら、その先生が「いや、英語より
も日本語表現能力が悪いんです」という

お話です。したがつて、日本語の表現をきちんとできる学生というのではなくちゃんといいなと思うんです。防大では実は五六年前から、一学年に対して「基礎ゼミナール」という科目を設けまして、日本語表現能力の向上を試みています。三十五人、三十五人くらいの先生を理工系、人材系から集めまして、学生を二十人くらいの小さなグループに分け、前期十五回の授業で、自分の専門分野を教えながら、学生に簡単なペーパーとエッセイを書かせて、それを添削するという形式です。それが少しでも学生にいい傾向を与えて、学生がそれから学んでくれることを期待いたします。しかしもう少しこれを効果的な科目にしていきたいと思います。

卒業生からの話を聞きましても、防大で卒業論文のときに厳しく論文の書き方を教えてくれたことが、その後の仕事にうんと役立っていますというハガキをもらったこともあります。あるいは、報告書を書くのに苦労しています、と言つている卒業生もおります。そういう点で、日本語表現能力は非常に重要なと思いま

必要な自衛隊のヒーロー

最後に、防衛大学校の私たちにも一つある問題として、21世紀の自衛隊とのリ

ンクがあります。21世紀の自衛隊がどういう形になるのか。自衛隊のニーズは何とかということを見極めながら、防衛大学校の教育を考えていかなければならぬとと思うんです。何しろ、防衛大学校のお客様は自衛隊でございますから、自衛隊の

ニーズにあつたものを作つていかなくちやいけない。だから例えば、今、世間で言われていますような、生命科学および遺伝子などについての理解を、これから社会に出て行く人たちは十分必要だ、知つていいべきだと私は思うんです。

しかし実は防衛大学校に生命科学に関する授業はないんですね。こういう分野について、自衛隊のニーズが、今後出てくると思うんです。少し先を読んで学科を作っていくとか、あるいは学科までいかなくとも、そういう科目を作つていくことを考えなくちゃいけないと思うんです。現在のところ、それがまだできていないもんですから、客員教授とか、あるいは課外講演の講師を招く際、そういう防大ではカバーできない、授業でカバーできない専門分野についての講師を呼んで埋め合わせをするようにしております。

最後にもう一つ、自衛隊とのリンクなんですが、学生が胸に描くべき現

代日本の軍人像の欠如です。私が防衛大
学校で学生に話す際、彼らが卒業して自
衛官になるとき、モデルとなるべき人間
を引き合いに出すのが非常に難しいとい
う点なんですね。戦前でしたら「東郷平
八郎」のような一つのモデルがあつて、
そこでなぜ彼が立派だったかということ
が具体的に教えられたと思うんです。防

ことが防大の学生にとってより大きなインパクトを与えると思つております。だいたい時間が参りましたので、ここまでにいたしたいと思いますけれども、間もなく防衛大学校で卒業式がござります。三月二十四日の卒業式には、今年は同窓会の第三期の皆様方をお招きいたしております。第三期の皆様方には新しい記念講堂での卒業式を見ていただこうとなります。

皆さんにお願いしたいのは、ご子息、ご令嬢をぜひ防衛大学校に送つてほしいということでございます。これは三期生のことではございません。皆様方にお願いしたいと思いますが、元気な若い人たちを防大に送つていただければと思います。

ね。もう少し現在に近い時代の人が必要です。今学生に話してモデルになりうるのは、例えばコーリン・パウエル将軍とか、あるいはシユワルツコフ将軍とかで立派な仁徳を持っていたとかなど講義で語るつまぐれですが、学生が比較的身近に感

す。皆様方のご支援、ご鞭撻（べんたつ）を得て、良い大学校を作つていただきたいと思います。

防衛大学校は大学であり、同時に士官学校でありますし、私は学生に、「自分たちを日本の大学の学生と比較するだけじゃなくて、外国の士官学校の学生と比較してほしい、漫画を読んでいる時は、アメリカの士官学校の学生はなにをして

いるだろうかということを考えるべきだ」と申しております。学生はいい日本を作るための責任を自分たちが担わなくちゃいけないと自覚してくれることを、私は期待しております。どうぞ、皆様方、ご支援よろしくお願ひいたします。どうもありがとうございました。（拍手）

記念講演講師「三浦朱門先生」紹介
三浦先生につきましては皆様良くご承知のことと存じますが、簡潔にご経歴等について紹介させて戴きます。

先生は大正十五年東京でお生まれになり、東京大学文学部言語学科を卒業後、大学院進学と同時に日本大学講師として招聘され、教授まで勤められました。一方昭和二十五年作家活動に入られ、第三の新人の一人として活躍されました。ご著作は新潮文学賞を受賞された「箱庭」や芸術選奨文部大臣賞を受賞された「武蔵野インディアン」等、数多くあります。平成九年には日本芸術院賞を受賞され、平成十一年には文化功労者に選ばれておられます。また昭和六十年から六十二年まで文化庁長官をお勤めになり、現在も日本芸術文化振興会会长、日本文芸家協会理事、日本芸術院会員等、数多くの要職でご活躍中であります。

三浦先生には五十年の防衛大学校の歴史を通じて、厳しい時代にあっても一貫

して国防及び防衛大学校の良き理解者として、お忙しい身にもかかわらず折々に本校にお越し戴き、数々の御薫陶と御教示を戴いてまいりました。

この度五十周年の節目に「望ましき自衛官像」というテーマで記念のご講演を戴くことは誠に意義深いことと考えております。本日は、正にこれから望ましき自衛官像を目指すべき防衛大学校の在校生や現職自衛官も沢山聴講される事になります。必ずやその指標となるお話が伺えるものと思います。それでは三浦先生よろしくお願い申し上げます。

（講演に先立ち行われた記念事業委員会委員長による講師紹介から）

望ましき自衛官像

特別講師 三浦 朱門

三浦でございます。実は風邪を引きまして一昨日まで声がでなくて、どうなるかと思っておったのですけれども、昨日からどうやら声ができるようになります。それでも大変お聞き苦しいと思いますが、どうぞ私のつたない話、聞いていただければと思うわけでございます。防衛大学校の五十周年の記念にお招きいただきました、何か喋れと言われましたけど、私個人として本当に大変光栄に存じております。

私が初めて本校に伺いましたのは、昭和三十二、三年頃であったかと思います。

ようやくこの小原台に移った頃だったと思います。移転を記念してということではありませんけれども、防衛大学校がきれいになつたということで、確かに若い女性の雑誌だったと思いませんけれども、その雑誌に頼まれてルポルタージュに参りました。その時の小原台というのは赤土ばかりでございまして、砂埃を避けるためにユーカリの木を植えている時代であります。

その時の小原台というのは赤土ばかりでございまして、砂埃を避けるためにユーカリの木を植えている時代であります。そのちょうど参ったのが二月頃という記憶がありますが、やはり西風の強い日で、二年生位の学生が、今から考えますと四期生か五期生になると思いつれども、もちろん皆様方の大先輩でいらっしゃいますけれども、日向ぼっこをしてポケットに手を突っ込んで、学生舎に寄り掛かっていて、何とな

く頼もしくないなあと思った記憶がございます。もつともこの会場に四期生、五期生がおられますと、いや我々の期はそんなことはなかつた、それは三浦の思違いだと、現役の皆様方におっしゃるかも知れませんけれども、しかしそのような方々であつても、皆様方ご承知のような立派な先輩になられたのですから、例え今の学生が、いくらかいかがわしいところがありましても、どうか一生研鑽を怠ることなく、立派な自衛官になつていただきたいと思います。

ただその五十年の防衛大学校の歴史を考えました時に、普通でしたならば本当におめでたいということをまず申し上げねばならないのですけれども、必ずしもこの防衛大学校、五十年の歴史はめでたいという言葉で言い尽くされるものではございません。例えは、今日私共がこうやつて使っております大講堂、本館などというものは今から四十数年前には存在しなかつたものであります。赤土だらけの中に二棟、三棟の学生舎と、それから教室棟が二つ三つある程度でございました。その中に二棟、三棟の学生舎と、それから大食堂も何か倉庫風の建物だった記憶がございます。そのような時代から考えて、大食堂も何か倉庫風の建物だった記憶がございます。そのような時代からえますと、形而下的には、防衛大学校は立派になりました。恐らくこんなに立派な、軍人を養成する施設を持つている国というのは世界にそういうつもないのです

はないかと思います。その意味では確かに防衛大学校の五十年の歩みというものは偉大なものがありました。そして、多くの優れた先輩を生み出したということでもこの防衛大学校五十年の歴史は輝かしく、そしてその点では本当におめでとうと申し上げられると思います。しかしながら、今から五十年前に防衛大学校が作られました時に、この大학교가持つていた基本的な問題というのは半世紀経った今日においても、何ら解決されておりません。従いましてあなた方、現役の学生方は先輩の志を受け継いで、この基本的な命題の解決に突き進んでいただかなければなりません。そしてここにおられる先輩方そして父兄の方々、あるいは一般市民の方々も、どうかこういう防衛大학교의過去五十年の歩み、茨の道であつたと思ひますけれども、その茨の道を歩まれた、また、歩んでいる若い人達を励まし、そして茨を少しでも取り除くようのご協力いただけたらと願うわけでござります。

このような茨の道を作りました最初の問題といたしまして、憲法というものがございます。日本の憲法というものを考えます前に、やはり成文憲法、文字になつてある憲法として一番古いものとしてアメリカの憲法を考えたいと思います。憲法というのは英語で言いますと、体質、モノの本質という意味がございます。つまりその国の体質、国柄というようなものがconstitutionの意味なのです。ですが、それを大文字で書いた場合にいわ

ゆる日本語で言う憲法になります。

Constitutionというものを考えますと、これはその国の國柄、その國の体質といふものを示す、憲法という言葉よりもその國の体質というふうに考えた方がよろしいかと思います。私は先年亡くなりました司馬遼太郎さんが好んで使われました「この國のかたち」という言葉がありますけれども、この「國のかたち」というのを英語に直すと、やはり Constitutionだと思います。大文字で書けば憲法でございます。民主主義国家の先祖のような英國では文章に書かれた憲法はございません。大体一つの國の体質、人間の体質でもよろしいのですけれども、私は私という三浦朱門という人間はどういう体質であるかというようなことを、例えば文字だけで書く場合に百箇条やそこらで言ひ表すことが出来るでしょうか。これは絶対に不可能なのです。仮に百箇条位で書いたところでまた新しい環境に、例えれば私はまだ北極地帯に行つたことがありませんけれども、零下二十度、零下三十度の所に行きますと私は新しい体質を発見するかもしれません。あるいは深い海の底を潜っている時に陸上では気づかなかつた私の新しい体質を発見するかもしれません。つまり体質の中に今日までわかつてゐるもの、と同時に未来において現れてくるかもしれない可能性として持つてゐる体質、様々なものがござります。従いまして英國人が百箇条、二百箇条の言葉によつて英國の体質など表せらるわけがない、むしろ最高裁の判断というものがconstitutionの意味なのです。つまりその国の體質、國柄といふようなものがconstitutionの意味なのです。ですが、それを大文字で書いた場合にいわ

英國的な物の考え方、英國の文化、英國的なるもの、英國という國のかたちを示す事ができるというふうに考えている、それも一つの見識であろうかと思います。

それではアメリカがどうして憲法を作つたかと言いますと、これはもちろん独立戦争が契機になつております。はじめ、まず独立宣言というものを作りました。アメリカの憲法前文というものは非常に簡単でございますけれども、実は独立宣言というのが憲法の前文に当たると私は考えております。その独立宣言というものを有志が作ります。そうしますと当時のアメリカは植民地でございますけれども、十三の地域に分かれておりました。十三の地域はそれぞれ自分は他の地域とは別の地域である、つまり独立した場合に自分達は一つの国家であると考えていた。アメリカ合衆国の州というのはstateです。stateと言うのはこれは國家という意味でございます。つまり十三の国が一緒になつて英國に対し独立戦争を始めることになりますと十三の国がお互に条約を結んだわけです。一緒に共同して英國と戦つて行こう、そのためには十三の国がどういうふうな形で協力し合うかというようなことを決めました。これがアメリカの憲法の基本的な性格でございます。従いまして最初のアメリカの憲法を見ますと、基本的人権とか個人の権利とかは何も書いてありません。一番初めに国会というものが、連邦議会というものがございます。次に大統領というものの存在があります。連邦議会というのは何故大事かと言うと、十三

それが「amendment」です。修正事項と言いましょうか、附加事項と言いましょうか、その始まりでございます。それから後、時代と共にどんどんどんどん amendmentを増やしていくまして、私の記憶によりますと、確かに十年に一度位の割で新しいamendmentをつまつて憲法改正を行つております。つまりアメリカ合衆国というものはスタートした時は

amendmentのない状態の十三の国家が共同して物事をやつていこうという外交書であった。しかしそれが連合国家として成立して新しい問題にぶつかる度に修正条項を付け加えてきた。それがアメリカの州が一緒になつてやるわけですから、十三の州の代表者がここに集まらなければいけない。だから連邦議会なのです。そして連邦諸国から選ばれてその意志を体として全米軍を、独立軍を率いて戦う大統領というものを選ばなければいけない。従つて第二章が大統領になる。つまり最初のアメリカの憲法というのは十三の国家が一緒になつて戦おう、一緒になつて一つの組織を作ろうという、いわば外交条約といったような感じがございます。今申しましたようにそこには基本的な人権とか個人の権利とかそういうようなものは一切書かれておりません。そこで国家が出来てから後に、それではアメリカの国民というのはどういう存在なのか、彼等はどういう権利があり、どういう義務を持つかというようなことを考えなければならない。従いまして独立して間もなくジエファーソンという大統領の時代に国民の権利、義務を書いた部分を大量に書き足します。

の州が一緒になつてやるわけですから、十三の州の代表者がここに集まらなければいけない。だから連邦議会なのです。そして連邦諸国から選ばれてその意志を体として全米軍を、独立軍を率いて戦う大統領というものを選ばなければいけない。従つて第二章が大統領になる。つまり最初のアメリカの憲法というのは十三の国家が一緒になつて戦おう、一緒になつて一つの組織を作ろうという、いわば外交条約といったような感じがございます。今申しましたようにそこには基本的な人権とか個人の権利とかそういうようなものは一切書かれておりません。そこで国家が出来てから後に、それではアメリカの国民というのはどういう存在なのか、彼等はどういう権利があり、どういう義務を持つかというようなことを考えなければならない。従いまして独立して間もなくジエファーソンという大統領の時代に国民の権利、義務を書いた部分を大量に書き足します。

それが「amendment」です。修正事項と言いましょうか、附加事項と言いましょうか、その始まりでございます。それから後、時代と共にどんどんどんどん amendmentを増やしていくまして、私の記憶によりますと、確かに十年に一度位の割で新しいamendmentをつまつて憲法改正を行つております。つまりアメリカ合衆国というものはスタートした時は

カ合衆国というものであろうかと思います。従いましてアメリカの憲法というのは基本的理念において、つまり民主的な共和国を作るということと、そこでは自由が大切なものであるということ、個人の権利が尊重されなければならないこと、そしてそのような自由意志の総合ということ、それらのものは基本的なものとして存在しますけれども、それらの理念が具体的にどのように表現されるかということはその場その場の、その時その時の国民の判断によって付け加えられます。あるいは、酒を飲んじやいけないという条項のように、一度書きこまれ、後になつてそれを取り消したりというような歴史過程をたどつてまいりました。

日本の場合何故憲法を作つたかと言いますと、これは何よりも日本が近代化するということが、今から約百五十年前に、千八百六十年代の終わり頃に決められたそのことに始まろうかと思います。私は日本国憲法の一番基本にあるのは明治元年に明治天皇が神々の前に誓われたといふ「五箇条の御誓文」であり、まさにこの御誓文が米国の独立宣言に当ると考えます。これは日本の近代化を志して、民主体制を作り、全国民が自由な立場で政治に参加し、そして全世界から知識を求めて、大いに立派な国を作ろうじゃないか、そして全国民がその志を遂げ、社会に対しても立派な國を作らないような国にしようではないかということを慶應四年（明治元年）、「五箇条の御誓文」で表現されました。それが恐らく日本近代化の精神であり、そして今日に至るまで日

本の國の國民の多くの人の考え方であろうかと思います。「広く會議を興し、万機公論に決すべし」「官武一途庶民に至るまで、各々その志を遂げ、人心をして倦まずらしめんことを要す」「旧來の因習を破り天地の公道に基くべし」、そういう「五箇条の御誓文」というものを考えました。しかしそれは明治天皇が神に誓つた言葉であつて必ずしも國民に徹底しない。それのみならず諸外国はそれを認めてくれない。そこでアメリカの憲法のような、あるいはフランスその他の國の憲法のようなまとまつた憲法、成文憲法を作ろうということになつて明治二十三年、いわゆる明治憲法が作られたわけです。

ところがこの時、明治憲法というのは大きな間違いと言うか、ごまかしが二点ございました。それは何かと言うと、第一は行政権の問題でございます。もう一つは統帥権、つまり武力の問題でございます。行政権の中には外交も含まれると思いますが、それはけれども、帝國憲法には大日本帝國は万世一系の天皇、これを統治するとのことです。つまり天皇が統治するといふことは、行政権が究極において天皇にあるということです。統帥権、即ち軍隊においても統帥権は天皇にあって、天皇は陸海軍を統帥す、と帝國憲法には記載されております。しかしそれだけであつて統帥権の内容について詳しい規定は何もない。行政権につきましては枢密院と大臣の条項がありまして、枢密院議員は国家枢要の、國家の非常に大事なことの決定に参与するということがあります。そ

れから全ての法律は大臣の副署を必要として天皇に對して責任を負うということがあります。統師に関しては、天皇は陸海軍の編成及び常備兵額を定む、としかまざらしめんことを要す」「旧來の因習を破り天地の公道に基くべし」、そいつを確かにこれが日本の近代化の基でありますと確かにこれが日本海軍のことがあるだけでも行政権についてありました。しかしそれは明治天皇が神に誓つた言葉であつて必ずしも國民に徹底しない。それのみならず諸外国はそれを認めてくれない。そこでアメリカの憲法のような、あるいはフランスその他の國の憲法のようなまとまつた憲法、成文憲法を作ろうということになつて明治二十三年、いわゆる明治憲法が作られたわけです。

何故こういう欠陥憲法を作つたかと言いますと、憲法を作るというのは一つには対外的なジェスチャーであった。国际社会に日本は近代国家であるというポーズを作る必要があつた。そのポーズに基づいたある程度の実質を作る必要があつた。しかし同時に国内的には「広く會議を興し万機公論に決すべし」という五箇条の御誓文の精神に沿つて、國民が政治に参加することを望み始めた。強く要求し始めた。従いまして、うつかりその声に従うと明治政府を作つたかつての幕末の志士達、後に元勲達と言われる人々、明治の行政官僚、軍事官僚を作つた集団にとつては、自分達の権力、自分達の勝ち取つたものが奪われる恐れを感じた。それは必ずしもエゴイズムとは思いません。自分達こそが本当の意味で日本国家というものの将来を案じているし、そしてその責任を果たしるのは正に自分達なのだ。どうして自分達に反対した奴らを自分達の仲間として大量に入れることが出来るだらうかという気持ちがあつたに違ひない。

また当時の行政官僚、軍事官僚達といふのはその二十年前は同じようにちよんまげを結つて刀を一本差していた人達でした。ですから行政官僚は明日にでも軍服を着て軍事官僚になりうる素質を持っていた。また軍事官僚は刀を置き軍服を脱げば、直ちに行政官僚になりうる資質を持つ仲間同士だった。だから行政と軍事についてはお互に意志を通じ合いながら、行政と軍事の暴走をお互いにチエックしながらやつていけると思つたのだから欠陥憲法であつた。

何故こういう欠陥憲法を作つたかと言いますと、憲法を作るというのは一つには対外的なジェスチャーであった。国际社会に日本は近代国家であるというポーズを作る必要があつた。そのポーズに基づいたある程度の実質を作る必要があつた。しかし同時に国内的には「広く會議を興し万機公論に決すべし」という五箇条の御誓文の精神に沿つて、國民が政治に参加することを望み始めた。強く要求し始めた。従いまして、うつかりその声に従うと明治政府を作つたかつての幕末の志士達、後に元勲達と言われる人々、明治の行政官僚、軍事官僚を作つた集団にとつては、自分達の権力、自分達の勝ち取つたものが奪われる恐れを感じた。それは必ずしもエゴイズムとは思いません。自分達こそが本当の意味で日本国家というものの将来を案じているし、そしてその責任を果たしるのは正に自分達なのだ。どうして自分達に反対した奴らを自分達の仲間として大量に入れることが出来るだらうかという気持ちがあつたに違ひない。

今日の産経新聞に石原慎太郎都知事が書いていましたけれども、トインピーーという歴史家というのはかなりいい加減な人間であつて、明治の日本の近代化を跡だというようなことを言つておられるけれども、あれはでたらめで近代化の基は徳川時代に作られたというふうなことを言つておられます。これは別に石原慎太郎個人の考えではありません。これはもう日本史をまともに読む人たちの定説であろうと思います。徳川時代というのは考えてみる

と本当に素晴らしい偉大な時代であった。近代的な日本というものをつくるための、原形というものは、この時代に、徳川時代に既に出来ていたと思います。とにかくその徳川時代に作られた蓄積を基にして、そして四十年で見事に近代国家を作り上げた。しかしそういう人達というのはだいたいにおいて千九百二十年頃、つまり近代化がスタートしてから半世紀経った後に全部死に絶えてしましました。

私はキリスト教徒ですけれども、キリスト教徒の原典の中に聖書というのがあります。聖書の中に出エジプト記というのがあります。これはモーゼという、これはもう神話だから実在の人間であると考へる必要は全然ないのですけれども、モーゼという民族の指導者が現れました。エジプトを脱出する時にいろいろな何と言いましょうか、奇跡的な話があるのですけれども、これはまあどうでもよろしい。ですけれどもモーゼはエジプトから脱出した民族を直ちにカナンの地に導こうとはしないのです。荒れ野を四十年間さまようのです。荒れ野に四十年さまようということは何のためかと言うと、エジプトの奴隸であった世代が全部死に絶えるのを待つのです。奴隸であつた人間は所詮奴隸なのだ。事実モーゼがユダヤ人を荒れ野に導き出してからも荒れ野の生活の厳しさに耐えかねて、こんなぐらにならばエジプトで奴隸をやつて

いるほうがよかつたと言つて反乱を起す者達もいます。ですから本当に自由な、そして自分の足で立てる人間が育つためには、奴隸であつた人間が死に絶えるのを待たなければいけない。それで荒れ野に四十年いたということになります。そしてモーゼは約束の地であるカナンを遙か彼方に見渡す山の上で死んだとされています。

聖書の中で四十というのは象徴的な意味で長い間という意味だと思います。例えばノアの箱船の説話では七、六百、十七、百五十、十といった数が何度もでてきますが、一番頻度の多いのは四十という数です。つまり四十というのは六十と同じような、同じと言うのはおかしいのですけれども、四十とか六十とか言うのはユダヤ教の中では一つの象徴的な数であつて日本で言いますと八百八町、八百万の神、八幡様という、八という字に妙に関わりがありますけれども、それと同じようなこだわりのある、こだわりを持たれている数だというふうに考へてもよろしいかと思います。

とにかく四十年いるうちに荒れ野に育つたたくましい世代が生まれます。そしてモーゼの後を継いだのはモーゼの副官ユアという人です。ヨシュアという人が長い間務めたヌンという人の子のヨシユアという人です。ヨシュアという人が新しいリーダーとなつてカナンの地に攻め入つてジェリコという今から五千年前から存在したと言われているジェリコ、イエリコとも言いますけれども、当時のその都市を、攻め落としたと言われています。

四十という数があるかないかは別にいたしまして、明治維新後四十年経つてそのエネルギーは尽き果ててしまつた。そして千九百二十年、大正が二桁になります。行政権とそれから統帥権の处置の曖昧さの矛盾がでてきます。だいたい帝国憲法には総理大臣なんていう項目は何にもないのです。ですから総理大臣の权限も憲法に照らしてみる限りどこにも書いていない。ただ大臣が天皇に対して補強の責任を負うとするだけなのです。また枢密院というものと内閣がどういう関係にあるのか、それらのものと国会がどういう関係にあるか、何も書いてない。その矛盾が結局大日本帝国を滅ぼしました。その矛盾が明らかにでてくるのは千九百三十年、昭和五年頃、大陸で戦争が始まる頃です。私は十五年戦争という言方は嫌いですけれども、その頃、千九百二十年頃から千九百四十五年の二十五年間というのが、日本帝国の混迷の時代であつたと思います。

そして第二次大戦後という新しい時代が生まれます。そこで大日本帝国憲法の憲法改正の条項に従つて、いわゆる平和憲法、今日の日本国憲法が作られます。これもやはり様々な点で矛盾を持つておりました。私は今の憲法の原文は英語であります。私はこの憲法の原文は英語であります。裁判所が保証するのか曖昧なのが、原文である英語を見ると、保証されるべきものとなつて受け身になつてゐるのであります。言論の自由を保障するとあつたどこで、誰が保障するのか。何々によつて保障されるとは言つても、何々によつて保障されるとは言つても、何々によつての部分がない。憲法十三条规定には、個々の国民の安全と自由と幸福の追求には最高の配慮が必要であるという条文がある。しかし誰がいかにして配慮するかということは何も書いていない。米国憲法でもこの種の条文には受身形が使われています。

日本国憲法は戦後早々に出来たもので、大臣は文民でなければならないといふような条文がある。シビリアンの訳語ですけれども、帝国陸・海軍が解散した後ですから、もう軍人とはいえない。しかもなお文民という言葉を使わなければならぬ。これはやはり旧軍の復活を恐れたのだろうと思います。そういうことから考えましても日本国憲法というのは早々の間に慌ただしく作られたものであつて、しかもその細かい部分について非常に不安定で未決定な部分がある。

重要な部分については日本を占領している米軍、あるいは国連が責任を負うという暗黙の了解事項がある。例えば憲法の前文で有名な部分ですけれども、我々は自分達の安全を、平和を愛する諸国民を信頼してこれを委ねるという意味の部分があります。つまり我々の安全というものを自分達で守らずに、平和を愛する諸國や周りの人達の善意によって守らうとするのです。それならば当然のことながら、私達の生命、財産というものを守るということ、あるいは言論の自由を保障するというのも我々は自分の手によつて守るのではなくて、平和を愛する諸国民によつてそれらのものを守つてもららう

のかもしない。

従いましてこの日本国憲法というものは理詰めで考えて行きますと、独立国の憲法であるということが大変いかがわしいと思われる。じゃあそういう憲法が何故今まで改正されずに残ってきたか。私はその点について吉田茂という人が大変悪く言われる場合もありますけれども、吉田茂元首相が自衛隊の基である警察予備隊というものを作った時にも何度もこれは軍隊ではないかと議会で質問されると、「これは軍隊ではございません、戦力を持つておりません。」というようなことを言っています。しかしあなたの方の先輩、一期生、二期生に吉田茂氏が語っているところを見ますと、彼は自衛隊は軍隊でない、いつまでも軍隊でないと決して思っていなかつた。戦力を持たせないとは思つていなかつた。時代が来たら、適当な時代が来れば、やがて軍隊になり、そして日本は憲法を改正して戦力を持つようになることを予想していたに違いない、という印象を私は持つております。

では、例えば昭和三十年、千九百五十五年の保守、革新の大合同、つまり右派社会党と左派社会党が一緒になって日本社会党が出来る、自由党と民主党が一緒に、戦争の記憶、第二次大戦の悪い記憶があまりにもさまざまと残つており、そして旧軍に対する反感が残つていたからだと思います。

私は軍人ではありませんし、そして今は日まで軍人であったことはありません。ごくわずかな期間帝国陸軍の最下級の兵士であつたことはありますけれども、直接には戦争に参加したことはありません。ですから自衛官の方々、そして自衛官の幹部になろうとする方々に軍事的にこういう自衛官になれというような口幅つたいことは申し上げることは出来ません。ただかつての軍が持つていて悪さというものについては言えるかと思います。

私共旧制中学に入りますと、軍事訓練の授業がありました。一年生の時は、何も持たずに徒手と言いましたけれども、整列したり歩いたり回れ右したり、あるいは伏せ、それから折り敷け、その他の基本的な姿勢を習い、二年生になりますと、木銃を持つて、それを銃の代わりにして訓練いたしました。三年になつて木銃で戦闘教練、主に分隊教練が中心ですけれども、をいたします。三年の二学期になりました。私共の中学は二十世紀と一緒に作られまして、そこで初期の先輩が使つた銃が見本の形で残つております。村田式連発銃というものがそれで、その次に学校に残つていた約五百丁位小銃がございましたけれども、そのうちの二百丁位が三十年式歩兵銃というものでした。それから残りの三百丁位が三十八年式、三八式歩兵銃でした。

私達は小銃を与えられた時に学校に残つている村田式連発銃、二十年式歩兵銃、そして三八式歩兵銃というのをまず仲間同士で分解して調べてみた。村田式連発

銃というのは明治十三年かに出来ました

単発式の村田銃を明治二十二年に改良したもので、銃身の下にもう一つ銃身

のようのがありますし、ちょうどウ

インチエスター銃みたいな形で、その銃

身の下の筒型の弾倉の中に、列車のよう

に直列に弾を入れておく。そして遊底の操作によつて弾を一発ずつ引き出します。

私共旧制中学に入りますと、軍事訓練の授業がありました。一年生の時は、何も持たずに徒手と言いましたけれども、整列したり歩いたり回れ右したり、あるいは伏せ、それから折り敷け、その他の基本的な姿勢を習い、二年生になりますと、木銃を持つて、それを銃の代わりにして訓練いたしました。三年になつて木銃で戦闘教練、主に分隊教練が中心ですけれども、をいたします。三年の二学期になりました。私共の中学は二十世紀と一緒に作られまして、そこで初期の先輩が使つた銃が見本の形で残つております。村田式連発銃、三十年式歩兵銃、三八式歩兵銃に至るまでそれぞれ十年足らずの間に、制式銃を変換している。日本の明治の十年代、二十年代、三十年代の陸軍の誠意、誠実さ、真剣さ、問題に取り組む真面目さというものに対して私達は感動を覚えた記憶があります。

教官が我々を集めて三八式歩兵銃の性能の説明をしてくれました。有効射程距離は千八百メートルである。そして特に照尺を操作せずに射撃する時には、つまり基準射撃距離は三百メートルであるというようなことです。我々がここで問題にしたのは千八百メートル。千メートル向こうの人間というの人は人間がいるかないかがわかる位のものである。そのようないふたかうのを射撃して有効な効果を上げることはない。千八百メートルの射程距離は現実問題として意味があるかといふことです。それからもう一つ歩兵の戦闘で一番基本になるのは二百メートル

銃というものは明治十三年かに出来ました。それは安全装置の場合は安全装置が掛かっている場合には射撃しようと思つても照星照尺の手前に変な棒が出ていて射撃が出来ない。だから安全装置が掛かっているかいか一目で分かる。あるいは手探りでも分かる。ところが三八式の安全装置というのは九十度回転するのですけれども、回転する部分に僅かな出っ張りがあるだけで暗い所では安全装置が掛かっているかどうか、ことに手袋をした場合に安全装置が掛かっているかどうか判断することは困難です。安全装置の欠陥というのはありますけれども、遊底についての非常に大きな進歩があった。それは私達は認めた。そして村田式単発銃、村田式連発銃、三十年式歩兵銃、三八式歩兵銃に至るまでそれぞれ十年足らずの間に、制式銃を変換している。日本の明治の十年代、二十年代、三十年代の陸軍の誠意、誠実さ、真剣さ、問題に取り組む真面目さというものに対して私達は感動を覚えた記憶があります。

教官が我々を集めて三八式歩兵銃の性能の説明をしてくれました。有効射程距離は千八百メートルである。そして特に照尺を操作せずに射撃する時には、つまり基準射撃距離は三百メートルであるといふふたかうのを射撃して有効な効果を上げることはない。千八百メートルの射程距離は現実問題として意味があるかといふことです。それからもう一つ歩兵の戦闘で一番基本になるのは二百メートル

ラスマイナス百メートルじゃないか。従つて基本的な射撃距離は二百メートルであるべきである。ところが三八式歩兵銃の場合には、二百メートルの照尺にするためにはまず照尺を起こしてレバーを上げなければいけない。つまり二百メートルの距離にするために二拳動の操作が必要である。それに銃を持つて走つたりなんかすると、照尺を起こすという作業を繰り返さなければならない。これは欠陥じやないか。

私共が訓練を受け始めたのは中学三年、昭和十五年でしたけれども、その年の秋にジョン・フォードの「駅馬車」という作品が日本で公開された。ジョン・ウェインというスターが駅馬車の上からワインチエスター銃を撃つのですけれども、ワインチエスター銃つていうのはレバーを操作するだけで、二拳動の操作で新しい弾を装填して、ほとんど連発銃のようにして射撃している。

我々の三八銃、三十年式もそうでしたけれども、新しい弾を装填するためには四拳動必要です。レバーを起こして力一杯引いて、空の薬莢を外へ排出しなければいけない。そして新しい弾を薬室に送り込んでロックする。つまり四拳動を確実にしないと新しい弾が装填されない。これは十九世紀のアメリカのカウボーイが持つてゐる銃よりも我々の銃の方が速射能力において劣るのではないかといふようなことを、私達は教練の教官に質問をした。しかし彼等はそれに答えてくれない。答えられなかつたと思ひます。十九世紀の末から二十世紀の初めの明治二十年代三十年代の陸軍の将校達が武器を

近代化するということに苦労したのに比べて、日露戦争以降の千九百五年以降千九百四十五年まで陸軍の軍人は基本的な武器である小銃に対し何ら改良を、本質的な改良を加えなかつた。やはりこの時期日本の軍人というのは堕落していたという気がいたします。

姉が早稲田の美術史において、戦後時々発掘に動員されるので、彼女はその頃アメスコと言つておりましたアメリカ軍の払い下げのスコップを持って来ました。それを見て本当に帝国陸軍は負けたと思いました。私達が普通与えられていたのは小円匙と言いまして、長さ七センチ位でしょうか、背嚢の横につけて柄の先が十五センチ位背嚢の上に突き出るという式の小さなシャベルでした。シャベルであるために伏せた状態では穴を掘ることが出来ない。伏せた状態から自分が身を潜めるための穴を掘ろうとするとき、どうしても半身起き上がらなければいけない。あるいは理想的に言えば膝をついて、そして半身起き上がって穴を掘らなければいけない。そういう時にどれだけ多くの兵隊が敵の弾に当たつて倒れたかということを思う。アメスコというものはアルミニウムの輪が付いておりまして、皆様方は現実にそういうのを使っていました。しかしモーゼがエジプト記で行いました四十年間の砂漠の生活、この四十年間の砂漠の生活が新しいものを育てる。四十年間というのは、ある一つのスパン、広がりであろうかと思います。幕末からちよんまげを切つた人達が一応の近代國家になるのに四十年間、第二次大戦後日本人が自分達が劣つていたことに気が付いて、もう一度二度目のスタートを切つてから約四十年間。そして今は新しい退廃の時期に入ろうとしているのかもしれません。私達は第二次大戦を第一次大戦のヨーロッパ列強と同じくそれ以下の装備で戦つた。その苦い経験が第二次大戦後の技術革新とそれからの経済成長にあるとするならば、これから後、再び日本は新しい混迷の中に入ろうとしているのかも知れません。

人間のなりたちを生物の進化として考えた場合に、受精卵の状態で言いますと、たアメスコを見て「これでは日本負けるわ」と思いました。

私達が感じたその無念さ、これはある意味では幕末の日本人達がちょっとまげを結つていた日本人達が先進国の文物を見て感じた情けなさと似ていたかと思います。そこで私達の世代は奮起した。私個人は別に奮起してまともな役に立つようなことをした覚えは全くございませんけれども、やはりその奮起したという世代が千九百五十年頃から始まりましてその後の四十年間、ちょうど明治維新から日露戦争の終わり頃までに当たる期間頑張つた。その奮起の結果がたぶん経済成長と日本の技術の進歩につながつたかと思います。

しかしモーゼが出エジプト記で行いました四十年間の砂漠の生活、この四十年間の砂漠の生活が新しいものを育てる。四十年間というのは、ある一つのスパン、広がりであろうかと思います。幕末からちよんまげを切つた人達が一応の近代國家になるのに四十年間、第二次大戦後日本人が自分達が劣つていたことに気が付いて、もう一度二度目のスタートを切つてから約四十年間。そして今は新しい退廃の時期に入ろうとしているのかもしれません。私達は第二次大戦を第一次大戦のヨーロッパ列強と同じくそれ以下の装備で戦つた。その苦い経験が第二次大戦後の技術革新とそれからの経済成長にあるとするならば、これから後、再び日本は新しい混迷の中に入ろうとしているのかも知れません。

人間のなりたちを生物の進化として考えた場合に、受精卵の状態で言いますと、

ちょうど原生動物と同じようなものの細胞です。それから母親の胎内においてミシンコのような状態から魚類のような時代、それから両生類とも共通な時代、鳥類とも同じ時代、それから哺乳類の時代を経て、だんだん人間らしくなつて最後に人間として母親から生まれるといいます。

皆様方もたぶんおよそ軍人として教育を受ける以上、軍人としての一番素朴なもの、個人対個人の格闘、戦いということを基礎に置きまして、そして軍隊の一番素朴な一番原始的な状態から訓練を始められるのだろうと思ひます。私達の場合で言いますと、中学五年のうちの最初の三年間というのは整列の時に二列横隊に整列いたしました。そして小隊長が一番右端に付きそして第一分隊長と、左翼の分隊長が両横に付き、その他の分隊長が第三列目となつて横隊の後ろに付きました。どうして二列横隊に並ぶかと言うと、昔の、ナポレオン戦争の時代までの軍隊というのは二列横隊で前進して、射撃する時には前列が膝撃ちになり、後列が立ち撃ちになつて小隊長の号令以下一斉射撃をした。その名残のために二列横隊の行進というのが基準になつております。そして二列横隊のまま前進、後進した。そして二列横隊のまま組組右へ、組組左へ、あるいは右に向きを変え、左に向きを変えという、隊形の変換を訓練したわけです。これはナポレオン戦争時代の記憶をもう一度再履修したわけです。

そして帝國陸軍の戦いの仕方についてですが、皆様方もし見たことがないとするならば、この頃ビデオショップで手に

入ると思いますので、日活で昭和十三、四年頃作った「土と兵隊」というビデオを見ていただきたいと思います。あれを見ると帝國陸軍の中隊から小隊、小隊から分隊の戦闘のシステムが本当に教科書通り、操典通りに実演されているのを見ることができます。ただ分隊の単位になつてからはもう分隊長であり作者でもあります、火野葦平らしい、つまり小杉勇という役者が演ずる一人の下士官の目を通じているので、命令がどうなっているのか、他の分隊がどうなっているのか全然訳がわからなくなつてきますけれども。つまり敵の大砲を受けはじめますと、まず疎開という、疎開と言うと学童疎開なんかになりましたけれども、旧軍では元々攻撃前進の場合に敵の火力の被害を避けるために部隊の距離を、間隔を開くことでした。ですから小隊と小隊、あるいは分隊と分隊との間の距離を開くことを疎開と言いました。号令は「開け」と言いました。さらに敵の小火器の攻撃を受ける段階になりますと、分隊はさらに列兵の距離間隔を開きます。それを散開と言いまして、号令は「散れ」と言いました。映画では散れの段階になつてから以降は、もうめちゃくちゃですけれども、その段階までは昔の帝國陸軍はこんな戦争の仕方をしたのかということがわかるうかと思います。もう一つ見て頂きたいのは、軽機関銃です。銃手が病氣で後退することになつて、後任に申し送るところです。それを聞くと、如何に故障しやすい欠点だけの兵器かということがわかります。私達の時代でいいますと、最初習つたのは機関銃を中心にしてしまって、散

れの場合に分隊の左右に散れというのと、右に散れ、左に散れという三つの散開の仕方があつたのですけれども、やがて傘型散開と言いまして、一番から四番までが機関銃を中心にして先に行きましたが、五番以下は最後の段階まで後から付いて行き戦闘に直接参加しない、兵力を温存するというシステムに変わりました。これはたぶん昭和十三、四年の大戦の戦争の結果だと思います。

「土と兵隊」で私達はその頃の日本の軽機関銃、機関銃というものは欠陥商品であるということ、欠陥武器であることを知つておきました。今でこそチエコといふのは工業国としては大したことではないのですけれども、その頃のチエコというものは例えば日本では作れなかつたスコダという立派な乗用車も作つておりました。そしてチエコの機関銃というものは故障がなく、中國軍が使つていました。日本軍もチエコの機関銃を奪いますと喜んでそれを使つていた。日本の精密工業というものは、まだその頃あまり良くなかった。ことに私達が使う小銃弾の空砲ですけれども、もう何度も使い古されたせいか、時々空砲を射撃した後に薬莢が薬室から出てこない。その時火薬が残つたりすると大変怖いことになるのですけれども、いろんな不具合が当時の日本の武器にはありました。とにかく「土と兵隊」というのを見ますと帝國陸軍の戦争の仕方というのがわかつて面白かろうと思いません。

過去の軍隊プロセスを経て、皆様方は今日最も新しい戦いの仕方というものを勉強しておられると思います。ただ軍隊には現在の秩序のマイナスを知つていたくなるということを考え、そしてそれに備える人も必要だと思います。それには現在の秩序のマイナスを知つてゐる者でないと改良は出来ない。では今までの秩序が、あるいは今までのシステムが役に立たなくなるというのはどういう状況なのか、そしてそれを想定出来るのかということを考えますと、これはやはり教養ということに行き着くかと思います。

私は防衛大学校の卒業の祝辞を集めた「禪の研究」という本を従兄弟からもらいました時に、アメリカの陸軍士官学校が本学は百五十年前からそうやってい

ると言つたという有名な話があります。一般教養というのは何かを簡単に言うと専門ではないということです。英國で紳士、ジェントルマンというのは何かと言ふと彼は職業を持つちやいけないという前提があります。職業を持つている人間は紳士じゃない。つまり職業を持つては紳士じゃない。つまり職業を持つては必ずその職業にとらわれるから、だから医者でもなし弁護士でもなし、学者でもなし、商人でもなし、国会議員でもなしという何なのだから分からぬ、そして飯を食つていく財産を持っている。そういう人間が紳士だ。別な言い方をしますと専門家というのはその専門が通用しなくなつた時にはもはや役に立たない。しかし専門のない人間というのは何の役にも立たない代わり何の役にでも立ちうる。一般教養というのは社会学とか哲学とか歴史学とかある、は物理学概論とか、数学とか、そんなようなことを防大で習つて、あんなの全然面白くも何ともなかつたという記憶を持たれる人が多いと思いますけれども、一般教養を身につける条件は、そういう教室で習うものではなくて、自分が自發的に疑問を持つこと、自分は何なのだろうということだと思います。

私は十七ぐらいの時に西田幾多郎の「禪の研究」という本を従兄弟からもらいました時に、アメリカの陸軍士官学校が本学は百五十年前からそうやってい

のアイデンティティ、自分とは何であるか、自分を一応外側に置いて眺め、鏡に映したようにして自分を眺め、そのようなものとして自分を再確認する。自分はこれであるという形で自分を抱む。それがつまり教養というものだと思います。自分は防衛大学校の学生である。自分は自衛官である。自分は男性である。自分が何の誰がしという父親と何の誰がしという母親の間に生まれた子供である。どういう地域に生まれ育った人間である。日本語、日本文化というものを子供の時から身につけ、そのような中で成人した人間である。いろんな形で自分自身というのを見つけると思います。

古代のギリシャの神のお告げの中で「汝自身を知れ」という言葉があつたと言います。これも哲学史だと始終でてくるのですけれども、「汝自身を知れ」というのはお前のアイデンティティは何とか、お前は何なのだということを認識することだと思います。教養というのは簡単に言うと、この「お前は何なのだ」ということを認識することに尽きるかと思ひます。お前が何なのだと言ふことを考えたところで、それではこれが金儲けに役立つか、これが新しい機械を作るのに役立つかというよつたことは直接にはつながらないのです。しかしお前は何なのだということを私自身わりと痛切に感じたことがあるとすれば、十九の時に最下級の兵隊でしたが、学生でしたから、幹部になる可能性がある。私は短期間のうちに私と一緒に入った兵隊達に命令し、私達の先輩である人達にも命令しなければいけないかも知れない。お前にそ

んなことをする能力、資格があるのか、お前何様なのだという反省がまず自分の中にあつた。私としたらわざかな間にそういうような能力が付く見込みもない。そのように自分は、もしリーダーになるとしたら、いつでも先頭にいて一番辛い場所にいよう、それ以外ないとと思う。つまりお前は何だと言つたらその時の自分の答えとしては一番辛い場所にいるということでしたしかなかつた。もちろんお前は何だとうのはその場その場によって、先程最初に申しました憲法と同じようにその場その場によつて違つてきます。

しかし皆様方はお前何なのだ、自衛官なのだ。あるいは防衛大学校を卒業したらしい期間のうちで幹部になる、多くの人間を指揮する存在になる、それは何によつてなのだ、を絶えず自問しなればならない。防衛大学校を卒業した、その卒業免状なのか、幹部候補生学校を卒業した、その卒業免状によるのか。恐らくそんなものではなくてそれは個々人の内面の問題であろうかと思ひます。お前は何なのだと、ということを絶えず聞いてくるということを認識することに尽きるかと思ひます。お前が何なのだと言ふことを考めたところではこれが金儲けに役立つか、これが新しい機械を作るのに役立つかといつた疑いを持てば、それらの問題と自分がどういう関係があるか、といったことを数学を勉強しても物理を勉強しても自分の不得意な勉強でも自分なりの物の見方というものが出来るはずです。

繰り返しますけれども、点数はどうでもよろしい、ただ自分がその科目を学ぶことの意味を一人一人自分で見つけて欲しい。自分で物理を学ぶ、自分にとつての物理学は何かということ、自分にとつての歴史とは何かということを、もしされなりに納得すれば、それによってあなた方は自分が何であるかということを幾つかでも知ることになる。そのようなものの集大成として自分をとらえること、それが教養というものであります。恐らくあなた方が受ける軍事訓練というものが教養の一部になる。あなた方が習つてのこと、例えば小銃を操作すること、射撃をすること、こんなのはあなた方は一生役に立たないかも知れない。しかし小銃を操作するということが、あなた方にどういう意味があるかを考えることの中に、あなた方は自分と軍というものの基本を学ぶかもしれません。

旧制の中学校ではだいたい分隊長になることを予想して訓練していました。その上になりますと小隊長の訓練をする。私は旧制高校に入りました、もちろん軍事教練なんて嫌いな子なのですけれども、やはり感心することがありました。例えばその命令文の書き方、今の自衛隊も同じかどうか知りませんけれども、まず第一項に状況というのがある。つまりこの自分達はどういうような命令でどのような事情において現在の状態になつてゐるかということを言う。そして同時に現在自分達が直面している問題を明らかにする。次に第二項として指揮官の決心、そして自分は指揮官としてどうするかということを言う。第三項にそれに基づいて自分の部下に対して第一分隊はこうしろ、第二分隊はこうしろということを言う。その次に必要ならこの命令が発効する時間と場所を言う。最後に指揮官である自分がどこにいるかということを明瞭にする。私はこの命令文の書き方を聞

いた時に、現場においてこんな命令文を、状況、指揮官の決心、区處、命令発動の場所、指揮官の位置、そんなことをくだすり言っている暇なんかないだろうと思いましたけれども、やはりこの明晰さと方と同じなのです。あるいは幾何の証明問題の証明の仕方と同じなのです。そういう時に軍といふもの、近代軍といふものが持つて構造といふものに触れたうな気がしました。

戦前の日本は軍国主義なんて言いますけれども、一般の国民は軍事なんていうのは無関心だった。だいたい軍事についての本なんてほとんどない。私の記憶で言いますと、昭和の三、四年頃春秋社という所で世界思想全集というのが出まして、その中でクラウゼヴィッツの「戦争論」があったと思います。それ以降ずっと戦争に関する軍事学の本は何もありませんで、昭和十九年にリデル・ハートの「近代軍の再建」と言つたと思いますが、その本が岩波書店から出版された。つまり軍事学というのは戦前では一般的の学校では扱わなかった。もちろん軍事教練はありましたけれども、私も含めて一般的の学生は、もう嫌なこととしか考へない。そして国民の軍事についての無知というものが例えれば千九百一十年代以降の日本の退廃を産んだかと思います。

今日おられる防大の中でも全員が自衛隊に残るとは言えないかもしません。しかし社会に出て軍服を着ない、制服を着ない人達ができると思いますけれど

も、その人達にお願いしたいのは、やはり軍事というものの意味を、他の人達にもわからせて欲しいということです。またあなたの方から一人でも多く学者や評論家がでて、軍事学というものを作り上げて欲しいと思う。だいたい軍事といふのは戦前は軍人のものであった。そして戦後は軍事に触れること自体、軍とか戦争とか言うこと自体が顔をしかめられるような時代でした。つまり明治の近代化以来百五十年、日本国民はまともな意味で軍といふものを考えたことがない。

じゃあアメリカはどうなのだと言いますけれども、アメリカは今なお様々なマイナスがあるにも拘らず市民が拳銃を、武器を持つことを許している。つまり自分の身は自分で守るという建国の精神、自分の身を自分で守る気がない人間が、どうして自分の国を守れるかという精神が裏にあろうかと思います。それから私はアメリカンフットボール、いわゆるアメラグを見ていて思うのですけれども、あれは一種の格闘技なのですけれども、相撲とか柔道が一対一の格闘技なのに対してもアメラグというのは集団格闘技なのです。あれはまさに前線の小部隊の戦いのモデルになるのじやないか。家中に拳銃を持つ家庭に育ち、そしてアメラグで鎖骨を折つたり膝関節を痛めたりした若者達というのは、これはちょっと訓練すれば、そして彼等に愛國心があれば民一般は決して尚武の精神なんていふものはない、軍事的な知識は何もないといふ氣がいたします。

従いまして憲法改正というようなことを言いますけれども、その一番大きな障害は先程言いました旧軍に対する嫌悪感にありますかと思います。それと共に日本国民一般の軍事に対する無関心も無視出来ないと思います。ただ近年、平和に暮らしていた国民の拉致事件とか、フルに武装した工作船が日本の近海に出没したりして、そして日本の海上保安庁の船と戦つたりする。このようなことが明らかになるにつれ、日本人も次第に国を守るということ、あるいは国によって自分達を守つてもらうということ、あるいは国に守つてもらうためには自分達が税金を納める以外の何をすべきかということを考えるようになるかもしれない。その期待がいくらかは持てるような気はいたします。

その意味であなた方はそのような日本人の無知を開くためのいわば最前線にある。敵という言い方はおかしいのですけれども、あなた方が戦うべき差し当たりの目標はそういう日本国民の無知であろうかと思います。あなたの先輩は無知に戦い奮闘されました。しかし勝利を収めたとは言えません。ですからこそあなた方、そしてあなたの方の後輩にその志を継いでいただきたい。

それからもう一つ「汝自身を知る」ということにつながりますけれども、近隣諸国というものを知つて欲しい。国と言いますとすぐ日本という国を私達考えますけれども、こんな国は世界中どこにもない。偶然のことですけれども、いわゆるヨーロッパの先進国と日本とは似ています。マルクスが言うような古代国家、中世封建社会、資本主義段階というようなものをすらりと経過してきたのはヨーロッパの先進国を除くと世界で日本だけです。ですから日本のマルクス研究者達がマルクスの言うことは本当だと錯覚したのは無理ないですけれども、マルクスの言うことに、普遍性はありません。馬鹿の朝鮮半島も日本と比べると違う国です。中国も違う国です。フィリピンもインドネシアも全部違う国です。そういうさまざまな国を知つて欲しい。

また学生諸君にではないのですけれども、ここにおられる先輩方にお願いしなければなりませんが、もし日本の制服の自衛官をフィリピンの軍隊に入れてもらつて五年とか六年勤務させる、あるいは航空自衛官がインドネシア空軍に入つて五年とか六年勤務するというようなことをしようとする、もう大変な障害が起きることは間違いない。しかし私は例えば軍医ならよろしいかと思う、あるいは市民としてならよろしいかと思う。色んな方法を考へていただきたいと思います。あなた方はインドネシアでもフィリピンでもタイでもそこへ行つてそこで暮らしてその言葉を覚えその人達の物の考え方を肌で感じ、そしてその国と自分の祖国である日本との違いを知つて欲しない。これは別に将来フィリピンと戦うかい。あなた方はインドネシアでもフィリピンでもタイでもそこへ行つてそこで暮らして勤務するかもしれない。そういうことを思ひますと、あなた方はよその国を

知る必要があります。同時にイスラム世界も知つて欲しい。南北アメリカ大陸も知つて欲しい。

つまり「敵を知り、己を知らば百戦危うからず」と言います。我を知るということは、さつき言いましたアイデンティティです。敵を知るの「敵」という言い方は戦う相手、克服すべき相手というふうにも考えますけれども、私はこの場合敵というのを非常に広い意味にとりまして、「客観」という意味に取りたいと思します。自分とは何かということを知る。その時に同時に自分の環境を知ることが出来る、自分の仲間を知ることが出来る。私は若い時に文学の同人雑誌をやっておりました。その中でドイツ文学科を出てきた村上兵衛という男がいました。彼は東大に来る前に陸軍幼年学校、それから士官学校それから近衛第五連隊の連隊旗手、そして戦争に負けた時は群馬県に疎開していた陸軍士官学校の区隊長をしておりました。彼がつくづく言うのですけれども、自分は幼年学校から士官学校までずっと一緒にいる友達がたくさんいる。声をちょっと聞いただけであいつが誰だということがわかる。あいつは何が好きだということが、柔道がどの位強いかということがわかる。だけど良く考えてみると、あの男は本心何を考えていたか、ついにわからなかつた。そしてこうやって一緒に同人雑誌をやつてお互いに酒を飲みながら「馬鹿よ、のろまよ、お前才能がないな」と罵り合いながらやべり合っている時に本当に相手の気持ちがわかる。

もし今の防衛大学校の中に規律が厳しくてスケジュールが忙しくて、寝台を並べている隣の男の声も頭もわかっているつもりでも、本当のところこの男が何を考えているかわからないというようなことがあるならば、残念なことです。自分を知るためにも、汝自身を知るためにも、自分のアイデンティティを確認するためにも、隣にいる人間を理解して欲しい。隣の人間を理解することが出来たぶん韓国人を理解することが出来る、フィリピンの人を理解することが出来る、インドネシアの人を理解することが出来る。汝自身を知るということは、つまり他を知ることだと想います。そしてその上にあって、その他者と自分との間の問題を解決するのが葉であるか、あるいは武器であるか、あるいはその他の手段によるか、つまり貿易交渉によるか、技術的な協力関係を作り上げるか、そのようなことはその後に来るものだと思います。手段というのは最終的にその場になつて必要性を感じて築き上げるものだと思います。

あなた方はおよそ軍というものがこの世に発生してから今までの歴史を、いわば毎日の生活の中で訓練されている。されども皆様方が薄々考えておられるように、もしあなた方が戦う場があつたところで今日までに学んだ、身についた訓練というものが何ほどの役にも立たないということも、また覚悟したほうが多いと思います。それを解決するのには何か。それは自己認識であり、他人への認識であります。そしてそれに基づいて両者間の問題解決の手段・技術を考

え出さねばなりません。しかし現実には問題を解決するための手段はむしろその時のあり合わせの材料で、あり合わせの知恵で解決するより仕方がないと覚悟すべきでしょう。

あなた方の全世界の先輩は、そのようにして意に満たない状態で意に満たない道具を与えられて、しかも過大な任務を遂行してきたわけです。そのため成功した人もいる、失敗した人もいる。しかしそれに恐れず勇気を持って自分に誠実に、そして民族に対する責任を持つて、そして問題の解決に向かっていただきたい。それが私が一人の国民として、将来の自衛隊の幹部になられる防衛大学校の学生諸君にお願いしたいことでございます。

ありがとうございます。

三浦朱門氏を囲む在校生 代表との懇談会

参 加 在 校 生

四学年	池田 荘雄	(陸上要員 航空宇宙専攻)
四学年	清田 裕幸	(陸上要員 航空宇宙専攻)
四学年	園田 大志	(陸上要員 応用物理専攻)
四学年	高田 盛宏	(陸上要員 機械システム専攻)
四学年	高橋 陽介	(海上要員 國際関係専攻)
四学年	谷口 崇	(海上要員 管理学科専攻)
四学年	徳田 雄三	(海上要員 國際関係専攻)
四学年	中津 郁雄	(海上要員 國際関係専攻)
四学年	樺本 圭祐	(航空要員 材料物性専攻)
四年	木村 一紀	(航空要員 電子工学専攻)

四年	原口 大輔	(航空要員 情報工学専攻)
四年	兵藤浩太郎	(航空要員 國際関係専攻)
三年	荒井 定和	(陸上要員 國際関係専攻)
三年	桐谷 高弘	(陸上要員 公共政策専攻)
三年	黒住 匠洋	(陸上要員 建設環境専攻)
三年	松井 美樹	(海上要員 航空宇宙専攻)
三年	針原 寛幸	(海上要員 機能材料専攻)
三年	平野 泉	(海上要員 応用化学専攻)
三年	松江 奈海	(海上要員 國際関係専攻)
三年	山口 喜久	(海上要員 建設環境専攻)
三年	須田 秀司	(航空要員 建設環境専攻)

私の思う専門家の定義とは、全てのことについて何かしらを知っている人で、しかも自分の専門分野については全て知っている人間のことです。かつてありがちであった、自分の専門しか

知らないようではいけないのです。

将来のあなた方に必要とされることは体力、気力、そして全てのことについて何かを知つていて、さらに特定のことについては追随を許さないという姿勢です。皆さんは将来自分よりも技術も経験も豊かな部下を持つことでしょう。そんな部下を率いるのに、全てのことをカバーしているという前提に立った総合的判断力が必ず求められます。そしてこれが私の、あなた方に期待することです。

学生 防衛庁の国防省への展望はあるのでしょうか？

三浦先生 北朝鮮の問題は、ああいう工作船が来たときにどういう組織がどう対処するのかを真剣に考える可能性を開いたと考えています。工作船への対処は海上保安庁が今までやつてきてきましたが、海保はあくまで警察でしかなく、作戦的武力を持つてやつてくる者には、それでは対応できないのです。自衛隊でしかできないこと」を理解する方向に世論が向かうよう期待しています。ただ、マスコミの影響力といいます。たゞ、私たちが結婚するものと考えて頂きたい。

まず、私たちお互いの書いた物をほんと読みません。というのは、「こうこう、こういうことを書いた」と言うと、内容は想像できるからです。ありますが、北朝鮮の拉致事件等、從来の論調に不都合な事件が起ることのマスコミは間違いくつ部数を減らしていると思います。

話は戻りますが、このような事件が起きたとき自衛隊でなければできないという暗黙の了解もできつてあると思

います。憲法が変わり、防衛庁が国防省になり、それが国を守る組織集団になる、という気運はいずれ高まつていいことでしょう。工作船の事件は不幸なことではありました。その事からも防衛のあり方を考えていくことが必要とされるようになつたと思っております。

総理というのは大変不自由で、はつきりと断定して物を申すことの出来ない立場にあります。しかし、みなさん自衛隊のトップになるときには日本の体制は変わつてゐるのではないかと期待しています。

学生 先生は、おそらく日本で一番有名な作家夫妻でいらっしゃるわけです

が、同じ屋根の下に芸術家が二人いるということは、お互いの創作活動にプラスに働くものなんでしょうか？ それとも、「最も厳しい評論家を常に隣に置いているようで、やりづらい」（註：ピアニスト、マウリツィオ・ボリーニの言葉）ものなんでしょうか？

三浦先生 あなた方で例えるなら、ちょうど自衛官同士が結婚するものと考えて頂きたい。

まず、私たちお互いの書いた物をほんと読みません。というのは、「こうこう、こういうことを書いた」と言うと、内容は想像できるからです。たゞ、北朝鮮の拉致事件等、從来の論調に不都合な事件が起ることのマスコミは間違いくつ部数を減らしていると思います。

話は戻りますが、このような事件が起きたとき自衛隊でなければできないという暗黙の了解もできつてあると思

の方は日本財團の会長をしております。法人のトップとして、互いに意見交換が出来るわけです。また私たちは作家という職業柄、より根本的な、人間の本質や文化というものについて話し合つたりすることが多いのです。

昔私が日大の教師をしていたときには、私の先輩が「菓子屋の小僧は自分

の店の菓子には手を出さない」と教えてくれました。まあその通りで、私は自分の店（自分の教える大学）のお菓子に手は出さなかつたのですが、他の店のお菓子に手を出して（笑）、聖心女子大に通う彼女と付き合うようになつたわけですが……。

初め彼女は私たちの同人雑誌の仲間に入ってくれといつてきました。書いているものも悪くないので、いいだろ

うということになつた。ある日彼女と話をしていく、「好きな作家は？」と訊いたところ、チャールズ・ディケンズのことが好きだ、と言いました。ず

いぶん通俗的な作家が好きなのだと

言つたら、彼女は、「チャールズ・ディケンズが通俗ならマルクスも通俗だ」と答えたのです。これには私は驚きました。ディケンズとマルクスは同じ時代にイギリスで活躍していました。

デイケンズの父は借金が払えず刑務所に入つていました。そのためディ

ケンズは小さい頃から、靴墨用の墨を

得るために役に立つことを交換し合えま

す。私は日本芸術文化振興会会长の仕事をしておりまして、新国立劇場の設立などについても関わりましたが、妻

ならず、家で雇つていた女性を身籠らせるようなことまでしてます。マルクスは十分に通俗的だつた。そうすると、ディケンズとマルクスと、どつちが通俗的でどつちがプロレタリアートのことをよく知つてゐるといえるのか。・・・彼女の話を聞いて私はびっくりしました。彼女の通う聖心女子大文学部ではそんなことも教えるのか！ と。・・・まあ、それはあとで妻はそこまで考えて言つていたわけではなく、私の買い被りであつたことがわかつたのですが（笑）。

インテリゲンツィアの家に育つた私は、ブルジョワの家に育つた彼女の、いわば百科事典のような役割をしていました。インテリゲンツィアはお金のことを軽蔑する傾向がありますから、私は彼女から形而下的な生活を学びました。

違う環境に育ち、違うジェンダーであるから、お互いにマイナスの面もありますが、相手からよきものを得ようとする限り、そして相手に対する愛情がある限り、二人でいることはよいことだと思います。自衛官同士やごく近い関係にあるもの同士が結婚することは、とだと思います。

しかし、きつと何か役立つことがあるでしょう。いやどんな職業でもいい。相手に何を与えるか、相手から何を得られるかが重要なのです。

学生 この学校には一記念祝賀会で挨拶をされた松本三郎前校長がよくおつしゃつておられた言葉ですが、「知育・德育・体育」という言葉があります。そのうち、「知」すなわちインテリジェ

ンスの部分については最近のＩＴ技術の発達が、「体」つまり人間の力の部分については産業革命以降のテクノロジーの進歩によって補完されときました。それでは、「徳」の部分を補完するものは何なのでしょうか？また、モラルの荒廃が叫ばれている現在、一度崩れてしまつたモラルを再構築するため、我々若い世代はどう行動すればよいのでしょうか？

三浦先生 その話でしたら、妻の曾野綾子を呼んできたほうがいいかもしない……（笑）。知・徳・体は古代ギリシャの三つの価値、眞・善・美が人間に具現したものと考えるべきでしょ。妻はギリシャ哲学に非常に興味を持つていて、日本語で「徳」という言葉には、勇気・誠実といった意味があるそうです。日本語で影響を大きく受けていますが、「知・徳・体」に関して言うならば、ヨーロッパ風に考へたほうがよいと思います。

戦時中の大学生は入隊して試験に合格しますと、今で言うところの幹部候補生の訓練を受けました。そのときの訓練の一つに、完全武装で2キロ走つて、そこで問題を出され、「解答如何、五分？」というのを八キロ、十キロと繰り返すものがありました。最初の2キロくらいはまともな答えができるのですが、それが十キロ十六キロと走ると疲れて、適当な答えしかできなくなるので。後で見ると本当に恥ずかしい答えをすることになります。結局体力がないと、極限状態に近づくにつれ、知力が衰え、誠実さを貫く勇気もなくなるのです。

三浦先生 知育・德育・体育とは一体のものです。知育を磨いて自分がいかにあるべきかを考え、勇気や誠実さを身につければ、それを貫き通す体力をつけなければなりません。そしてそれが一番必要となるのがあなた方軍人なのです。

学生 国民の無知を啓くというお話を、戦争を教えない・また戦争に目をつぶる風潮のある教育が問題だとおっしゃいましたが、私たちは一体どうしたらいいのでしょうか？また先生は、近現代の歴史教育についてどのようにお考えなのでしょうか？

三浦先生 まず皆さん方がしなければならないのは、職務に忠実に生きることです。防衛・軍事に関する問題はいろいろとあります。これらの問題の解決に真剣に取り組むことが、そのための努力を惜しまないことが、とりもなおさず職務に忠実に生きることになると

思います。

三浦先生 また教育については、教育基本法が変わろうとしています。國家觀が変わろうとしています。あらゆるもののが変わろうとしているのです。戦後、我が国は日本の伝統・文化・優れたものが変軽んずる傾向にありました。占領政策にのつとつて作られた憲法の下、愛国心などは軽んじられてきました。しかし今は左翼的だつた有力マスコミでも愛国心の形を議論することはあっても、愛国心はいらないと言う言説はなくなつてきました。

三浦先生 今の教育基本法には、義務の思想はなく、「個人として」の完成しか書いていません。日本がいろいろな国際協力をやつていて、そこに参加している人たちが感じているジレンマを国民も考えていかなければならぬと思います。国際協力に関しては、駄目になつてきました。

三浦先生 新しい教科書の影響で従軍慰安婦の記述もなくなつてきました。娼婦がいふことは望ましくないことはあります。しかし、私は軍についていくそういう施設もありましたが、これは「日本軍独自の悪」ではありません。新しい歴史教科書の波及効果で全ての教科書の記述が変わりつつある。教育基本法も変わつてくるでしょう。

三浦先生 防大生のあるべき姿とはどのようなものだとお考えですか？

三浦先生 隊の秩序に対し誠心誠意徳です。

三浦先生 例えば部下が自分の思うようにならないとき、自分に誠実であり、かくあるべきものを貢げるのが勇氣であり、徳であると私は考えます。また、それを貢ぐためには、体力が必要になります。

つたために現在の中国人ではわからぬのです。

日本の文化は中国文化を取り入れ、仏教を取り入れる際にはインンド地方の文化も取り入れています。中世には仏教的な形而上の思想も取り入れるが、それも日本的なものになりました。明治には西周や福沢諭吉がヨーロッパから文化を取り入れて、多くの言葉を翻訳しました。彼らの言葉をなくすと、

今の東アジアの近代化は成り立たないと思います。ベトナムで共産を表すコソサンという言葉を聞いたときに、それは漢字に直せば「共産」という意味だとわかったことがあります。そして「共産」とは日本人が翻訳したものです。

つまり今は見えない、天皇は見えないし見える必要もないということなのです。皇居に行くと宮殿は見えないし封建時代の壕や石垣に囲まれている。しかし皇居の縁の中に天皇は確かに存在するのです。

天皇制については今までどおりのあり方であればいい。むしろ二十世紀前半の天皇のあり方が異常だつたのです。

学生 自分の父くらいの年齢の人を幹部として指導する時に、防大でのやり方では無理なような気がするのです。どのようにして人を惹きつければよいのでしょうか？

三浦先生 私たち学生が戦時中軍隊にとられて、一年ばかりの訓練で将校になるときに悩んだのはそのことです。まず、人を指導するときに人を惹きつけなければ、と考えると難しいでしょう。自分よりはるかに経験を積んだ人たちを指揮するには、自分が真っ先に死ぬつもりでやればいいと思います。もちろん死んではいけないので、そのつもりで指揮していれば、きっとついて来てくれる、そう思います。もちろん、戦時下ということもあって、（日本の）文化も守ることにも歴史的な意味合いがあると思います。それが何億人の人のためになると思いません。

でしようが、自分のやるべきことを一生懸命やるのです。最もよい隊員にも、最もよくない隊員にも全力でぶつかることです。それは、自分の打算ではなく、「よき隊員」にするために一生懸命ぶつかるのです。

隊長として、やるべきこと、やらね

ばならないことを、徳、つまり誠実さとかくあるべきを貫く勇気を持つてやればよいのです。ただし徳を貫くには体力が必要となりますね。

学生 私は遠藤周作先生の著書が大好きです。三浦先生は遠藤先生と親交が深かつたとお聞きしたのですが、遠藤周作先生についてお聞かせ願います。

三浦先生 遠藤は、それはそれは成績の悪い学生でした。それでいて秀才でした。彼の特徴は、裏切られた苦しみ、裏切ることの苦しみをよく知っていたということです。彼が小学校四年生の時に書いた、どうじょうの作文というものがあります。そこには、「もつと広い所に移してやろう」として学校の池に放したら、ついに全滅してしまいます。そこで、自分はどうに悪いことをしてしまった、自分は責任を放棄したのだと悩むわけです。似たような話で、犬の話というのがあります。彼は幼い頃大連に住んでいたのですが、兩親が離婚したので、母親に連れられて日本に戻ることになった。その時、飼つていた犬が見えなくなるまでずっと追いかけてきた。彼は、自分の飼い犬を裏切ったという気持ちに苛まれま

した。この時の記憶が、さつきのどじょうの作文に繋がっているのです。

戦時中、彼は自分がキリスト教徒であることにについて、「當時、キリスト教徒は國賊呼ばわりされていましたから、恥みました。あるとき彼は、下北沢の古本屋に行つて佐藤朔先生の文学とキリスト教の関係を書いた本を見つけて、それがきっかけで、慶應の佐藤先生のところ、仏文科に進学しました。そこで彼は佐藤先生からフランス語の本を手渡され、「彼はフランス語が全くわからなかつたのですが、読まなければ佐藤先生に申し訳ないと思つて、辞書を引きながら一生懸命読もうとしました。ドジョウや犬のときのように佐藤先生を裏切りたくない。そんな具合ですから」、三ページ読んでは、先生のところに行つてその本に書いてあつたことについて話して、また新しい話題が出たら、次のところを数ページ読んでも……、ということを繰り返していまします。それは、水槽で飼つていたどじょうが次々に死ぬので、「もつと広い所に移してやろう」として学校の池に放したら、ついに全滅してしまいます。そこで、自分はどうに悪いことをしてしまった、自分は責任を放棄したのだと悩むわけです。似たような話で、犬の話というのがあります。彼

として彼はフランスに留学するわけです。彼が留学している間に、慶應仏文科の新しい教官に誰を雇うのかという話が持ち上がりました。この時、東大出身の若い学者が良いのではないかという話が出たのですが、慶應の仏文科は「もうすぐ遠藤が（フランスから）帰つて来るのだから、もう少し待とう」ということになつた。

「君子、豹変す」という言葉がありますが、あるチャンスを得たときに入

これらの人ではなく隊長なのです。私はその時、すぐれた部下を前にして怯えてはならないと思います。一生懸命、とにかく一生懸命。自信なげな態度はいけません。その地位にいる人間として能力の不足はその結果に跳ね返つてくる

あなた方は何のダレガシと言うただの人ではなく隊長なのです。私はその時、すぐれた部下を前にして怯えてはならないと思います。一生懸命、とにかく一生懸命。自信なげな態度はいけません。その地位にいる人間として能

は豹変することがあります。豹は子供の時、斑点はないのですが突如全身に斑点ができます。遠藤は頭のいい鈍才だった。佐藤先生に会わなければ鈍才で一生を終えたことでしょう。同じことは自衛隊においても言えると思います。人間はある条件・環境の中では無能でも、一つのチャンスをきっかけとして変わることがよくあります。あなたには感覚としてでよいから、その方には感覚としてでよいから、そのことを将来部下を持つ身として知つておいて欲しいのです。部下の中に、第二の遠藤周作がいるかもしれません。

学生 私は海上要員なので、どうしても海軍戦略に傾いた話になってしまいますが、「統合」の問題についてお訊きします。最近の米海軍の戦略構想でも、一方で「統合」が必要だと言われながら、海軍は独自のやり方でいこうとしています。先生は自衛隊に根本的な改革が必要、とおっしゃりながらも、今日の講演で保守性が必要だと、おっしゃっていました。それはどういうことなのですか？

三浦先生 私は保守的なものを身につけていなければ、統合はできないと思っています。海上は海上の特殊性を持つて、はじめて陸上や航空と相談し、共同できるのです。世界の先輩たちが通ってきたことを全て忠実に通つていかなければなりません。そうしないと、将来の戦いはわからないと思います。

あなた方は明日パレードをすると思いますが、パレードをして何の意味が

あるのか。実はあのパレードの中に十八世紀の戦い方がある。今日の講演で私がはじめの部分で二列横隊での訓練をしたという話をしましたが、訓練をとおして古代から今までの戦いをやつしているのです。明日のあなたの方の棒倒しなど、さしつめ、縄文時代？の戦争でしよう。そのようにして古代から現在までの戦いを学ばなければこれから

の戦いはわからないと思います。最後に学生に対して何を希望されますか？

三浦先生 まず体を大切にしてください。そうしないとどんな知育も育ちません。この体を大切にしてくださいといふ言葉は、ただ単に御身御大切にという意味ではなく、体を鍛錬し、最高の状態に保つことを言っています。日常の業務や訓練は、十のうち七、八の体力でもつてこなせるように、体を鍛えてください。余力を残しながら、という前提の上で知育、德育なのですから。

私の兄、敏道は二期生でした。福岡県築城基地勤務中、交通事故死いたしました。昭和三十六年四月八日のことでした。二十六歳でした。

兄は、父が警察官僚であつたため、ソ連軍に懸賞付きで追われており、父不在の一家を連れての満州からの引き上げ、帰国しても食糧難の時代、妹の空腹を満たすべく満員列車での買出し等、小学時代から苦労いたしました。

父が帰国してやつと家族も安堵の生活が始まり、兄は、ソ連軍の暴虐を見、同時に共産主義の恐ろしさを知り、父の薦めもあり防衛大学校（保安大学校）へ入

学致しました。

私は今や六十の半端の年となり、妻と二人の娘に恵まれ、その二人の娘も嫁いで幸せな生活を送っております。

亡き兄を想う時、二十六才で志半ばで、未だ結婚もせず、路上で散った兄を何か

来るの戻はわからぬと思います。

遅れていた紅葉前線が一気に南下し、寒さが一段と厳しくなつてしまいまし

た。此度は、防衛大学校五十周年記念顕彰碑献花式に御招待戴き誠にありがとうございました。

十六日同窓会受付に参りますと、野本恒雄さんが居られました。十七日記念式典、観閲式に参りますと松井滋明さんが居られました。

お一人共、私共夫婦に付き添い案内する為にわざわざ来ておられたのだと不覚にも後になつて知り申訳なく有難く思いました。

野本、松井両氏は、兄が亡くなつて以来も、父母には息子の様に、我々妹弟には兄の様に面倒を見ていただきました。又、兄の眠る多摩墓地には毎日に併せて毎年、四月第一周の日曜日に二期生の皆様が墓参りをされるのが恒例となり桜花の下で、各々持参した得意料理の重箱を開け、お酒を飲み、偲ぶ会が開かれました。

結婚されると奥様を連れ、子供が生まれると子供連れで、多い時は四、五十名にもなる程でした。

こうして二十数年、三十年近く父母を慰め、励ましたくださいました。父母の喜び様はとても表現できません。

五十年祭を拝見し、感無量でした。

学生の頃、兄の運動会等で訪れた小原台は目を開けていられない程の砂埃の中

五十周年記念顕彰碑献花式によせて

宗幹雄

に白い学生舎がありました。この五十年で全く一変致しました。

日本を背負う学生のための堂々たる学び舎がありました。学生は若く、美しく、逞しく、姿勢、動きは五十年前と少しも変わりません。これを拝見した時、私は、はきつりと覚ることが出来ました。防衛大学の教育は、骨の髄までの全人格教育なのだと。

松井、野本両氏が何気なく我々に付き添つてくださること。

毎年の墓参りに家族を上げて三十年近くも通い続け、見守つて下さった二期生の皆様。

そして今、若者たちがこの伝統を引継ぎながら五十年が過つ。私は兄がやつと二六歳の顔でなく、年相応の姿になつたと悟ることが出来ました。

可哀相でなく、「どうだア！」という顔に見えます。

本当にお蔭様で区切りが付きました。ありがとうございます。父母も笑顔での式典を楽しんだと思います。

同窓会の皆様の心情あふれる御招待ありがとうございました。父母が亡くなりまして二期生の方々にお礼の言葉もなく歳月が過ぎてしまいました。

ここで改めて御礼申し上げます。

阿部様、同窓会の皆様のご健勝、ご多幸をお祈り申し上げます。

会員御入会のお願い

財団法人防衛大学校学術・教育振興会は、防衛大学校における教育及び研究を支援することを主たる目的として、各界からいただいた拠金を基に昭和六十二年八月に設立された財團であります。

いうまでもなく、防衛大学校は、我が国防衛の根幹である幹部自衛官たるべき人材を育成するための教育機関であり、同大学校において優秀な教官による優れた教育と研究がなされるか否かが、我が国防衛の将来を左右すると言つても過言ではないと思います。しかし、同大学校における教育・研究は、厳しい財政事情の下で残念ながら経費の面で充分とは言えない状況にあります。

平成 年 月

財団法人防衛大学校学術・教育振興会

会長 松本三郎

法人会員	一口	二十万円
個人会員	一口	二万円
一般会員	一口	五千円

連絡先 防衛大学校学術・教育振興会
〇二一二二六八一四九五一

に至っております。

一方、当財團の財政につきましては、近年の金利の低下の影響が余りにも大きく、ここ数年赤字基調の続く厳しい状況にあり、財團としても、止むをえず防衛大学校に対する援助対象の厳選と援助の削減を実施しこれに対処してきたところであります。

ついては、防衛大学校の卒業生各位に、当財團の防衛大学校教育に果たしている役割と、その置かれている財政の現状を御理解いただきまして、当財團の会員として御入会のうえ、御協力を賜りますよう心からお願い申し上げるものでござります。

ついては、防衛大学校の卒業生各位に、当財團の防衛大学校教育に果たしている役割と、その置かれている財政の現状を御理解いただきまして、当財團の会員として御入会のうえ、御協力を賜りますよう心からお願い申し上げるものでござります。



小原台は今

第八回国際防衛学セミナーについて

11期 川村康之

一 全般

(火)から十八日(木)までの間、アジア・太平洋地域十三カ国からオブザーバー一名を含む十四名の参加を得て、第八回国際防衛学セミナーを実施した。また、国内からは一般大学・研究機関から四名が参加した。

本セミナーは、「防衛大学校における防衛学の教育・研究の充実発展を図り、防衛大学校の新しい時代への対応に資する」とともに、「参加各國の防衛学の教育・研究の充実発展及びわが国との安全保障にかかる相互理解の促進に寄与し、あわせて「国内の一般大学の防衛学に関する学部・学科および部内外の同種研究機関等の教官・研究員に対し、相互理解の場を提供し、相互啓発に資すること」を目的として、平成八年から毎年実施されているものである。

国際防衛学セミナーは、毎年三月に実

施している「国際士官候補生会議」とともに、防衛大学校が実施する国際交流事業の二本柱の一つである。また、その目的から、防衛学教育学群の教官が、準備と実施の中核となっている。

紙面の関係上、ここでは、セミナーの中心である研究会の準備、実施および成果の概要について紹介したい。

二 計画及び準備

(一) 実施大綱の検討

平成八年度に開始された国際防衛学セミナーは、過去七回の開催を経て、防衛大学校の国際交流事業の柱として定着し、成果を挙げてきた。しかし、本セミナーの中心となる研究会における発表・討議の内容は、防衛大学校の教育全般にかかるものが大部分であるにもかかわらず、学校全体として取り組む環境になかつたため、得られた成果が学校の教育・研究に充分反映されていないという問題点があつた。

このため、本セミナーを学校全体の教育・研究に資するよう、今回から、参加範囲、テーマ等を防衛学に限定せず、学校全体に拡大することとした。

そして、全校的な参加を可能にするための具体的な改善事項として、今回のセミナーのテーマとして予定されて

いた「戦史教育」を、「士官学校における歴史教育」に拡大し、発表・討議委員として各学群から広く適任の教官の参加が得られるようにした。

(二) テーマ設定の狙いと背景

歴史教育は、教養教育の科目として、学校全体の教育と深いかかわりがあるとともに、防衛大学校においても重要な科目の一つである。また、その目的から、士官候補生教育における学問的な教育の全体像や理念を考察する機会が得られる。

このような認識に加え、現代の国際社会と変化の方向を考察すれば、国際化（グローバリゼーション、ボーダーレス化）の進展、国家や軍隊の役割の変化、テロリズムなどの国際問題への対応における多様な国家、民族、宗教や文化に対する理解の必要性の増大などによって、歴史に学ぶことの重要性が再認識されている。

このような背景のもとに、テーマを次のように定めた。

① 自由で活発な討議を促進する。そのため、「発表内容を他の論文に引用する場合は、発表者の了解を得る」というチャタムハウス・ルールが適用される。

② 発表・発言は、個人の資格で行うものであつて、所属する政府または機関を代表するものではない。

③ セミナーの目的は、参加各國の士官学校等における歴史教育の向上を目指すことにあり、議論を通じて何かの結論を得ようとするものではない。

育機関では必ずしもこのようないいので、それぞれの区分や重点にしたがって発表を準備してもらうこととした。

(三) いわゆる「歴史認識」の問題への対応

第四回セミナーにおいて、すでに「戦史教育」が取り上げられていた。そのため、わが国と中国、韓国などの周辺諸国との間で、いわゆる「歴史認識」に関する議論が生起する可能性があり、事前の慎重な対応が必要であった。歴史の教育的重要性については、論をまたず、これを避けて通ることはできないので、前回同様、この問題への対応を検討した。

その結果、以下の基本方針を決定した。「自由で活発な討議を促進する一方、司会の適切な統制によって必要以上の議論に陥ることを回避する。このため、議長は、発表・討議に先立つて、以下のことを明言する

① 自由で活発な討議を促進する。そのため、「発表内容を他の論文に引用する場合は、発表者の了解を得る」というチャタムハウス・ルールが適用される。

② 発表・発言は、個人の資格で行うものであつて、所属する政府または機関を代表するものではない。

③ セミナーの目的は、参加各國の士官学校等における歴史教育の向上を目指すことにあり、議論を通じて何かの結論を得ようとするものではない。

韓国からの参加者は、日本と韓国の

間に歴史認識に関する相違があること

を指摘し、「眞の民主主義によつて、共通の歴史認識を確立することは可能である」と主張する論文を提出したが、以上のような対応によつて、懸念されたような個別の問題に立ち至つた議論は生起しなかつた。

三 研究会の実施

(一) 基調講演

七月十日、オリエンテーションに引き続き、人文社会科学群の田中教授に基づく教養教育の理念、防衛大学校における基調講演を実施し、大学設置基準に沿った歴史教育が重要であると強調し、モンゴルは、社会主義教育を離れた愛国心や忠誠心を強調する新しい歴史教育が模索されていることを紹介した。

(二) 第二セッション

第二セッションのテーマは、「歴史教育の方法」であり、フィリピン、韓国、ロシア、シンガポール、タイと米国が発表を行つた。

特に、日本の歴史教育における問題点として、現代史の評価が研究者の間で大きく分かれていることから、学生に対する教育内容として積極的に取り上げられにくい点や学生の歴史離れの傾向が指摘したところ、各国参加者の共感を得た。

四 参加者の所見

シンガポールは、国軍統合軍学校における各級士官に対する歴史教育を紹介した。この中で、士官候補生から上級の士官に対する一貫した歴史教育が取り上げられていた。

韓国は、EUの例を挙げ、近隣諸国との歴史認識を統一する必要性を強調した。これに対して、インドとロシアは、歴史認識の統一は不可能であると反論した。韓国は、現在は不可能であるかもしれないが、将来については樂観し

てゐると述べて討議を終了した。

(四) 総合討議

研究会の最終日である七月十三日には、総合討議が実施された。まず、さまざまな視点から行われた発表討議を総括する意味で、教養教育としての歴史と個別分野の歴史である戦史との対比が議長によつて提起された。

ここでは、古代から現代までの通史を重視するのか、あるいは特定の時代や現代の問題を重視するのか、教養教育の重要性はどこにあるのか、歴史教育の重要性をどのように考えるか、歴史教育において客觀性を維持するためにはどうすればよいのか、学生の歴史離れをどうすれば防止できるのか等の問題について、活発な議論が行われた。

特に、国際関係がグローバル化する中で、国際的な視点を持つべきであるというロシアの指摘や自國中心主義の視点では不十分であるという米国の指摘が注目された。

・国情、軍種や経歴の異なる多様なメンバーが参加したこのセミナーにおいて、多くのことを発見できることは、とかく自己中心主義に陥りがちな我が国にとって重要であった（米国）。

・セッション中の司会を適切に行つた議長に感謝する。参加者が相互に協力しながら有意義な成果が得られたと思う

・ながら長に感謝する。参加者が相互に協力して議論を行つた議長に感謝する。

（韓国）

・また、国内大学等からの参加者には、セミナー全体の印象とセミナーに対する提言を含めた所見を求めたところ、以下の回答を得た。

・単なる交流ではなく、真摯な雰囲気があり好感が持てた（東京女子大教授）。

・配布資料は、良く整理されており、会場についても良く配慮されていた（日本大学助教授）。

・討論をする雰囲気が良い。また司会進行もむらがなく、順当な国際会議であったと思う（東京理科大講師）。

・国によって、内容やレベルにかなりの差があった。テーマの設定に工夫をこらして実質的な討議ができるようにすべきだと思う。防衛学内の各種国際交流事業に関する意見交換が必要である

（防研室長）。

五 研究会の成果と今後の課題

オーストラリアからは、歴史教育の重要性にもかかわらず、必修科目ではそれぞれ各国における歴史教育の理

念、現状及び問題点等について発表を行ひ、それに基づいて討議が実施された。

オーストラリアからは、歴史教育の

・参加各の事情は異なるが、この発表討議を通じて教育のあるべき理想を求めて議論できたのが良かった（イン

・議論における率直な精神や真剣な態度

に感銘を受けた（ロシア）。

・国情、軍種や経歴の異なる多様なメンバーが参加したこのセミナーにおいて、多くのことを発見できることは、とかく自己中心主義に陥りがちな我が国にとって重要であった（米国）。

・セッション中の司会を適切に行つた議長に感謝する。参加者が相互に協力して議論を行つた議長に感謝する。

（韓国）

・また、国内大学等からの参加者には、セミナー全体の印象とセミナーに対する提言を含めた所見を求めたところ、以下の回答を得た。

・単なる交流ではなく、真摯な雰囲気があり好感が持てた（東京女子大教授）。

・配布資料は、良く整理されており、会場についても良く配慮されていた（日本大学助教授）。

・討論をする雰囲気が良い。また司会進行もむらがなく、順当な国際会議であったと思う（東京理科大講師）。

・国によって、内容やレベルにかなりの差があった。テーマの設定に工夫をこらして実質的な討議ができるようにすべきだと思う。防衛学内の各種国際交流事業に関する意見交換が必要である

（防研室長）。

教育の理念と方法に大きな相違があることを相互に認識できたことは、国際化の時代において、それ自体が大きな成果であろう。

その一方で、我が国における歴史教育の理念と方法については、いまだに確立されていないことが、研究会の準備間によく理解できた。このため、まず、防衛大学校においてこのような議論を深め、眞の教養教育を根付かせるための努力が引き続き必要である。

このような意味で、第八回国際防衛学セミナーは、歴史教育を通じて教育の現状を深刻に見直すよい機会となり、防衛大学校と参加各国の士官学校教育の向上に資するという目的を充分に達成し得たものと思う。

おわりに

本稿は、防衛大学校においてどのような教育・研究に関する活動が行われているのか、その中で、卒業生を主体とする防衛学教官がどのような役割を果たしているのかなどについて、国際防衛学セミナーを通じて紹介したものである。ちなみに、第八回国際防衛学セミナーは、防衛大学校幹事が実行委員長、戦略教育室長が実行部会長、統率・戦史教育室の川村が発表討議委員長となつて実施された。最後に、関係各部の卒業生多数の協力を得て初めてこのように大きな国際セミナーの開催が可能になつたことに感謝申し上げ、結びとしたい。

国際士官候補生会議参加学生所感

三月二日（土）～十日（日）、防大において第五回国際士官候補生会議（ICC : International Cadets' Conference）が開催された。

参加者は、オーストラリア、カナダ、フランス、ドイツ、インドネシア、イタリア、マレーシア、フィリピン、韓国、シンガポール、タイ、英國、米国の十三カ国からの士官候補生で、イタリアは今回が初めての参加であった。会議は三月四日（月）～六日（水）、全学生が参加する形で「21世紀における新しい脅威と対応」を主テーマとして、「テロリズム」、「サイバー戦」、「難民問題」の三つをテーマにしたセッションが行われ、海外の士官候補生たちと活発な討論がされた。その後参加者一行は、富士、横須賀及び浜松でそれぞれ陸上、海上、航空自衛隊の施設を研修し、横浜、鎌倉方面での史跡研修を行つた。

以下、本校から各セッションに議長として参加した三人の学生の所感を紹介する。（学年は、国際士官候補生会議当時）

第一セッション（テロリズム）

三学年 高橋 陽介学生

九月十一日に世界を震撼させたテロリズム。この問題を取り組むか考えた末、テロリズムを四つのカテゴリに分

け、防大側参加者と海外士官候補生をペアにして一つのテーマを担当させる事にした。つまり、意見をぶつけ合う形である。では、どんな会議が出来上がったのだろうか？

まず、松木優子学生と米国のディレクターは担当した「国家支援テロ」。これをなくせるかどうかに焦点が絞られ議論が展開、なくせないとするものの脅威を減少または無効化できるという両学生の強い態度が印象的であった。

次に、本田一郎学生とマレーシアのアズリル学生が担当した「宗教テロ」。敏感になりがちなテーマだけに心配であつたが、冷静にテロと宗教の関係を分析した彼らの主張は、質の高い議論を呼び起

こした。

そして、斎藤雄介学生と英國のポール学生が担当した「大量破壊兵器」。特にテロリストが核兵器を手に入れ、使用する可能性を模索した彼らの現実的な視点は、まさに現代における核管理問題を浮き彫りにしたような気がした。最後に、松崎周学生と韓国・キム学生が担当した「国際協力」。テロリストに対する国際社会の対応は、武力に依るべきか否か、という問いに対しても人道的側面や現実的な有効性という視点を提供してくれた。

閉会式でも言つたとおり、我々はセッションとして結論を一つにまとめ、提言のようなものを出す事はしなかつた。しかし、会議は踊っていたかというとそうではなく、おたがいの個性、国柄をぶつけ合つた当セッションにおいて、本当の意味で相手を理解し、学ぶものも多かつたと確信している。

第二セッション（サイバー戦）

三学年 横山 真樹学生

ICC期間が始まり、一週間はあつと月ばかりあり、セッションのみんなでスケートに自分の意見を言い、時には意見が衝突することもあつたが、ICC会議では今までの成果を十分に發揮できたと思う。

私達のセッションには、オーストラリア、シンガポール、フィリピン、イタリアの各國士官候補生が参加した。事前討議の段階から活発な意見交換がなされ、また、言葉の面などでみんな協力してくれた。

このICC期間を通じて、世界の士官候補生は真剣に世界の諸問題について考

え、勉強していく、自分の意見を持つているなど強く感じた。

この点では、防大生は学ぶべきことがたくさんあると思う。また、彼らの表現力の豊かさについても、私達日本人は学ぶべき点が多いにある。一方で、世界の士官候補生と接して、彼らの良い点だけではなく、防大生の良いところも改めて発見した。そのひとつとして「ホスピタリティ」が上げられる。各士官候補生の何人かは、「今までこれほど他人から親切に迎え入れられたことがない」と語っていた。「もう少し防大にいて、皆と話したい。」と語ったある士官候補生の言葉は、学生舎等で、防大生から温かい歓迎を受けてのことだと思う。

二年間ICCに参加して、今年はいろいろな新たな試み（学生による事前討議

等)があり、昨年に比べて、学生のI.C.Cに対する関心が高まつたと思う。世界で見ても、各国の士官候補生が一同に集うということは珍しいことであり、このI.C.Cは世界の士官候補生と友好を深め、諸問題に対して意見を交換する素晴らしいチャンスであり、来年度も更に有意義な学校行事としたい。

第三セッション(難民問題)

三学年 池田 由香子学生

第三セッションのテーマは「難民問題」であった。希望により参加することになった学生は、私をはじめ二学年塚本学生、河原本学生、そして二学年日高学生であつた。十二月の終わりに指導教官の村井先生の部屋に集まり、約三ヶ月に及ぶ勉強会が始まった。まずは基礎知識の習得ということで、週に一度の勉強会に、各人がそれぞれ勉強してきたことについてレジュメを作成して発表する形式で進めた。厳しい質問が飛び交い、試験期間とも重なり大変だった。

我々の前に立ちはだかる壁は、英語だ。

週に二回のギリス先生とのレッスンでは、日本語で行つた発表と全く同じものを英語で行い、最初のうちは不安だったが、本番近くになると議論らしくなってきたので、これは行けると思った。

いよいよ外国人参加者を決める段階となつた。難民問題は世界的な問題であるため欧州、アジア、米大陸から満遍なく選ばれたかった。カナダ、ドイツ、フランスは世界有数の難民受け入れ国であり、タイは国境付近で難民の支援活動を積極

的に行つており、またインドネシアは東ティモールの難民問題を抱えているという理由から、以上の五カ国を選ぶこととなつた。

そして本番。五人の外国人士官候補生たちも非常に協力的で、積極的に意見を述べてくれ、議長の私としても大変助かっただ。どの学生も自国の難民政策のことよく勉強しており、日本人の学生も勉強になつた。特に軍隊の難民支援に関しては、誇りを持つてより詳細に語っていた姿が印象的であつた。外国の学生と話していつも思うことは、自國に高い誇りを持っていることだ。もっと時間を掛けた話し合いたいくらいだつた。この経験を元に、今後も国際問題に関心を持ち続けていきたい。



平成14年度運動系校友会活動結果及び部員数状況

14.12.2現在

校友会名	成績	部員数		校友会名	成績	部員数		
		男子	女子			男子	女子	
応援団リーダー部 短艇委員会	開校記念祭リーダー公開 全日本カッター競技大会 準優勝 関東地区新人戦 優勝	13 60		銃剣道部	全日本青少年大会 団体優勝 全日本学生選手権大会 団体3位	35	4	
バスケットボール	男子 秋季関東リーグ戦 4部13位 女子 春季神奈川リーグ戦 3部2位	39 7		グライダー部	久住山岳滑翔大会出場	22	2	
柔道部	神奈川県学生春季大会出場	30	4	ソフトテニス部	秋季関東学生リーグ戦 8部昇格	22		
ラグビー部	秋季関東大学リーグ戦 3部2位	111		ボクシング部	関東大学トーナメント 4部5位	52	2	
サッカー部	神奈川県リーグ戦 1部4位	66		レスリング部	東日本学生リーグ戦 2部3位	25		
剣道部	関東学生剣道新人戦大会 ベスト16	62	8	ボート部	5大学レガッタ エイト準優勝	31		
空手道部	全国国公立選手権大会 優勝 秋季関東リーグ戦 1部4位	66 32	5 13	フィールドホッケー部	男子 秋季関東学生リーグ戦 1部昇格 女子 秋季関東学生リーグ戦 2部6位	44	15	
バレーボール部	男子 秋季関東リーグ戦 4部昇格 女子 秋季関東リーグ戦 8部3位	32		ワンドーフォーゲル部	鍋倉山、立山、尾瀬、芦ノ湖周辺等で活動	18		
卓球部	秋季関東学生リーグ戦 5部2位	20	1	パラシュート部	日本選手権大会	13	4	
陸上競技部	男子団体4位 女子団体2位	46	5	準硬式野球部	個人Jr.の部 優勝 1年桜井、2位 2年西平	40		
硬式庭球部	男子 関東理工科リーグ戦 7部2位 女子 関東理工科リーグ戦 8部昇格	37 7		合気道部	秋季神奈川7大学リーグ戦 3位	38	1	
硬式野球部	神奈川リーグ戦(春・秋) 2部優勝	34		体操部	全日本学生演武会出場	35	5	
射撃部	秋季関東学生ライフル選手権大会 総合8位	19	1	弓道部	東日本学生選手権大会 団体17位	40	5	
山岳部	乗鞍岳、明神岳、五竜山、富士山等登山	10	1	少林寺拳法部	男子 1部優勝、女子 2部4位			
水泳(競泳)部	東部国公立大会 男子3位	32	4	フェンシング部	全日本学生大会 団体演武最優秀賞	36		
水泳(水球)部	関東学生リーグ戦 1部12位	18		神奈川リーグ戦(春・秋) 2部優勝	関東学生大会 団体演武優秀			
ハンドボール部	秋季関東学生リーグ戦 5部7位	19		相撲部	関東学生選手権大会	23		
アメリカンフットボール部	関東学生リーグ戦 2部5位	85		バドミントン部	フルーレ 4部2位、サーブル及びエペ 2部昇格			
ヨット(小型)部	関東学生選手権秋季大会 470級11位 スナイプ級13位	18		居合道部	全日本大学対抗選手権大会 団体13位	23	1	
ヨット(クルーザー)部	イタリア海軍兵学校・リボルノ市共催国際レース 士官候補生の部7位	14	2	吹奏楽部	全国国公立対抗大会 団体準優勝	18		
				儀仗隊	東日本学生リーグ戦 2部7位			
					秋季関東大学リーグ戦	25	6	
					男子 3部昇格、女子 5部4位			
					居合道部	自衛隊全国大会 団体優勝	30	1
					吹奏楽部	開校記念祭記念式典・観閲式	33	10
					儀仗隊	横須賀プレ開国祭	50	4

記念行事顛末記

防衛大学校の創立50周年に当たり、各地域支部等を含め同窓会は、各種記念行事を行った。本部事務局が担当したの記念行事は、平成十四年十一月十六日（土）の小原台上で予想を超える盛況を呈し滞りなく終了した。

その準備は、昨平成十三年の総会後から始まつた。通常、総会後と言えば、本部事務局員の交代であり、当年度を担当する期は、十一期を中心としたボランティア要員である。ところが、行事の大さや調整相手方である50周年記念事業の委員会メンバー乃至学校当局のメンバーを考慮し、本部事務局長をはじめとした諸先輩方の意向で局員交代が、最小限に留め置かれた。また、恒例となつている各種競技会等を実施しつつの記念行事準備には、どうしても今までの人数では人手が不足すると考えられ事務局員の増強が図られた。この増強に協力していただいた各期生会には心からお礼申し上げたい。

行 事 項 目	担 当
全 般 統 制	日高（9F）、河村（11N）
モ ニ ュ メ ン ト	明野（10N）
顕彰碑献花式行事	阿保（11G）、洞澤（11G）、佐古（12G）、佐藤（12N）
各 種 贈 呈 式 行 事	若木（10G）、小森谷（12N）、西大（12G）
祝 賀 会 行 事	田尻（10F）、今久保（11G）、古賀（12G）
総 務 ・ 管 理	吉田（10G）、森永（11F）、新倉（12N）、清水（12F）
出 席 名 簿	桜井（11F）、佐々木（12F）

勿論、この担当者だけでは記念日当日の所要は満たせず、小原台支部事務局長西井1空佐、局長補佐高橋1陸佐、総務部長最上2海佐、事業部長宇田川2空佐を中心とした学校勤務乃至在学同窓生多数の支援を得た。それは、風の強い中で

の受付業務、慰霊行事にあつては、例年の通り会場清掃、設営に始まり行事進行の担当、そして後始末まで、また記念講堂での講演、贈呈式行事にあつては、会場整理やステージの準備等、延べ約一〇〇名を数える同窓生の支援となつた。

慰霊行事は、殉職された方々の御遺族に案内状を送付することから始まつたが、その数の特定に曲折があつた。というのは、防大学生課から入手した名簿には、88柱のお名前があるものの、その中の一方は学生の身分で航空自衛隊百里基地において亡くなられ、公務と認定されはいないものの、如何なる経緯なのか不明ながら遺影が顕彰室にある。諸々の状況を考え、今後のためにも87柱と確定させて戴き、行事参加のご返事を戴く前に宿として横須賀プリンスホテルを予約した。無理した予約に応じてくれたのは、事務局員の元部下のホテル支配人である。

大勢の方に案内状を出した関係で、それぞれの方に応じた控え室を準備する必要があつた。学校当局にお願いし、会議室、教場、新図書館視聴覚室、果ては入札室までも借りることとなつたが、新しくなつた施設のため何処にどの会議室等があるのか掌握に一苦労であると共に、それぞれを管理する責任者が総務課、学生課、図書館或いは教育群等で部屋の鍵接受にも労力を要した。各部屋の案内表示は、かつて手慣れた手法を駆使した拡大コピーリングでの作成と相成つた。管理、総務畠を含めた多くの分野で経験した現職時代の仕事が上手くいかされたと思われる。学校が保有する来校者識別用のリ

最終予行は、記念日前日に泊まりがけで行つた走水荘での岡上演習である。行事当日の時程に従い、各担当が行動の概要を述べ、各人の行動を再徹底した。それでも、未だ不明な点もあり、侃々諤々

ボンは白色が基調である。ことの習いから慰霊行事関係者にその白色リボンを使用したため、赤色リボンが大きさの種類によってはどうしても不足するため横須賀総監部借用をお願いしたりと、その経験の中身は、相当の融通が利くものである。

かかる行事の準備にあつて、予行は欠かせない。手順に従い部門別予行と全体予行を行つた。勿論、実際の予行行動の前には、岡上演習形式の机上予行も行った。予行での関心事は、部門別ではあるが、思いのほか多くの感謝状等受領者がおられ、引き続き記念マーチ演奏、ビデオ試写を行う各種贈呈等行事であつた。後に続く祝賀会の時程を考えると、数分の滞りも許されない上に会場設定、幕間を利用しての再設定を含め盛り沢山の事柄を織り込んだ行事である。しかも、予め策定した行事の細部計画はどんどん変更されるという事態も生起していた。例えば、基調報告の所要時間、受賞者の増加、演奏曲目の増加である。防大吹奏楽部の予行実演奏の間にも変更が為された。その上、会場の放送設備は、学生放送委員会の手を借りなければ、他にそれを使える人がいない状況である。司会を担当する事務方は、やや、薄氷を踏む思いである。しかし、日頃、テレテレやっていても「本番に強いのが防大生」、当

の演習である。加えて、未だ確定していない同窓会長挨拶等の案文を作ったり、或いは、招待者氏名札を並べ、相撲の取り組を決めるように講演会場着席位置を考えたりと、十五年春には閉館されるという走水荘での記憶に残る出来事であった。

記念講堂から余裕を持って移動して始

まつた祝賀会は、参加した4個大隊からの学生の若さを凌駕するような同窓生の熱気であった。あまりに同期等での話声が大きく、司会から注意を促すほどである。同窓生の宴では散見される事でもあり、気を付けたい事柄である。この会場設営に当たっては、管理課の大竹事務官、

それに入札業者として選んだ「お多幸」の配慮が大きかった。横須賀在住の海OBの車を借り、南極への出航前由田浦に停泊する「しらせ」から運んだ南極の氷も好評であった。これだけ同窓生、学生に喜んで貰えば、「しらせ」艦長も本望であろう。

同窓会長から心の絆としての学生歌、応援歌、逍遙歌の作詞、作曲者の表彰があり、從来、作詞者等が不詳とされてきたものが祝賀会担当の調査で明確となつた。祝宴の終わりに唄つた「学生歌」は、台上から巷に木靈せんばかりであった。

「日高（9F）」

平成十四年度 代議員会 議決結果

1 六月七日G/H市谷で開催された臨時代議員会（議長 土井義尚氏 陸九期、委任状送付者を含め代議員91名参加）において、渡邊 信利氏

九期、委任状送付者を含め代議員91名参加）において、渡邊 信利氏
陸六期 が次期会長（十五年七月一日以降）に選出された。

本誌「防衛大学校同窓会平成十三年度決算報告」参照。

(2) 平成十五年度事業計画及び予算案
本誌「防衛大学校同窓会平成十五年度予算」参照。

(3) 平成十五年度の人事案（渡邊次期会長を除く。何れも十五年七月一日以降）

十二月二十日G/H市谷で開催された定例代議員会（議長 小林貞雄氏 空九期、委任状送付者を含め代議員94名参加）において、次の議案が承認された。

(1) 平成十三年度事業報告、決算報告、財産目録及び会計監査報告

(4) MCI事業案（細部については次の通り）	ア 審議の中で確認された主要議決事項（同窓会本部の提示内容）
-------------------------	--------------------------------

(ア) MCI事業を実施する。
a 同窓会は次の二つを当面の目標として取り組むこととする。

① 防衛大学校創立50周年同窓会記念事業の一環として、防衛問題に係わるデータベースを主として

同窓生により構築し、国家、社会に對し軍事的配慮の重要性を正しく発信しう得る環境を段階的に整備する。

② 同窓生相互間の各種情報交換機能を充実させるとともに同窓生相互が自主的に相互扶助を行ひ得る環境を提供する。

b この際、同窓会による経費支援は、当面は将来の返納は予期せず、年度の同窓会事業の枠内で出資可能な範囲にとどめることとする。

c このため、十五年三月末までに同窓会本部にMCI準備委員会を設置し、記念事業委員会のMCI検討チームを引き継ぎ、事後の検討に着手するとともに所定の業務を推進する。

○記念事業予備費をMCI事業に充当する。

充當する醸金予備費の総額は、記念事業委員会で最終決算できる平成十五年四月以降に確定するが、それまでの間、一、五〇〇万円を充當できる目安として仮置く。

○記念事業予備費をMCI事業に充当する。

充當する醸金予備費の総額は、記念事業委員会で最終決算できる平成十五年四月以降に確定するが、それまでの間、一、五〇〇万円を充當できる目安として仮置く。

○十五年度事業は、記念事業委員会から正式に示された醸金予備費の総額を受けて、準備委員会で検討した実施計画（要領）を、

本年六月の臨時代議員会に諮り承認を受ける。

a ①防大ホームページ、②名簿の登録・閲覧機能、③メール機能、④貢献志願者登録、⑤防衛能力者登録、に必要なシステムを構築し、運用を開始する。

b 使用経費は、一、五〇〇万円以内を限度とし、余剰金が生じた場合は、次年度以降に繰り越す。

c 特別会計とする。

(エ) MCI事業全体について、三年目を日途に見直す。

イ 付帯決議事項

MCI事業を実施する決定に伴い、50周年記念事業委員会からの醸金予備費の運用提案は以下のようになされた。

○記念事業予備費をMCI事業に充当する。

充當する醸金予備費の総額は、記念事業委員会で最終決算できる平成十五年四月以降に確定するが、それまでの間、一、五〇〇万円を充當できる目安として仮置く。

○記念事業予備費をMCI事業に充当する。

充當する醸金予備費の総額は、記念事業委員会で最終決算できる平成十五年四月以降に確定するが、それまでの間、一、五〇〇万円を充當できる目安として仮置く。

○十五年度事業は、記念事業委員会から正式に示された醸金予備費の総額を受けて、準備委員会で検討した実施計画（要領）を、

本年六月の臨時代議員会に諮り承認を受ける。

理事 原 充男氏（空十期）

(イ) 十五年度事業は、次により実施する。

記事 「吉田（10A）」

第六回期別対抗ゴルフ大会

優勝
グロスの部
ネットの部
九期生
十期生

十月四日（金）第六回防大同窓会期別対抗ゴルフ大会が絶好の好天気のもと千葉カントリークラブ川間コースで行なわれ、グロスの部は十期生チーム、ネットの部は九期生チームが獲得しました。両チームとも初の快挙でした。

本ゴルフ大会も第六回を数え、今年新たに十二期生も加わり総勢一二〇名(二期生から十二期生までの各期10名の選手)による対抗戦(規定・グロス、ネットとも上位7名のスコアで順位を決定(シニア一組などの区分なし)で非常に盛り上がり、同窓生相互の親睦を深めることができ非常に有意義な一日でありました。

ない最高の天候に恵まれ、開会式での阿部会長からも、「今日は、この大会のためにすばらしい天気を準備しました。

選手諸兄ぜひともがんばつて下さい。」とのユーモアあふれるスピーチで、激励され、各選手はそれぞれスタートしていました。一方で「スコアが悪かった場合、日頃天気のせいにするのに今日の天気では理由がつかいなあ：」とのつぶやきを残して

弘中勝彦、山中啓吉、長谷川語、松井英基、岩崎重雄、酒巻尚生、小山力、木公正樹（順不同）でした。

卷之三

続いて、ネットの部新ヘリア方式によるハンディキャップを案出しての集計上、結果がでるまで優勝の期が、判らぬことから各期とも「ひよつとして我が期かな」との淡い期待を堅持しつつ、一ぱし結果待ち そして「優勝 九期」との発表があり、代表者は「興奮しています。我が九期は、ゴルフの優勝は初めてになります。これも皆様の応援のおかげです。ありがとうございました。」とのスピーチ 優勝した九期の選手・長崎喜徳、吉原宣之、田川友康、久保善昭、江本泉、森本洋泰、山口利勝、平佐幸政 山本昇、長嶋浩（順不同）でした。

なお、今年の大会にも松本前校長が特別参加され、阿部会長、松崎副会長と連しくラウンドされました。懇親会では、「今年は、12期までの一二〇名による十会 かような大人數の参加でありながらよく統制され協力しあつての雰囲気に充

に接し、あらためて防大の団結力のすばらしさに感激しました。益々の同窓会の発展を祈念しています。私事ですが、今日は私の誕生日でして、このような記念すべき大会にお招き頂き感謝申し上げます。」とのお話を頂き、参加者全員から「お誕生日おめでとうございます」との祝福がありました。最後に、阿部会長から、「優勝した十期、九期の諸君優勝おめでとう。尽力された努力に対し敬意を表します。また、プレーされた皆さん今日一日楽しまれたでしょうか。かようには年1回とはいえ愛好者がゴルフを通じ同窓生の融和團結を図ることは有意義であります。このような各種行事等も継続企画し、同窓会活動の更なる充実・発展を期す所存です。一層の支援・協力をお願いする」とのスピーチで大会を終了しました。

また、六期宮下郁雄氏から誕生日の松本前校長に特別賞の寄贈があり、阿部会長から贈呈されました。

▲ 松本前校長、阿部会長ヒト期優勝メンバー



▲ 懇親会時松本前校長のスピーチ



ラウンド後、スコア
集計では、グロスの部

えで効果ありとの判断で、「楽しくやって下さい」と返事 同じ組の後輩に先輩からの二言「思いやりのある後輩だから先輩に気を使つて意図して林に入れてくれるよなあ」とのことで、氣謔々の雰囲気でラウンドしていました。

なお、今年の大会にも松本前校長が特別参加され、阿部会長、松崎副会長と懇親会では、よく統制され協力しあつての雰囲気に直

また、六期宮下郁雄氏から誕生日の松
本前校長に特別賞の寄贈があり、阿部会
長から贈呈されました。

第五回期別対抗テニス大会

平成十四年五月十九日（日）小原台の防衛大学校テニス・コートにおいて、第五回大会が開催された。

前日まで雨が降り続き、コートの使用が危ぶまれたが、白石硬式庭球部主将以下、現役部員が、八尾監督の指導のもと懸命の整備にあたり、どうやら使用できることになり開始が若干遅れたものの無事、開催に漕ぎ着けた。

開会式は、松崎同窓会副会長（二期生）の開会挨拶に引き続き、井川運営委員長、龍岡ADからルールの説明があり、遅れた分を取り返すべく早速試合を開始した。試合中は、晴天に恵まれ、6コート狭しと熱戦が繰り広げられた。

ダブルスを組んだご夫妻の仲たがいができる一幕もあつたが、和気藹々のうちに試合を終了。

一期生から十二期生までのチームの選手は、ご夫人を含む一三七名があつたが保険のお世話になることなく無事閉幕となつた。

成績は、シニア・リーグは、優勝7期、以下十二期、八期、九期、十期、十一期で一期の順であつた。

レギュラー・リーグは、優勝五期生チーム。以下、三期、六期、四期、二期、一期の順であつた。

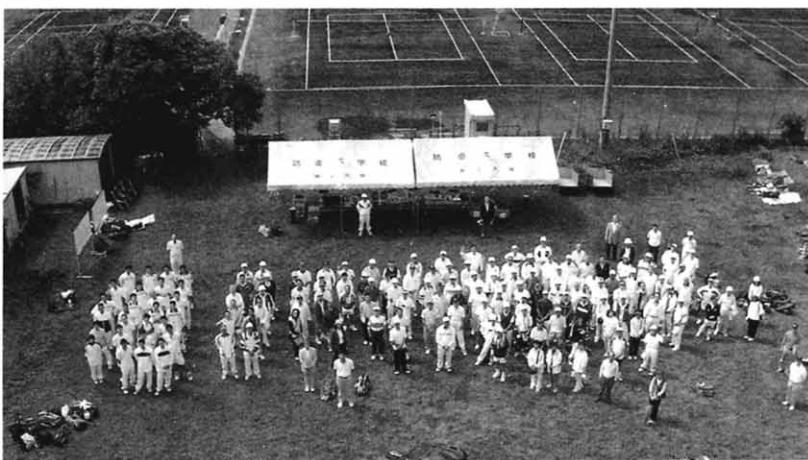
表彰・懇親会では、第六回大会から七期生チームが、シニア・リーグに入りをする予定だが、今年優勝したので入れな

いとの意見が出されたものの、健闘を称えあい、再会を誓つて散会した。

来年から十三期生が、参加することになるが、今から準備をし、初参加、初優勝を狙つては！

参加についての問い合わせは、同窓会本部まで。

記事「明野（10N）」



期別成績表

	自チーム	相手チーム	自チーム	相手チーム	順位
	勝点計	勝点計	勝点計	勝点計	
一期生	0.5	11.0	0	8	11
二期生	2.0	8.0	1	6	6
三期生	2.5	11.0	2	10	4
四期生	3.0	6.0	2	5	3
五期生	2.0	7.5	3	7	7
六期生	4.0	7.0	4	5	1
七期生	2.5	9.0	2	8	5
八期生	2.0	6.5	1	5	8
九期生	3.5	6.0	3	4	2
十期生	1.0	9.0	1	8	9
十一期生	1.0	6.0	1	6	10
十二期生	0.0	9.0	0	7	12

第四回期別対抗囲碁大会

50周年記念大会6期生2年連続制覇

防衛大学校同窓会が主宰する各期対抗の親睦・交流行事として第四回目の囲碁大会が本年も九月七日（土）日本棋院会館において盛大に実施された。当日は一期生から今回初参加の十二期生までの選抜碁手98名が一堂に会し、日ごろの腕自慢を大いに發揮して素晴らしい熱戦が繰り広げられた。開始の先立ち、君島信同窓会副会長の挨拶のあと高比康之競技委員長から競技実施上の諸注意があり、0930熱戦の火蓋が切られた。

競技は今回から始めて取り入れたスイス方式で実施され、予め決定していた対戦表の基づき、オール互い先、4回戦で実施された。各回戦終了と同時に次の対

戦相手を発表し、また、対戦結果を壇上に設定したチャートに掲示しつつ、緊迫した雰囲気の中で昼食をはさみ、午前中2回戦、午後2回戦の競技を終了した。その後、成績集計の結果が出次第表彰式に移り、優勝六期生の代表の対して、君島副会長から優勝カップと副賞が授与された。また、4戦全勝の遠茂谷選手（一期）、吉崎選手（二期）、倉田選手（三期）、清水・東野選手（四期）、中田選手（五期）、志賀・吉田・伴選手（六期）、竹永・佐藤選手（八期）、大塚・庄山選手（九期）の13名の紹介があり、参加者全員での健闘を称えた。

引き続き優勝チームの代表者の乾杯の音頭により懇親会に入り、対戦相手の健闘を称えつつ、和やかな歓談のうちに本大会は終了した。

記事「西大（10A）」



1	高比康之	(一期)	初代防大同窓会本因坊
2	甲斐聖彦	(八期)	初代防大同窓会準本因坊
3	志賀茂男	(六期)	
4	浜本良弘	(六期)	
5	朝日通夫	(三期)	
6	吉田耕平	(六期)	
7	松井 宏	(七期)	
8	清水聰一	(四期)	

各期対抗戦実施の1週間後平成十四年九月十四日(土) 今回は防大創立50周年の記念大会として「防大同窓会本因坊」決定の個人戦が実施された。

日本棋院に各代表22名の腕自慢の参加を得てスイス方式により実施。さすがトップクラスの対戦で高級な打碁。僅差の碁が多く熱戦につぐ熱戦で会場は熱気に包まれました。結果はここでも長幼の序列が發揮され一期

高比康之さんと八期甲斐聖彦さんとの全勝同志の最終戦は高比さんが制し4戦全勝となりここに「高比康之初代防大同窓会本因坊」が誕生いたしました。

その他星のつぶしあいの中、3勝1敗が7名実力の僅差が伺われた。

終了後、全国から更なる腕自慢の参加者を得て次回本因坊戦の実施を約し散会した。

スイス方式による得点の結果ベスト8は以下通り

記事「西大(10A)」

同窓会名簿、平成十五年十月に発行予定

「平成十五年一月から申込み受付け、頒布は十一月・早めに申込みを!」

防大同窓会名簿は、平成四年に第1版、第2版が平成十年に出され、第3版が、平成十五年十月に発行する計画で準備を進めています。

新名簿は、第2版とほぼ同じ構成で、本科四十七期まで理工学研究科四十期、安全保障研究科五期までの会員名簿を掲載する予定です。同窓会事務局では、名簿発行に備えて、データの大規模な更新を実施中であり、各期生会を通じて会員の方々にも確認、

データの大規模な更新を実施中であり、各期生会を通じて会員の方々にも確認、

原台だより」に添付するハガキ以外は、確認をとりません。十五年一月～七月末までに申込みのあつた部数だけを作成頒布しますので、できるだけ早めに申込んで下さい。

今回発行する同窓会名簿の概要及び申込要領等は、次のとおりです。

○掲載会員数

本科一期～四十七期までの約二万五十七超及び理工学研究科一期～四十期までの約2千数百名十一期～五期までの安全保障研究科計2万2千数百名(本科と研究科の重複を除く)及び名誉会員

○掲載項目 氏名、期別、要員、出身高校、校友会活動、現住所、電話番号、勤務先名等

○発売日 平成十五年十月(お手元に届くのは十一月末頃)

○価格 一部三千円を予定(梱包代、送料込み)

○申込要領 期別、氏名、現住所(名簿送付先)をはがき(小原台に折り込みのはがきの使用が望ましい)に明記して同窓会本部事務局に郵送。なお、事後、届け先現住所の変更があった場合は、すみやかに届けるものとする。

○送付及び代金受け取り
現住所(名簿送付先)宛に名簿を個別送付(梱包代及び送料込み)
代金は、宅急便による名簿送付時、代引き徴収予定。

訂正のお願いを予定しておりますが、より信頼性の高い同窓会名簿の発行のため、ご協力ををお願い致します。

なお申し込み頒布は、会員個々に「小

原台だより」を希望されない場合は、その項目を空白にして頂いて結構です。但し、氏名、期別、要員、現住所(連絡先)、電話番号等は、必ず確認、明記して下さるようお願い致します。

(同窓会本部事務局人事担当・櫻井、佐々木記)

退職された方及び転勤された方で住所が変わった方は同窓会事務局まで御連絡下さい。

〒160-0003

東京都新宿区本塙町二十一-三-二
TEL・FAX 03-3351-8910



同窓生 アラカルト

防衛大学校学生歌 作詩者の解題

一期 田崎 英之

この学生歌の作曲依頼を受けて、初め歌詞に出会った須磨洋湖さんはその印象を「スケールの大きい学生歌」と感じ、作曲への意欲が湧いたと、語られました。

この歌詩の「スケールの大きさ」は、第一節冒頭の一节、「海青し太平の洋」「緑濃し小原の丘辺」の対句であり、さるに、第二節冒頭の「聳え立つ若人の城」「みはるかす人の巷」であります。これら冒頭のフレーズは、歌に雄大感をもたらし、特に第一節の「海青し太平」の出足の五・七調の十二文字が作詩上の初動を決める作用をもたらし、後に続く歌詞のスマースな展開を可能にしたものと考えています。また冒頭の四行リズム感を生み出しました。

第一節について

前述の通り「海青し、太平洋」「緑濃し小原の丘辺」の五・七調の反復で歌の始まりをスムースに収めたが、この際「海青し、太平洋」を「太平の「洋（な

だ）」****と読み、五・七調で発した「言葉のあや」が、創案できることにより、歌詞のスマースな展開が可能になりました。「洋」を「灘（なだ）」と大胆に読み替えて一気に第一節を描き進ました。

これを受け「緑濃し小原の丘辺」の対句が当然のように並びました。当時の小原台は灌木も乏しく、かつ、黒い関東ロームの地肌がむき出し、風が砂塵を巻き上げていました。作者は、「何れの日か「濃き緑の丘」に変貌しよう」と期待を込めて謳いましたが、それは当時の全學生の思いでもありました。

続く、「学舎は光輝き」、「眞実の道の故郷」の二行は「起承転結」での承。青き大海原と広大な緑の丘を謳う冒頭の力強い五・七調の反復から少しシフトした「五・七」と「四・七」の二行が、後に続く後半の主題を一段と引き立てる役割を果たしています。なお、「光り輝き」が「かがよい」と審議委員会により修正されました。

「丈夫は呼び交い集い」から「朝に忠誠」を誓い、夕に「祖国」を思う」のフレーズだけが三行で「転結の転」で、しかも語調も前の四行の詞とは大きく変化、五七調と四・七調の二回反復で構成しました。

この三行において詩の内容は、憂国の思へと飛翔します。

それは、防大生の国民への忠誠、並びに父祖から受け未来へ贈る我々の共同体・日本国を防衛する努めへの思いを謳い、本節の真髄であります。

「結びの対句」の「礎ここに築かん」「新

たなる日のため」は、我々が「国家」の縁の下で黙々、託された任務・民主國家の防衛に生命を賭けるプロとしての決意の雄叫びである。

第二節について

この歌詞は第一節がスマースに創案でき、余勢を駆って一気に作ろうとしましたが、前半の導入部で躊躇して、作詩はしばらく頓挫状態になりました。苦吟を重ねる間に、第一節との対比の形で「丈夫は」以下の後半のイメージが次第に固まりました。だが、前半部は納得できる歌詞が浮かばないまま、夏休みが終わりに近づき作詩上、「一番の胸突八」でした。

歌詞は、一応の形にまとめたが、どうしても何か物足りない感じで、第二節の前半部に不満なまま帰校の途につきました。そして列車を乗り継ぎ、第二の故郷・小原台を見える湘南の地に辿る途上、「聳え立つ若人の城」が、難航する作詩の暗雲を切り裂くように「閃き」ました。車内での一瞬の閃きをメモにとどめ帰校と同時に、「聳え立つ若人の城」から「みはるかす人の巷は」の対句が出来上がり、これらのフレーズが成立した後は、「風荒み、雲乱れ飛び」「行く手に波さかまくも」と一気に進みました。

此处で、後半の「丈夫は**」以下の歌詩——先に作り終えていたフレーズ——すんなりとつながり、学生歌は完成しました。第三のフレーズ三行は社会や世相の混迷に惑わず、「理想も高く」「朝に勇知」を磨き、夕に「平和」を祈る

ところの学生歌の真髄をなし、前節の忠誠・祖国を思うと並ぶ、学生たちの心意気の表出で第二節の核心部分であります。

「礎ここに築かん」「新

試行錯誤を重ねての苦心の作詩でしたが、この歌詞を完成したとき「新しい時代感覚に対応する防衛大学校の学生歌」にふさわしい新鮮なイメージが表現され、かなり良い作品だと、作者自身、胸中密かに満足しました。

多数の応募者から選考者の全員一致で選ばれ、それは二十歳の夏の忘れぬ思

す。
なお「知・仁・勇」三つの武徳から筆者が知勇を選び、最終的に審査委員会により「勇知」から「勇智」へと修正され、また「雲乱れ飛び」が「乱れ雲飛び」になりました。

最後に、歌詞にふさわしい良い曲を残して、先年他界されました元中央音楽隊長の須磨洋朔先生に感謝し、その御遺徳を偲び、ご冥福をお祈り致します。

ジャカルタ生活

三期（海） 浮田 尚家

同窓会事務局から「同窓生アラカルト」への投稿依頼の電話を受け、事前に聞いたことでもあり、承諾したもの、振り返ってみれば、「小原台だよりVol.7」に投稿したこと思い出、同じ人間が再度投稿するのは具合が悪いので、敢えてノルマを果たすことにした。前回はリゾート地でもあり「バリ島の過ごし方」と題して紹介したが、バリ国際空港の近代化を終え、次いで「パレンバン国際空港近代化プロジェクト」に携わることになり、ご承知の通り、パレンバンはスマトラ島南部の都市で、石油の積出港として活況を呈しているが、その空港の近代化を日本の援助で実施することになり、二〇〇〇年五月から、年末まで、ジャカルタで「基本設計」「詳細設計」と、本年に入つてから業者からの質疑応答、更に、提案書評価と一連の作業を終え、来年から始まる工事の施工管理から、後継者にバトンタッチすることで、一応終了できたと自負している。今回のジャカルタ滞在は、延べ一年とな

つたが、首都でもあり、観光資源にも乏しい場所なので、バリ島のように紹介するのもも無く、業務内容を主として紹介し、後の部分でインドネシア人の生活ぶりを紹介することにしよう。

皆さんが海外にしろ、国内にしろ、航空機に搭乗する時は、ターミナルからチケットインし、搭乗ゲートを経由して機上の人となるわけだが、小生が担当している「Air Safety System」は、ご存知の方もあろうが、ゲートを境にランドサイド、エアサイドに区分され、ランドサイドは国内、エアサイドは国外となり、「Air Safety System」とは、殆どがエアサイドに含まれる。内容としては、航法援助装置、航空無線通信、航空管制、空港照明・灯火、気象観測装置などである。

もともとの専門は、前二者であったが、空港コンサルタントも人員に余裕が無く、残りの部分も、門前の小僧ならぬ担当せざるを得ない状況である。

航空機がタクシーウエイを通過して滑走路から離陸する間に、興味のある人なら、レーダーアンテナ、気象観測装置、照明付き吹流し、着陸援助照明灯、誘導路側灯、滑走路側灯、等に気づかれるかもしれないが、殆どの人は気づかずに通り越してしまうのが普通だろう。

航法援助装置は、計器着陸誘導装置（ILS）のAntは、滑走路延長上にあるので、まず、乗客の目には入らない。空港の位置を示すVOR/DMEもターミナルタイプは空港敷地内に設置されるが、主として空港周辺に設置されるのが通例である。少し古くなると、NDBという無指向性のビーコン送信機も、時に

現用されている。

航空無線通信は、遠距離用のHF、近距離・地上用のVHF、と大別されるが、空港としての通信、航空機との通信と多岐にわたるので、詳細は略すが、空港周辺に送信所、受信所、コントロールタワーと分散している。将来的には、衛星を利用し、個別に通信系を設定し、管制のより向上を図り、ひいては、航空管制、航空交通の安全を実現する方向で、開発が進められている。最新の技術を応用していることは勿論であるが、その中でも、モールス信号による通信は、最も確実な通信系として、同時に備えているのも航空安全を考慮したものである。

航空管制は、航空機が飛行を始めて以来、かなりの年月を経てるので歴史も長く、段階も6から7段階に移ろうとしている。発展途上国の航空管制は、レーダーを利用して第四世代くらいが通例である。しかし、過去の経験から、空港に入れる航空管制機能が、担当者レベルに、本当に必要としているかどうかは、別問題であることが多い。備えていれば見栄えがする、といったところか。

空港照明・灯火については、ICAOの規定もあり、空港としての保安条項でもあり、一通り備えることにしておる。夜間の着陸に備えて、空港の場所を示すことから、滑走路を示したり、安全に着陸を行うための着陸援助灯、誘導路灯、など多種の灯火が設置される。

気象観測装置については、何處の国で、職務として勉強しておこうなどと思ふものはごく少なく、その時になつて、言われるから仕方なく始めようとするが、もともとやる気が無いので、実効が

端末で、風向風速を測定するほか、飛行運行にかかる気象観測を、自動測定を多く取り入れたものが、主流を占める。

以上、「Air Safety System」の概略を紹介したが、これらの機材は当然ながら、オペレータによって運用されているが、

オペレータの資質により、良くも悪くもあるもので、これから空港運用は、過密化、高度化に伴つて、ますます重要な問題となる。ODAの案件として、これら空港整備が行われているが、内容の伴つたものとするよう、今後とも考慮してゆくことが必要であろう。

次に、インドネシア人というものについて、短期間の滞在であつたが、一緒に働き、また眺めた限り、及び、その間に感じたことを一部紹介しよう。

九割近くのイスラム教信者で構成されているインドネシアは、アラブ地方のそれと違つて、一言で言えば「何でもあり」の生き方であるように感じる。勿論、周囲に配慮するのではなく、自分だけ、都合の良いことをやつてはいる。従つて、「Air Safety System」でも、二年間の予備品を納入しているが、やもすれば、予備品を勝手に持ち出して売りさばき、自分の収入にしてしまうこともあるそうだ。通常、予備品は装置のそばに置いておき、必要なときに間に合わせるものであるが、中央本府で管理しておかなければ、すぐに紛失してしまうらしい。

機械の整備についても同様のことが言え、

うものはごく少なく、その時になつて、が、もともとやる気が無いので、実効が

上がらない。

よく言われることに、新しい機材を入れたら、五年間は安心していられる。検整備をしなくとも、そのくらいの期間は無事に運用できると言うことから来ているのだろう。

日常生活を見ても、彼らの生き方を見ても、根本から改められない限り、先进单位への仲間入りは、先ず困難であり、現実に彼らもそれを望んでいないのかかもしれない。

最後になつたけれども、一〇〇〇年、最初にジャカルタに着いたときには、あまりにも文化の違いというか、生活ぶり、彼らの習慣を見て、笑つたり、驚いたり、珍しいものだらけであつたものが、回を重ねるごとに、驚くことも無く、笑うことも無くなり、あちらの生活に慣れてしまつたことに、自分でも大変驚いたことを思い出す。慣れてしまつたことが、油断もでてきて、危ないものだと言われる。幸い危ない目にもあわず、無事に往復できたことに満足している。「海外危険情報」と言う番組を、外務省が流しているが、決まり文句で「自分の身は、自分で守る」と言うのがあるが、将にその通り、大使館も、同胞も、誰も守つてはくれないことを紹介して、終わる。

世界学生ヨット選手権に参加して



監督 長嶺 公成
(4N)

監督及びコーチのコメント

十一月でもコートダジュールは暖かく、閉会式のパーティは野外でした。私は昨日までのレースが行われた海を見ながらこの一年間を振り返っていました。

一〇〇一年十一月 チーム編成(五名)、J24による練習開始

高橋氏、相澤氏、島山氏にコーチを依頼

一〇〇一年三月 国内予選(ANIORU's CUP) 優勝(Y23、1/8)

一〇〇一年四月 伊海軍士官学校招待レース参加(J24、7/21)

女子部員一名入部
SIWoC一〇〇二参加決定、チーム編成(八名)

ビオン(30ft)による練習開始
一〇〇一年九~十月 「青葉」(35ft福田氏所有)による練習
「ソーラー」(35ft)による練習

チーム編成

この選手権の参加条件は

- ① 国内予選での優勝
- ② 二名の女子を含む八名のクルー
- ③ 遠征資金の準備
- ④ 学校の許可



関根英子さんと

一〇〇一年五月 エントリーの手続

き、旅行の手配、ツ

ロン市、レース海面に

関する情報の収集、同

窓会、OB会等への支

援金の要請

ることを条件に同行を引き受けた次第です。

直ちにチームを編成し、各クルーの配置を決め、チームワークの確立を目標に練習を開始しました。特に、一学年の女子クルー二名については補欠がないこともあります。期待をしていました。中田、山下ともこの期待に応えてくれてチームにとけ込み、逞しいクルーに育ちつつあります。これからが楽しみです。

七月に入り、六年前にこの選手権に主将として参加した横山君に、監督補佐兼コーチとして同行をお願いしたところ、快諾が得られましたので、これで前回の経験を活かせることができると喜びました。期待どおり、彼は私の良き相談相手となり、クルーの兄貴役となりました。また、業務多忙にもかかわらず、このようなことに価値を認め、二つ返事で横山君の休暇を許可された上司の東郷一佐にたいへん感謝しています。

補欠

これで、メンバーは決まりましたが、八人のクルーと二人の監督・コーチで、補欠が一人もいないことに不安を憶え、主催者に補欠一人の追加の可否を問い合わせると、各国十人しか選手村に入れないという返事でした。もし、一人がダウンした場合には、七人でのレース参加がOKだということも確認し、学生十人のみで参加することも含め再検討した結果、学生から、やはりOB二名とクルー八名の編成で参加したい、と申し出があり、補欠なしで遠征することをクルー全員で再確認しました。もう誰も、病気も、

けがも許されない状況になつた為、かえつて安全第一の意識が高まつたと感じました。

「人との出会い」

夏の合宿が終わり、出発まで二ヶ月となり、この選手権で使用される35フィートの艇で練習をさせたいと考え、私の学生時代からのヨットの先生だった故関根久氏のもとで知り合い、最近はヨット仲間でもある福田義一氏（成蹊大OB）にその旨お願いしたところ、快く引き受けいただき、「青葉」（35フィート）による練習が可能になりました。同時に、高橋良寿氏（東海大OB）にもお願ひし、彼の管理下にある「ソーラー」（35フィート）による練習も始め、九月、十月は毎週末に35フィートの艇で練習ができました。これで乗りこなすところまではい



シャンタルさんを囲んで

かなくても、35フィートの体験ができ、不安なくレースに臨むことになります。

また、故関根先生のご令嬢英子さんがパリ在住なので、この遠征の件を連絡すると、次のようなFAXを受け取りました。

「……防大のヨット部と聞けば、父の思い出と重なつて何ともいえませんね。十月末、仏にいらっしゃるとの由・・何か細かい点で調べたりする事があれば申し出てください。・・・」

十月に入り、主催者に選手村の場所を問い合わせても、住所はメールされました。が地図は入手できませんでしたので、英子さんにお願いしたところすぐに地図を頂き、一安心でした。また、ツーロン在住の彼女の友人・シャンタルさんに空港から選手村まで道案内していただきました。

このように四十年前に出会つた関根先生のおかげで、35フィートの艇で練習ができ、苦労なく無事選手村にチェックインできました。学生達も、人との出会いの大切さがわかつたようでした。

SYWOCの運営

SYWOCの運営は、計画の変更も多く、艇の準備等も不十分でありましたが、運営スタッフが全員学生（二十三名）のみであることを考慮すれば納得できました。スタッフの学生は毎年全員交代し、この選手権を運営するとのことでした。

しかし、レース委員長とジュリーは資格のある社会人に依頼し、チャータードした漁船を本部船として、レースは運営されました。観覧艇の準備はなく、監督等が

これらの状況から、結果が十二位であつたのは極めてラッキーだったといえます。実力以上のところを狙えば実力以上の結果になることが、クルーはわかつたでしょう。また、最終レースに四位をとり、クルーが速いことは楽しいと感じたことは、大きな収穫でした。

他国の選手のほとんどが幼少からヨットを始め、親もセイラーであることを考えれば、防大チームが事故なく十二位を確保できたのは、原スキッパーを中心精進し、レースでベストを尽くした結果であり、学校名を越えて艇を提供し、また指導に当たつていただいたヨット仲間の福田氏（成蹊大OB）、下平氏（成蹊大OB）、永田氏（成蹊大OB）、高橋氏（東海大OB）、関根氏（慶應大OB）、相澤氏（明治学院大OB）のおかげと感謝しています。

選手村は「IGESA」（陸軍の家族の保養施設）を利用してました。人里離れた選手村には公衆電話もなく、成田空港でリースした携帯電話と、選手村と艇の間のクルー送迎用に借りたレンタカーは生活必需品に近いものとなりました。レースを見るには自分で船を準備するほかない状況でした。

また、ご支援いただいた方々、壮行会に出席していただいた方々、ありがとうございます。

最後になりましたが、このような素晴らしい機会を後輩達に与えていただきましたことを西原校長に深く御礼を申し上げます。

「レース結果」

一日目の五レースが終わった時点で、勝てる相手が見えてきましたので、二日目以降のレースにおいては勝てるチームに敗れることのないように、即ち十二位を死守するよう、原スキッパー・古庄タクティシャンにアドバイスしました。しかし、六レースから最終レースまでの七つのレース中十二位以上だったのは三レースのみがありました。



Ecole Polytechnique スタッフ



原
巨樹

（四年（海上）

スキッパー兼ヘルムマン）

我々はヨットを地中海を、フランスを楽しみ尽くして帰ってきた。手強いライバル達と毎日戦い、とても素晴らしい友人ができ、十二／十四位という結果に悔しい気持ちを強く押さえつけながらもや

はり樂しかった。なぜだろうと考える。その答えは私なりの四年間の結論とも言えるが「ヨットという共通言語」が我々の拙い英語では伝えきれない事まで包み込んで会話してくれたからではないだろうか。「ヨットは語る」と私の尊敬する二人のコーチは教えてくれた。まさにヨットは「語り」。最高の親友になれたノルウェーのオリンピック候補選手達とはナイトレースで夜中一時に宿舎に帰つてから更に三時半までヨットについて語り合つた。Good EnglishがGood Communicationなのではない。こうして楽しい話ができたのもヨットのお陰だし、ましてヨットを知らなければあんなに素晴らしい友人達と知りあう機会もなく人生を過ごしていったのだろう。だからこそ言いたい。ありがとうございますヨット、ありがとうございます一緒に戦つたライバル達、そして地中海。

本遠征に際し様々な方からご支援ご指導を賜つた。また監督である長嶺氏、横山氏にはご多忙の中このフランス遠征にご同行頂き、常に我々の背中を暖かくそして強く押してくださいました。心強いご声援を頂いた全ての皆様に深く感謝の意を申し上げたい。最後にクルーの皆へ。四年間の最後に全日本の代表として共に戦い、フランスを楽しんだ事を誇りに思う。これからもヨットを楽しみ、世界へ羽ばたけ。

[SAFEST, LIVE SLOW!]

世界選手権。日本一となつたチームが世界に殴りこみをかける。まさに夢のような話だ。この夢に憧れて入部したのがもう三年前になる。そして自ら初めての予選で敗北を味わい、苦渋を舐めることがになったが、翌年は見事に雪辱をはらすこととなつた。練習・研究・師事・・・そして三年間の経験が我々に勝利をもたらしたといえよう。日本代表として防衛大学校が決定したのである。

その後半年間はあらゆる時間がヨットにつき込まれた。特に、一年年の女子クルーア名はよく厳しい練習に耐え、立派なクルーとして成長したと思う。こうして準備を整え、我々はフランスへ旅だつた。

地中海の風と初めての艇に翻弄されつつ、緊張の中、日本チームの出だしは不調だった。ようやく終盤になって動きのキレが良くなり、本来の走りが出来始めた頃にはレースが終了した。

確かに世界レベルは高い。幼少期よりヨットに乗つていた者が大半を占める国々に比して我々の経験は全く劣つていた。しかし、技術の面では遜色なかつたと思える。小柄な体格ながら、日本勢はよく動き、よく走つた。あとはコース取りさえ誤らなければ上位進出は間違いないだろうと思う。

海外に進出し、世界を相手に戦う。それを通じた国際交流。速く走る事への執

世界選手権。日本一となつたチームが世界に殴りこみをかける。まさに夢のようやく、我が防衛大学校ヨット部は世界のスタートラインにたどり着いたのだ。後輩達が我々四十七期を超えて、さらなる成長をすることを期待している。



大澤 誠治

(四年 海上)

パウマン

今、ラグビーに学ぶ

六期生（海上・電気工学）若林 保男

椿円形のボールに接した期間を振り返ってみると、私のラグビー歴は結構長い。プレイヤーとしては、高校生三年間、防衛大生四年間、海上自衛隊幹部候補生及び初任幹部自衛官二年間である。また、指導者として、海上自衛隊第一術科学校生徒ラグビー部顧問三年間に及び、総計十二年になる。今、還暦を過ぎて懐かしい昔を振り返るとラグビーの実践を通して、先生、先輩、同僚から学んだラグビースピリットの骨格が見えてくる。現役当時は、先ず、怪我をしないように、恐怖心が薄らぐように、強靭な身体を造ることに精一杯であった。上級生になると後輩を迎えて、自信をもつて技を伝授する程のものは中々身に着け得なかつた。むしろ後輩から多くを学び、彼等からエネルギーを吸収した。「教えるは、学ぶが半分」とも言われるが、これは事実であった。

昭和三十三年（一九五八年）春、母校から六名が防衛大の門をくぐつた。入校手続きの朝は、一つの風物詩があつた。新入生が着校する頃、正門から本館へ真っ直ぐに延びた広い道の両脇に沿つて、先輩達が列をなして出迎えた。大きく屈強な新入生を見掛けると、幟を立てたラグビー部員や柔道部員は、先を競つてそ

私が卒業した都立高校では、ラグビーが男子体育の必須科目であつて、男子の体育は、夏季に水泳、冬季に武道が申し

着とそれに伴う苦しさに耐える心。いま、ようやく、我が防衛大学校ヨット部は世界のスタートラインにたどり着いたのだ。後輩達が我々四十七期を超えて、さらなる成長をすることを期待している。

詫け程度に一、二回実施される他は、三年間を通じてラグビー一色であった。これは、教育大（現筑波大）ラグビー部出身の西山常夫先生の影響によるものであつた。先生のラグビー指導は半端ではなかつた。雪の日は一層張り切つてグラウンド一杯生徒達を追いかけ、春先など、小春日和には三十分程早くラグビーを切り上げ、グラウンドの片隅にある通称“ナマコ山”で女生徒と合流させた。盛り土の山は、早い者がちに三十名も座れば満席になつた。いつものパター

ンであるが、童心に返つた先生は、アドリブ宜しく、楽しげに、#おおきなくりのきのしたで、あなたとわたし、たのしくあそびましよう、おおきなくりのきのしたで#と唄い、同じしぐさで、生徒にあとを追わせて輪唱するのであつた。適当に一小節を変えれば何時までも換え歌は続いた。結構、生徒には受けていたが、私は、何だか恥ずかしさが先にたつていた。

冬には冬の厳しさを、春には春の優しさを硬軟合わせて教えたのでしよう。

先生は、「優しさを力に」換えた。

昭和三十三年（一九五八年）春、母校から六名が防衛大の門をくぐつた。入校手続きの朝は、一つの風物詩があつた。新入生が着校する頃、正門から本館へ真っ直ぐに延びた広い道の両脇に沿つて、先輩達が列をなして出迎えた。大きく屈強な新入生を見掛けると、幟を立てたラグビー部員や柔道部員は、先を競つてそ

見とれるうちに人垣をくぐりぬけて本館に辿り着いた。声を掛けて来る部員はいなかつた。

人生は皮肉なものだ。この事があつて、私は、向こう見ずなチャレンジ精神でキツイと言われるフロントローを自ら志願するハメになつた。

一週間続けられるか、いつ退部させられるか不安があつた。

く卒業まで頑張る気持ちになつた。
三学年になつてから、兼重さん（四期）
の後金として立プロップに居ました。

の後釜として、たゞ一回は採用されたが、當時、兼重さんは、通称“五馬力”、

私は「一馬力」と称されていた。私の体躯で「五馬力」の穴埋めをする事は大変であった。事実、渡辺長治監督にとつても大きな課題であつたとみて、紅白試合で、私は一日二試合出場することがザラにあつた。これに耐えた御褒美であろうか、いつの間にか「三馬力」に昇進していた。

フロントローは、若林（六期）、大場（五期）、岡本（七期）。四学年では、若林（六期）、堀（七期）、岡本（七期）であつた。シーズン後半には、セットスクラムをうまく組めなくなつて、高橋君と交代する場面が多くなつたが、とまれ脱落は免れ、防衛大ラグビー部を卒業できたので嬉しかつた。

その頃、私には目標と夢があった。
第一に、海兵隊（自衛隊で編成するとの噂があった）に配置されても耐えられる体力を付けること、
第二に、防衛大ラグビー部豪州遠征チーム（幻の計画があった）に参加

できる技量に到達すること、であった。防衛大卒業後も五年間、海兵隊へ転官の夢は消えなかつた。「目標と夢を力に、換えよう。

昭和三十七年（一九六二年）春 先輩
も後輩もない一年限りの海上自衛隊幹部候補生学校ラグビー部を同僚二十五名で結成した。ラグビー経験者は、防衛大学卒二名、一般大卒一名だけであった。
一か月足らずで、四月二十九日（昭和天皇誕生日）に実施された広島県七人制ラグビービー大会に急ごしらえの三チームを送り込んだ。ほこりびくびくは、細部

Follow me! を合言葉に突進し、無我夢中でタックルに飛び付くだけであつた。三チームともそろつて敗退したが、「ラガーは一日にして生る」気分で一人ひとりの顔色は昂揚していた。

帰路、我々は年度活動目標を立てた。夏までに呉地区最強淀川製鋼所を破壊する、秋には中国・四国地方国体代表山陽組合のパルプと互角に戦い、第一回陸・海・空幹部候補生学校対抗戦に優勝することであつた。このため、短い、貴重な夏休暇を一部返上し、合宿することを誓つた。驚いたことに、1名を残し全員が休暇を切り上げて参集した。合宿を計画実行した。

るなどは前代未聞であつた。対淀川製鋼所戦、対山陽パルプ戦は目的を達した三幹候対抗戦会場は、夢の秩父宮ラグビー場であつた。優勝した空幹候に負けたが、後半の中盤、スタンドオフの骨盤場傷（当時は交代が許されないので戦列に

留まつたが後刻骨折と診断）まで0—0の好勝負であった。

翌年卒業後、国内巡航、歐州方面遠洋航海準備のため、二十五名は四隻の護衛艦に分乗することになった。寄港地では広場を探し、諸行事の合間に各艦毎に其基礎的練習を続け、体力・士気の維持に努めた。国内巡航の途次、航海訓練のハンディを乗り越えて挑んだ対鹿児島大戦に勝つた。努力は報われた。華麗なプレーはできなくとも、「やつてやれない事はない」とヒフティーン全員に印象付けるには十分であつた。

は、北緯7度付近（台湾南端は北緯22度）の熱帯（停泊中の平均気温・32度C）であった。加えて、日本を離れて航海すること三週間。気持ちは突進しているが、前傾姿勢にならず突破力に繋がらない。タックルを受けると、途端に目から火花が飛んだ。あの時の火花は、ピカッピカッと光らなかつた。チラチラと目の中を黒い蚊が飛んでいた。終盤でやつと左隅にスクランムトライした。バックスも加わった。スタンドの観衆の喝采を受けながら皆で歓喜した。

この負け戦からは智恵を得た。東京湾を出港してから益々航海日数は重み、気候風土が激変（紅海南部海域の海上温度・40度C、艦内機械室温度・53度C）するアラビア半島を周航しなければならない状況に鑑み、ラグビー部員は、朝晩洋上航行中も上甲板を駆け足周回するところについて滝川司令官の許可を得たまた、試合が予定されていない寄港地でも土の上で練習することにした。名所見学に加わらず、岸壁での練習に自主的に残る者もいた。義務感ではなく、自分の安全を考えることであった。ラクダの背に揺られてピラミット眺め、工夫塔から華の都パリ眺めたい気持ちがあつたが、いずれ、将来自分で訪ねる、との信念に換えた。

ツーロンでは、気温23～26度C、善戦した。初秋の雰囲気であった。副主将等野君が鎖骨を骨折し異国のかいだんの丘で入院した。

アットホームで、二次大戦における同盟国との余韻を感じさせた。ヨーロッパの対日感情はまだそんな時代であった。

ボーッマスでは、気温13～17度C、善戦した。英海軍チームがタックルをかわして、鮮やかなドロップゴールを決めた。生まれた時からボールに慣れ親しんだ者にしか出来ない、否、めったにやつてはならない程の究極の技に見えた。これがラグビー発祥の地のラガーカと、英

国の空に放物線を描いてバーを越すボールを追つて、妙な感歎が沸いて消えた。

遠洋航海中の試合は、負け戦でも、ノーサイドの笛の音に充実感を重ねさせて聞くことができた。学生時代、負け戦のあの重い気分とは大いに異なっていた。キツイ試合でも、日の丸を背負つて精一杯友好親善に寄与したとの任務達成感があつた。現役の後輩達にこの昂揚感を体験させたいのだ。しかし、神は、耐え難きを耐えたチームにしかこの恵みを与えない。

昭和五十九年（一九八四年）から二年間、駐米防衛駐在官として勤務した。

初対面の外国要人に会つたとき、異文化・言語の障壁を乗り越えて、ラグビーの話題がその場の緊張感を解きほぐし、相互の個人的信頼関係を大いに深めてくれる場面があつた。氏素性の分からない者が、互いに国家間の話を生業にしているだけに、個人的な信頼関係を早く築くことは、この世界で重要な事であつた。これは平時の、卑近で間接的な例に過ぎないが、練習が厳しければ厳しいだけ、有事には、直接的、間接的に、思ひぬ時に、更に役立つであろう。また、

上級生から下級生まで寝食を共にした在学四年間で、延べ七学年にわたる陸・海・空幹部候補生が、渾然一体となつた運動を通じて、培つた絆は、必ずや自衛隊の任務遂行に寄与するでありますよう。この絆も自己の財産であり、日本国の財産になる、と自覚すれば、それは自分を支える応援歌にもなる。

「覺りは力に」換わる。

さて、防衛大ラグビー部が創部五十周年を迎えた。21世紀を迎える防衛大学校が、引き続きラグビーをクラブ活動のひとつに置くならば、現在、恐らく将来とも変わらない大前提があることを、今、再確認することは大変意義深いことである。

第一に、殆ど素人から構成される集団であること、

第二に、規律が要求される軍学校であること、

これは、避けて通れない防衛大ラグビー部の根源的特質である。一般にこの特質は、防衛大ラグビーの精強さを追求する上でマイナス要因として説明され、同情を得やすいが、果たしてそうだろうか。

オリンピックメダリスト有森裕子さんは、あらゆる困難に直面した時には、「折角」と言う言葉を冠して物事を再考し、新しいエネルギーと解決策を得ていると語っていた。この金言は、五十年を迎えた防衛大ラガードにとっても傾聴に値すると思う。「折角、素人集団だから……」とか、「折角、軍学校だから……」と換言してみると確かにプラスに活用できる要素がある。これを素直に評価し、日常生活に、練習に、試合にリットで練習に励み、ガード・ポジショ

活かすならば、防衛大ならではの伝統が定着し、防衛大ラグビーは、更に強く、逞しく発展するのではないだろうか。

そうして、前線で戦える指揮官を自衛隊に送り届けるために、防衛大ラグビーは、心身共に絶対タフ（粗野ではない）でなければならぬ——国民の負託に応えるためにも、将来とも『One for all, all for one』の精神で、高次元のタフでなければならないのである。

私は、防衛大ラグビー部の限りない発展を願い、永遠の課題「ラグビースピリッツ」を意識させてくれる母校防衛大ラグビー部にいつも感謝している。

(完)

京大アメフト部の歴史は古く、戦後まもなく米国人により創部されています。しかし、皆様ご存知のとおり、全国でも有数の難関大学であり、凄まじい入試勉強に耐えてきたほとんどの学生はアメフトの激しい肉弾戦に耐えるわけもなく、アメフトに入部する者すら稀で、部員数も全員出場しても人数不足の時代もあったそうです。

そんな時に、彼のアメフト経験を知った先輩が助つ人をもとめてきたのが、再び彼をアメフトに駆り出すきっかけとなつたのです。勿論、彼の現役選手時代は関学をはじめとする私立大学に歴が立たず惨めな試合の連続であつたと聞いています。

卒業後もコーチとして後輩達の練習を指導するうちに、複雑な作戦を駆使するアメフトは他のスポーツと異なり、京大でも練習のやり方次第では十分に勝てるチームにできると確信していたようですね。そのころのエピソードを一つ。

水野彌一監督は、昭和三十四年四月に防大七期生として入校、同期のクラスメートとして一年間、第三大隊で寝食を共にしました。

当時、防大のアメフト部は関東リーグで活躍できる数少ない運動部の一つであつたと思います。それだけに、新入生に対する勧誘も活発で活発で、四期生の水野日く、「先輩、アメフトなら、その気になれば京大でも日本一にできると思いますが、どうでしょう。」

先輩曰く、「おーい、水野、そんなに後輩をシゴいて、どうするんや？ そん

んで頭角を現していました。

ところが、一年生後期に実施された航空適性の身体検査で、脊椎損傷のため激しい過重のかかる戦闘機パイロットを選ばれ、レシプロ・パイロットの道を選択するよう指導を受け、防大入校時の戦闘機パイロットへの夢を断たれ、やむなく防大を退校進路を変更して出身地の京都大学に学ぶことになりました。

海上自衛隊が旧海軍から引き継いだ良い伝統の一つに、物事が決定するまでは、たとえ初級幹部であつても自分の所信を自由に述べることができたが、そのような気風が神戸市消防局にもあった。

このようにヘリコプター活用の場での人との関わり合いのほかに、受賞に向けて多大な力を注いでくれた消防関係者以外の人々がいた。

高速道路等の事故にヘリコプターを活用して負傷者を適切な病院へ搬送することは、先進諸国では何ら珍しいことではないかもしれないが、日本では、救急関係者等から強く呼ばれているものの、世界に遅れること著しい。

このような日本の現状を何とか改善しようと活動している人々や個人的に私を支持してくれている人々が、日本の救急現場でヘリコプターを活用することの困難さと、多くの制約の中、神戸市消防局が成果をあげ救急救命に貢献していることを世界に向けて訴えた。こうした人々の強い働きかけがなければ、神戸市消防局の活動は世界に知られなかつたのではないかと思うのである。

私の受賞を新聞報道で知り、真っ先に電話をくれたのが同期生で海上幕僚長を務めた藤田幸生氏であった。私が海上自衛隊を去つてから30年、私の動静を心にかけてくれていた彼が、私の受賞を祝い共に喜んでくれた。友情とはこういうものだ、と深く心にしみる言葉を添えて。

今回の受賞で、私は多くのことを学んだ。人は一生のうち、はつきり自覚しないものの、何度も人生の岐路に立つものである。踏み違うのはほんのわずかでも、

5年、10年過ぎるうちに大きく開き、歳月とともに、別世界にいるようになる。

一つの信念を持ち、夢を捨てず一つ一つ積み上げていくうちに、いつの間にか夢が夢でなくなることもある。ギリシャ神話の彫刻家ピグマリオンが象牙で彫った女性の像を人間の女性に変えることができたよう。

人は、他人の悲しみを共に悲しむことができても、他人の幸せを共に喜ぶことは難しいという。しかし、他人の成功に力を貸し、人の名があることに尻押しをする人々も、また、いたのであつた。私は、確かに、そのような素晴らしい人たちに恵まれていたのだつた。

幼い頃からパイロットになるのが夢でした。その後進もうと決定付けたのはやはり昭和三十九年の東京オリンピックにおけるブルーインパルスの華麗な演技だったかと思います。翌年四十年にその夢を実現すべく期待と希望に胸膨らませながら無事小原台の土を踏むことが出来ました。青春真っ只中の四年間を小原台で過ごすことが出来たのは、私にとって一番大きな財産だったと自负しています。しかし防大卒業後、江田島へ赴任したものの幹校入校式前日にそこを去つてしましました。

実はその前の年より民間航空で自社養成制度というものが始まつたのを防大卒業直前に知り、最初は余り氣にも掛けませんでしたが、江田島へ赴任して入校式迄の1週間の内に、どうしても常に現場で世界中を飛び回りたいという気持ちがいました。しかし辞めてはみたものの日本航空の試験を受けるのはそれからで、大空へと機首を上げて行く。みるみる内に眼下では今飛び立つばかりの地上の景色が小さくなり、一万メートル上空を目指して上昇を続ける。



となると私は猛反対することと思います。当時の私は防大出身という自負と自分は学生時代にパイロットの適性があつたという理由だけで、自分が試験に落ちるはずが無いという自信過剰そのものだったような気がします。その年の六月から九月にかけて日本航空のパイロット要員としての採用試験が始まり、幸い6次迄の試験をクリアすることができ、十月に海外委託の四期生として入社致しました。

仙台における基礎訓練の後、アメリカのサンディエゴにあるP.S.A.という航空会社に委託されてパイロットとしての初期訓練を受け、その後各種の訓練を経た後、入社から二年後にDC-8型機のセカンドオフィサー(パイロットのライセンスを持っている者が副操縦士になる前

に航空機関士として業務を行なう職種)として乗務を開始しました。主にモスクワ線を約二年乗務した後、DC-8、B-747型機の副操縦士を経て、昭和五十九年にB-747型機の機長となり約半年間国内線を乗務した後、太平洋線に移行しました。

この頃を思い出して今でも一番心に残っていることは、やはり私がキャブテンになつた次の年に起つた御東鷹山のB-747による航空史上例を見ない事故かと思います。その前にもDC-8で何回か事故がありましたが、大勢の乗員、乗客の方々が亡くなられたことに対する言ふまでもなく、あの事故を起こした飛行機は私がキャブテンになるための訓練中、或いはキャブテンになつて国内線乗務中、何度も乗務した飛行機であります。

当時私達の間にはジャンボジェット機に対する安全神話みたいなものがあつただけに、あの事故には相当なショックを受けたことが今でも脳裏に刻み込まれています。

約二年間B-747の機長として乗務した後、第4世代の航空機と言われるB-767が導入され、私もその飛行機へ移行しました。cockpitの中はほとんどがコンピューター化され、乗員も機長と副操縦士の二人だけになり、最初は相当なカルチャーショックを受けたものです。その後、B-747-400、B-777等、新型機が導入されました。私の場合、途中三年半のアメリカの訓練所勤務があつたものの十六年間B-767に乗務し続け、多分六十歳の定年を迎えた。

その訓練所ですが、日本航空ではアメリカに二つの訓練施設があり、一つはカリフォルニア州ナバにある基礎課程の訓練所、もう一つはワシントン州モーゼスレイクに実用機課程の訓練所があります。

一九九一年から約三年半、ナバの基礎課程の訓練所の教官として勤務する機会を得ることが出来ました。ここはサンフランシスコから車で約40分、カリフォルニアワインの産地として有名であり、どこを見渡しても葡萄畠という風光明媚なところで治安も非常によく、家族共々貴重な体験をすることが出来ました。ライセンス業務を離れて若い訓練生と共にカリファルニアの空を思う存分飛び回れたというのも今では楽しい思いでとして残っています。

これ迄のパイロットとしての三十三年間、恐い思いをした事も何度かあります。が、私にとっての貴重な体験というものは、五年ほど前に離陸直後にエンジンの調子がおかしくなり、二つのうち一つのエンジンを停止してすぐ飛行場へ引き返したことでしょうか。一つのエンジンでも充分普通のフライトは出来ますが、シミュレーター訓練ではいつもやつていることでも実機では初めての経験でしたし、管制官の方も緊急事態ということを少しでも早く着陸させようとかなり慌ただしいフライトとなつた覚えがあります。

常に現場で飛びづけるという当初の夢は実現出来ましたが、私も定年までと四年を切つてしましました。今でも同期の仲間と会うたびに自衛隊に残るべきだと自問自答することが度々あります。その昔幹校を辞める時に、多くの方々に迷惑をかけながらも飛行機一筋で生きて来れたことは本当に幸せな人生だったと自分自身を納得させ、残り三年半、思う存分大空と共に生きることが御世話をなつた防大への御恩返しと思っています。

先日、夫婦で江田島を訪れる機会がありました。三十三年前の思い出が走馬燈のように駆け巡り、思わず涙てしまいました。最後になりましたが、防大創立五十周年をお祝いすると共に、同窓生皆様のご健勝、ご活躍を心よりお祈り申し上げます。



○ テロ発生から出航まで
いが、昨年十一月に三隻を率いて情報収集の目的で日本を離れ、引き続き印度洋に展開し、被災民救援活動を終えた二隻を加えた五隻で最初に協力支援活動等に従事してきた指揮官として、当時の状況を述べることとする。

米国において同時多発テロが生起したとき、私はロシアとの捜索救難訓練を実施するため佐世保に入港したロシアの艦と諸行事を実施中であった。米軍基地の門は直ちに閉じられ、車の出入りはすべて禁止された。そのため基地内の桟橋に係留していたロシア艦との往来には支障が生じたが、米軍の警戒は最高度に強化されており米軍の緊張感を肌で感じた。そのような中で、我々はロシアとの訓練を無事終え、総理から発表された米国の同時多発テロへの対応に関する我が国の措置に応

するため、何時出航が命じられても対応できるように準備作業に取りかかった。準備は通常の出国手続きから、物資の搭載、必要と思われる装備品の新たな設置、人事、訓練等々であつたが、直前に遠洋練習航海で湾岸諸国を訪問した練習艦隊の情報が大いに役に立つた。

また出航までの期間はマスコミの取材攻勢を受け、我々は平静を装つてはいたが、大変迷惑を被つたものである。

◎ 協力支援活動等

我々に与えられた任務は米軍等の軍隊に対する物品及び役務の提供、便宜の供与その他の措置を実施する協力支援活動、遭難した戦闘参加者の捜索又は救助を行う捜索救助活動及び当該活動を実施する海域における警戒監視・情報収集であった。

米国海軍とは毎年共同訓練を実施していることもあり、支援そのものはスマーズに行うことができるという確信があつたが、現場海域での厳重な警戒は必要であるが具体的なテロの脅威は不明であるし、そして我々の部隊に対する後方支援に関しても若干の心配があつた。海上自衛隊は、遠洋練習航海で各国を訪問してきた経験はあるが常正在进行する。しかしながら、今回の支援活動で外国の港湾に入港する際は、その都度、当該国の便宜供与を受けなければならぬし、米軍のように入港したら直ぐ支援が得られるわけではない、補給品の調達、修理部品の輸送等

も事前には決定していなかつたからである。

私は任務を遂行するに当たつて、日頃の訓練の成果を存分に發揮し、何事にも柔軟に対応していくしかないと腹を決めた。

支援活動は戦闘活動とは一線を画し

た海域にガスステーションを設定し、警戒監視を継続しつつ燃料を米国等の給油艦等に配つた。入港しても警備は緩和することではなく、常に警戒態勢をとつていた。

我々の部隊への後方支援も支援活動を開始した当初は、多少の問題があつたが、現地に連絡要員が派遣され、燃料、糧食、岸壁の確保等の調整に当たるようになつてからは、順調に進行した。支援活動等を次の指揮官に申し送るとき私は次のように要約した。

○ 今回の支援活動は、内容そのものは我々の能力からすれば困難ではないが、極めて重要な任務である。

○ 対テロであり明確な敵はないが、決して油断はできない。

○ 短距離を速く走らなくともよいが、長距離を黙々と走る忍耐力が必要である。

○ 湾岸戦争の時に比較して、支援する金額ははるかに少ないが、以前とは比較にならないほど米国に感謝されている。

○ 一緒に戦闘を実施しているのではないが、寄港する各国、アラビア海周辺に展開する各国海軍が、好意的であり、仲間意識を持つて歓迎してくれる。

◎ 協力支援活動の成果

一つは国際社会への貢献である。米国等の軍隊に対し補給・輸送等とい

う形で協力支援活動を行うことにより、我が国が国際的なテロリズムの防止及び根絶のための国際社会の取組に積極的かつ主体的に寄与し、我が国を含む国際社会の平和及び安全の確保に資する上での我が国の姿勢を顯示す

ることができたことである。二つ目は従来から緊密な関係があり、毎年訓練を実施している米国ではあるが、今回

の緊密な連携と親密な連帯感に基づく支援活動を通じ、更に強固な日米関係の構築に寄与できたことである。三つ目は湾岸諸国寄港を通じ、同地域に対する我が国の関心の強さを具体的な形でアピール出来た点である。

今回の協力支援活動等の実施は、整備する自衛隊から、働く自衛隊への転換期にあって、今まで訓練主体であつた海上

自衛隊が、海外において実任務を遂行するという正に働く自衛隊になるか否かの試練であつたかもしれない。

この支援活動が順調に継続しているのは、もちろんオペレーション部門の部隊が日頃の訓練の成果を十分に發揮し整齊と任務を遂行しているからに他ならないが、海外において任務に従事する部隊に即応し、縁の下の力持ちとなつて昼夜を問わず後方支援に当たつている後方支援部門の活躍もあるからである。最後に、我々は今回の任務を遂行して、国際貢献ができたことまた米軍との強固な関係の構築に寄与したこと誇りとし、今後も国際社会の一員としてこの種事態に対応する際、整齊と行動できるよう精強な部隊を鍛成し、即応態勢を維持する所存である。



湯治温泉宿「ごぜん」の湯の坊主から

航空五十六会 特別会員

杉本 佳則（十五期海上）

じーほーさんしーいーしーふー、しーそんぶーさーもーこーさー、もーこーほーじやーほーろーみー
十方三世一切佛、諸尊菩薩摩訶薩
詞般若波羅蜜……三世（過去、現在、未來の時間的ひろがり）と八方に上下を加えたあらゆる方角（空間的ひろがり）の悟りを開いた、またはこれから聞く全て

の方の偉大な智慧に導かれる事を願うお經です。

：又願わくは汝等。昼夜恒常に我を擁護して、我が所願を満ぜんことを願わくはこの食を施す。施餓鬼のお經も聞こえます。

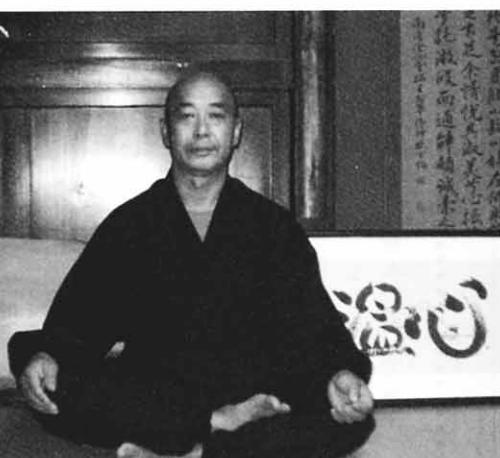
伊豆半島の真中

修善寺と伊東の間の山里

古い民家を休憩所にそのまま利用した小さな源泉掛け流しの温泉湯治宿（日帰り／宿泊）「ごぜんの湯」を三年前から営業をはじめました。

主人、風呂番、調理人、掃除夫をしています俗名 杉本佳則（十五期 海上航空工学）と申します。

もうひとつ名は曹洞宗妙高山最勝禪院の弟子で安名を佳道。同窓生アラカルトに何か書けと航空同期の奈良君からご指名ですが、かけるの



は冷や汗と恥ぐらい。どうせかくならと懺悔文を唱えつつ、パソコンにむかっています。

過去 それはすでに過ぎ去りしもの。あの頃 小原台に住み、日々煩惱の火が燃え盛る中にあって悩みの果てに民間行きを決心したこと。それでも捨てきれずに航空機関連の会社に勤めたこと。二十数年民間航空関係の仕事の後、防衛営業の担当となり航空自衛隊同期生との二十数年ぶりの再会。航空五十六会にゴルフ参加した日々。海上や陸上の同期との再会等。YS-11の整備や改修で先輩、同期、後輩にお世話になったこと。感謝の日々でした。

禅宗である曹洞宗の得度をさせていたいたこと。勤務している会社の21世紀ビジョンを精魂こめてつくつたこと。しかしそれを実行すると確約しておきながら、実行しない泥棒会社にいられなくなつたこと。そこでの逆縁の菩薩との出会い。こういうことをしてはいけないと自らその身を汚してまで教えてくれる逆縁の菩薩社長様。今、拉致で話題の北朝鮮も逆縁の菩薩さまか。

「この世の中が邪悪にも盗賊の支配するところである場合には、幸福などという問題は、話題にならないものである。そして盗賊のさまざまの支配がすべてのものの中に存在する場合には、さまざまの行為がそのような事情によって無意味なものになる。」中論 ナガールジュナ（西嶋和夫 訳）

こと。二十七年勤務した会社をリストラ同然退職したこと。

それらのもろもろの出来事はどれひとつとってもなくてはならなかつたこと。必ずそなつたこと。その時その時に存在する全ての物質とそのエネルギー状態は二つとして起り得ないこと。たつた一つの現実世界。それは過去の全ての結果が今あること。これに気付くのに五十年の月日がかかつたこと。

生命は光と水と土そのものであると得心させられたこと。

温泉という善い水の資源に恵まれたこと。退職金を使い、手作りで露天風呂をつくつたこと。妻との離婚届に判子をついてでも、湯治場が伊豆にもあつたらいいと考えてしまつたこと。

同窓生の皆様、おろかな私の過去を笑いお許しください。

がしゃくしょぞうしょあくごう、かいゆうむしとんじんち、じゅうしんくいしょしょよう、いつさいがこんかいさんげ口意之所生、一切我今回懺悔 現在 これしかありえない有り難い瞬間

九月二十一日 09:00 源泉の温度は62

度 泉質 含石膏ぼう硝泉 源泉掛け流し 循環なしの風呂番 本日早朝 川漁師の真似事をする。ありがたいことに今日は不漁。石鯛 天然鮎 うなぎ、やまめ、ずがにをねらい殺生を重ねる覚悟ができる。生き物を殺す意味がわかつてきしたこと。

伊豆の八十八カ所の徒步巡礼をしたこ

と。歩き歩き歩き疲れて、その道すがらやつといまの仕事を目指す決心ができた

完成したところ。

日々新しい出会いに感謝しています。

今年から看護婦であつた妻が退職し、応援している。離婚届はまだ提出してないようです。

未来 未だ来らざる、あれこれ思つても詮無いこと。

同窓の方やご家族に限らず、だれしもどうせなら地獄より極楽に行きたいと言います。「極楽でも地獄でもあの世はよほど良いところとみて帰つて来た人は一人もいねー」と私の親父。そんなわけのわからない世界のことを考へるよりも現実世界で極楽にいるのと同じ日々をすごせないか。これが私の問題です。生きている間に楽しい生き方をし、良い影響を回りに与えていきたいものです。これからあつちが痛い、こつちが調子悪いと今までの全ての過去が因となつて病に苦しむことになる人が増えてきます。私も老眼、中年になってやつたラグビーの古傷頸椎椎間板ヘルニアが持病です。

現役でご活躍の方は勿論、退官なされた方もお氣がむいたら、お出でください。湯治宿ですから自炊もできます。レンジヤーならずとも同窓の方なら無錢で生きていけるほど山野に食材はあります。特に退官直後の区切りなど、これまでよく酷使に耐え、頑張つてくれた幾千幾百萬の命の凝集された貴方の身体をいとおしみ、お湯につけてやつてください。来し方、行末に思いをはせながら、坊主と酒でも飲んでやつてください。これから酒の肴は、ずがに、いのしし鍋、しか刺身等です。

宿泊客予定 本日5組
本年足腰の不自由な方も利用しやす
い、車椅子対応のパリアフリーの新館が

外光潔」入浴の傷

ここへは、肩書きや浮世の塵芥など余分なものは脱ぎ捨てるために、お出でください。

余分は脱ぎ捨ていい湯だな。ここは冷川御前の湯 人もない犬もない、石もない花もない、太陽の子供達はみな大切です。お金は一番大切。少し持つてきてください。

以上

自作ホームページ

<http://village.infoweb.ne.jp/~kenko/>

ヤフー等の検索エンジンで 伊豆 源泉
湯治 又は直接 ごぜんの湯 で検索

「えひめ丸事故を通しての経験」

二等海佐 林 秀樹

時が経つのは早いもので、この原稿を書いている今、えひめ丸の事故が生じてもう一年以上が経過しました。最愛の家族を亡くされた方々の心に刻まれた事故の傷跡が癒えるには長い時間が必要であるかも知れませんが、ハワイ連絡幹部としての任期を終えるにあたって、この事故に関わった一年間のできごととその時々にとつた私の行動等を顧みたいと思います。

当時、私は海上自衛隊から米海軍太平洋艦隊司令部に派遣された連絡幹部であります。

官でありました。本来の任務は、アジア太平洋地域の安定に寄与するための日米海上防衛協力、日米共同演習等の調整業務にあたりましたが、平たくいえば、米海軍の中にあって唯一の海上自衛隊員として日米両国の懸け橋になるということです。

起きてはならない悲惨な事故が発生した直後、私の脳裏にひらめいたのは、「この事故を一九九五年の潜水艦『なだしお』事故の二の舞にしてはならない」ということでした。状況こそ異なれ、今回の事故は当時の海上自衛隊の事故にあまりに酷似していました。私は、あの痛ましい事故を通して海上自衛隊が得た貴重な教訓をここに生かすべきであると強く感じました。

事故当初は、被害者に対する同情論、米海軍に対する非難、中傷が渦巻いており、事故の責任は米海軍にあるとは言え、あまりにもマスコミの論調、世論は偏っていました。家族の悲痛な叫びがマスコミ等によって増長されるにつれ、日米両国間の溝は深くなる一方であり、とどまるところを知らないかに見えました。私は、米海軍司令部内の唯一の日本人として、事故直後の捜索救助活動について家族説明を行う際に専門用語の通訳等にあたることになりましたが、私が海上自衛官であることを知らない、また事故によつて気が動転している家族からは厳しい叱責を受けたこともありました。私自身、この事故には直接何ら関与していない海

上自衛官が如何なる立場で関与すべきであるのか？海上自衛隊までがいわれなき非難の対象となってしまうのではないのか？という疑問があつたことは否定できません。事実、太平洋艦隊司令官ファーゴ海軍大将は、家族、マスコミに対して米海軍が話すときには是非私を通訳にと望んでおられた反面、「事故そのものに無関係である海上自衛官を矢面に立たせていいものか。」と悩んでおられました。

しかし最終的にはこの問い合わせに対し、私は「日米両国の友好関係にとつての未曾有の危機となりつあるこの事態を救えるのは、50年間ともに太平洋の安定のために努力してきた海上自衛隊しかない。ここはあえて火中の栗を拾つても米海軍と海上自衛隊が一枚岩となつて日米関係を土壇場でくい止めることが求められている大事な時、日米関係の正念場である。あえて火中の栗を拾うべきだ。」と考えていたところ、東京の海上幕僚監部も同じ思いだったようで、防衛省から同様の指示を受けました。海上自衛隊の制服を着ていたも米海軍司令部の一員として立ち会つたため、怒りに満ちた家族らから「どつちの味方か」となじられることがありました。この信念を貫くことを誓いました。

司令部棟の一画にEMCC（えひめ丸コマンドセンター）が開設され、日本の宗教観や礼儀作法を私は教え続けました。謝罪特使のファーロン海軍作戦副部長もその一人でした。米海軍ナンバー2

の大将が、当時まだ「少佐」に過ぎなかつた私に、「日本人に対する正しい謝罪の態度を教えて欲しい」と頭を下げられました。私が（僭越ながら）ブリーフィングしている内容をファーロン大将は一言も聞き漏らすことなくメモをとつておられました。二月二十六日の朝、日本へ向かう直前の米海軍機から副部長の緊急電話が入りました。「えひめ丸という言葉と大西（船長）という言葉の私の発音を直してくれ」。このころ、マスコミでは「土下座しろ」とか「米国政府は日本人の心情が理解出来ていない」等と言つた論評が渦巻いていました。しかし、私はこのファーロン大将の真摯な姿勢に胸を打たれるとともに、ふと日本人として我が身をおきかえて考えた時、これが仮に海上自衛隊の潜水艦が東海沖で訓練中に付近を航行中の東南アジアの漁船に衝突、行方不明者を出してしまつていたと同じ思いだつたようで、防衛省から同様の指示を受けました。海上自衛隊の制服を着ていたも米海軍司令部の一員として立ち会つたため、怒りに満ちた家族らから「どつちの味方か」となじられることがありました。この信念を貫くことを誓いましたが、これほどどの海軍高官が多くの日本国民が見ていて前でここまで頭を下げて謝罪することがどれほど屈辱的で耐え難いことであるか、同じ海軍士官として痛いほど理解でき、流れ出る涙を禁じ得ることができませんでした。数日後、再びハ

「君のおかげで米国民を代表して心から謝罪を示すことができた。感謝する。」
と言われました。

海上自衛隊が派遣した、最新の潜水艦救難艦「ちはや」がパールハーバーに入港したのは八月二十日の午後でした。岸壁に多くのマスコミ関係者が並ぶ中、整齊と入港した「ちはや」の艦首に日の丸が、艦尾には自衛艦旗が高々と掲げられていきました。「ちはや」の姿を見るまでは、思い思いの取材をしていた日本のマスコミ陣も、その旗を見た瞬間、誰もが目頭を熱くし、声を詰まらせていました。私も、海上自衛隊に勤務して十七年、これほど美しい艦艇、日の丸、自衛艦旗を見たのは初めてでありました。この時の感激、安堵感は一生忘れ得ぬものであり、日本国に対する愛国心を再認識した瞬間でした。当初、引き揚げ作業は早ければ八月下旬にも完了するとの見通しでありましたが、実際の作業は困難を極め、一日と作業は長引き、「ちはや」の乗員一三九名の中にも、次第に焦燥感が高まつてきました。終わりの見えない派遣と、出番を待ち、準備と訓練に明け暮れる毎日。その中で、一人の乗員が病院で治療を受けるというアクシデントが生起しました。患者はただちに陸軍病院に入院せんでしたが、後日この乗員が退院後、「ちはや」艦長に直接「ハワイで再度手術を受けることになつてもいいから、ど

うかこのまま任務を全うするまで帰国させないで欲しい」と申し入れてきました。その乗員は目に涙を浮かべ、「海上自衛隊を代表し、御家族のために、また日米両国の友好関係の維持のために派遣されたのに、目的を果たさずに帰ることはできません。」と訴えたそうです。この乗員の気持ちは、当時の乗員総員を代表していたのだと思います。技術的な困難さから、作業が遅れ気味になつており、いつ「ちはや」の出番になるか不安を抱えながらも、皆任務を達成したいという気持ちだけで、何一つ不満も言わず準備作業、訓練に邁進していました。自らの任務を自覚して、任務を全うすることだけに集中した人間の美しさに同じ自衛官ながら感動を覚えました。

遺体の捜索活動が終わりに近づいた十月末、米海軍は民間船を借り上げ、鎮魂のために御家族を現場水域に案内しました。「えひめ丸」を吊り上げていた梓組みの黄色い姿がぼんやり海に浮かんでいたものの、「えひめ丸」の船体そのものは見えませんでした。その見えない船、御家族は必死で海中を探し、同船が西、つまり日本の方向を向いて海底に横たわっていることを説明すると、船上では泣き声がひとり高くなり、海中に花が次々と手向けられました。

やがて現場水域を離れる時間になり、船が動こうとしたとき御家族の一人の方が私を呼び、声を詰まらせながら、「台船の上で作業をしているダイバーたちにお礼の言葉を伝えたい。」と言われまし

た。責任者の米海軍中佐に無線でメッセージを伝えると、台船上のダイバーから「皆さんに感謝の意を表す時を迎えることは米海軍関係者にとって苦渋の決断であります。」と返事が来ました。その内容を私がマイクで御家族全員に伝えたときでした。誰からともなく、台船に向かって手を振りはじめました。それに応えて台船上のダイバーもいっせいに手を振つきました。現場海域にいたみんなが泣きました。御家族、私、そして米海軍中佐をはじめ米海軍関係者全員もサングラスの下で涙をこぼしました。

事故が起きたとき、家族の心は米海軍に対する怒りで一杯だったことでしょう。しかしながらそれから八ヶ月、最愛の夫や息子をなくした悲しみは消えないものの彼らの多くが米海軍に対して心を開いてきました。それは度重なる失敗や困難、問題に直面しても米海軍が固い決意で乗り越え、およそ誰もが不可能と考えていた引き揚げ作業をやり遂げたからであります。米海軍は家族との約束を守ることだけを考え必死で最善を尽くしました。船内に入ったダイバーたちは、危険な環境であるにもかかわらず、素手で作業をし、また遺体を見つけると海中で合掌の後そつと触れました。

その陰には、遺体に関する日本人の気持ちを理解しようとする米海軍関係者の切なる思いがありました。

船内捜索では、皆様御存知の通り八人までが発見されたものの一人の生徒さんはどうしても発見することが出来ませんでした。米海軍が三週間強にわたつて実

施した潜水作業を終結し、海上自衛隊のダイバーによる最終確認に後の望みを託す時を迎えるということは米海軍関係者にとっては行方不明者を自らの家族のように思つて作業に当たつてきました。そのことは、最後の一人となつた家族の方に捜索終了を告げた次のようないふ葉に表れていました。責任者の米海軍中佐に無線でメッセージを伝えると、台船上のダイバーから「皆さんに感謝の意を表す時を迎えることは米海軍関係者にとって苦渋の決断であります。」と返事が来ました。その内容を私がマイクで御家族全員に伝えたときでした。誰からともなく、台船に向かって手を振りはじめました。それに応えて台船上のダイバーもいっせいに手を振つきました。現場海域にいたみんなが泣きました。御家族、私、そして米海軍中佐をはじめ米海軍関係者全員もサングラスの下で涙をこぼしました。

今まで全力で捜索してきましたが、残念ながら子息の御遺体を発見することはできませんでした。これで捜索終結とするのは、米海軍としても非常に残念な結果であると同時に、苦渋の決断であります。ここにこれまで我々米海軍の作業を信じ、御理解をいただいたことに感謝いたします。ダイバー一人一人は、皆、行方不明者を自分の子供、弟のように思つて潜つて捜してきました。我々は絶対見つかるという希望と確信をもつていたので本当に残念な結果です。しかしながら我々の辛さに比べたら、御家族のお悲しみはいかほどかとお察しいたします。米海軍はこれから海上自衛隊に我々が最後まで失わなかつた希望を託します。「ちはや」艦長は同じ海軍士官として尊敬する人物です。これから米海軍は彼が指揮する潜水作業を支援する立場に回りますが、これまで潜水作業を実施してきましたが、これで潜水作業を支援します。我々は何としても御家族の元に返してあげたいのです。

この言葉の通訳に当たつた時、これ以上の辛さはないと思いましたがこの8日

後にもつと断腸の思いがする瞬間が待っていました。

当曰は御家族にとつても私にとつても心を静めることができない落ち着かない一日であつたと思います。どんな言葉で伝えようと、御家族の心の苦しみを和らげることなどできるわけがないことはよく判つていました。自分の気持ちが整理できないまま、一睡もできないうちに夜が明けて、ついにその日を迎えることになりました。「発見されました」という報告ができたらどれほどか救われるかと電話が鳴るたびに一喜一憂していました。

しかし、「ちはや」からの「最後のダイバーが水面に上がった」との連絡を受けて、ついに終わりの時が来ました。ホテルの会議室に向かう途中私の頭の中は真っ白になり、九か月前の事故発生当時の混乱、家族來ハワイ時に浴びせられた罵声、ファーロン大将に日本の作法を教えたこと、審問委員会、「ちはや」派遣に至る過程、長く不安な吊り上げ作業、「ちはや」のパールハーバー入港等が次々に脳裏に想い出されてきて考えがまとまらないままにホテルの部屋に入りました。

私が、真心の声を精一杯伝えようと思ひ、お話しした内容は次の通りです。
「これまであらゆる可能性について考えられるすべての搜索を実施しましたが、手がかりを得ることはできませんでした。本日午後、最後のダイバーが水面に上がつてきましたが、その瞬間をもつ

て「ちはや」艦長は苦渋の決断を下すに至りました。

最後に、先週、「ちはや」にお越しになつた際に「ちはや」乗員にいただいた白いバラの花束と昨日お預かりしたクッキーは、御子息の部屋のロッカーにいれ、御子息がいつでも花を見て御両親のことを想い出したり、クッキーを食べられるようロッカーのドアは開けておきました。

これだけの言葉を伝えるのに、最後は胸が締め付けられ、言葉になりませんでした。十六年間大切に育ててきた男の子を、その子が17歳になった二日後に失つてしまつた夫婦に、このよう残酷な言葉をかけなければならない辛さ、私にとっても御子息は手が届かない帰らぬ人となつてしまつたという気持ち、四ヶ月に及ぶ終わりの見えない作業に黙々と専念してくれた「ちはや」の乗員に対する感謝の気持ちが一緒になって言葉になりました。

昨年九月のテロ事件の反応にも一部見られたとおり、日米間には価値観の相違、感じ方の違いが多くあります。歴史認識もしばしば食い違いますし、時にはその溝は越えがたくさえ思われます。しかし、そうした懸隔があつても、日米は同盟国として永くつきあわねばなりません。そのためには、何よりも共通の体験を重ねることだと思います。困難や問題を共に乗り越えて初めて、共感が生まれ、信頼が育まれていくものであると信じています。

しかし、最終的には私を毎日駆り立てる余りあるものがありますが、これまで米海軍のダイバーが全力を尽くしたことを御理解いただき本当にありがとうございました」と涙ながらに話されました。

私の十七年間の自衛隊生活を凝縮したよりも更に凄まじい体験をした一年間でありましたが、その全てを語り尽くすことはとてもできませんでした。

今振り返ると「溝は深すぎる」と半ば諦めかけながらも、私が家族と米海軍と

の接点であり続けることができたのは、日本と米国という世界でも類を見ない強い友好の絆で結ばれた両国の将来にこの事故が暗い影を落とすことがないように、ただそれだけの思いでした。犠牲者の家族のために、誠意を持って対応しようとしている米海軍のために、日米両国政府のために、両国民の感情のために、自分は何ができるのであろうか。日米間の文化、歴史、制度、習慣の相違という大きな壁に直面しながらこの質問を自問自答する毎日でした。

ひたむきな努力を続ける米海軍の姿も、最愛の家族を失い、怒り、悲しみ、疲労で混乱している御家族の姿もどちらも真実の姿でした。また、将来の姿を考えた時に、仮に溝ができたまま両者が未だ永劫交わることがないとしても、それが真実の姿でしょう。しかし、両者の間に身を投じ、お互いに相手のことを理解し合い、誠意を示しあい歩み寄れる部分は歩み寄るとも真実の姿でしょう。

理不尽きわまりない事故によって命を落とした「えひめ丸」乗員の家族と引き揚げ作業を担当した米海軍、またその陰になつて支援した海上自衛隊の間に深い絆が生まれたとすれば、それは共に悲しみ、悩み、苦しみ、ともに汗を流すというう時を共有した結果に違いありません。今静かにこの一年間を振り返った時、眞実に背かず常に全ての人に公平に、真心を持つて、持ちうる自己の最大限の能力で、事態の対応にあたつたという自信には一点の翳りはありません。

最後になりましたが、この一年間、「えひめ丸」の事故対応に没頭している私にお寄せいただきました皆様方の並々ならぬ御理解、御支援に心より感謝申上げます。

期生会だより

Kisekai
Dayori #10

3期生会

◆宮下 誠

平成十四年ホームカミングディーについて
(出席できなかつた三期生の皆さんへ)

ホームカミングディー(HCD)の奴が
今年(平成十四年)もやつてきました。
今年は何か気取つて、きらびやかに着飾
つてしまふもおずおずとやつてきました。

児童から少年の頃、お正月は私たちに
とつて妙にこだわりの雰囲気をまとつて
いました元日の朝起きると枕元に並べて
あつた晴れ着を見て、一瞬とまどい、周
りを見渡してからどこかくすぐつたいた感
触で袖を通したことを思い出します。そ
んな「お元日」の気分が、今年のHCD
に感じられます。

「小原台一期生」

校長の挨拶にこんな言葉を見つけること
ができます。泥濘の小原台に全国から選ば
れて(とおもつていた)入校した少年達が
四年間名立たるほこりにまみれて卒業した
三期生を西原校長はこのように端的に表現
しました。その小原台へ幾星霜のしわをき
ざんだ顔、顔が戻つきました。

自分たちの行事が、例年に比べて特別
のものであるとの表現は恥恥ずかしい。去
年も来年もきっと特別なものであるに違
いないのに、やはりそう思うのです。

卒業式の式辞の中で「白い頭の方も多
く見受ける」と西原校長はHCD参加者

最高司令官が小泉総理でした。学生の頃
の国政選挙で清き一票を投じたかもしぬな
い小泉純也元防衛庁長官の子息である地元
の小泉純一郎が榮誉礼とともに現れたので
す。防大卒業生が初めて防衛庁長官として
登壇し、小原台っ子に訓示をしました。防
大二十四期生國務大臣中谷元でした。プロ
パーの教職員から初めて校長となつた西原
正が行事の主宰者でした。

小原台の環境も一変していました。新
装なつた校舎群、これらのとう尾を飾る
大講堂が訪れる人に胸を張っています。五
十周年記念行事を迎えるとしている小
原台の晴れ姿です。季節を間違えたよう
に桜の花までがほぼ満開でHCDの参加
者を迎えてくれました。

さて主題のHCDはどうだったでしょ
うか。人数がこれまでより多い三期生だ
から当然かもしれません、HCDプロジェクト
チームが前年秋につかんだけ参加
希望者数は四百六十名にも達するもので
した。このことによりチームは同期生の
熱い思いを知ることができました。卒業
式会場の大講堂がいまだ建設中でベール
に覆われているのに、賑々しく関係者が
群れ集う気配のもとで卒業式に全員出席
できるのか?悲喜こもごもありましたが
時が解決しました。

最高司令官が小泉総理でした。学生の頃
の国政選挙で清き一票を投じたかもしぬな
い小泉純也元防衛庁長官の子息である地元
の小泉純一郎が榮誉礼とともに現れたので
す。防大卒業生が初めて防衛庁長官として
登壇し、小原台っ子に訓示をしました。防
大二十四期生國務大臣中谷元でした。プロ
パーの教職員から初めて校長となつた西原
正が行事の主宰者でした。

小原台の環境も一変していました。新
装なつた校舎群、これらのとう尾を飾る
大講堂が訪れる人に胸を張っています。五
十周年記念行事を迎えるとしている小
原台の晴れ姿です。季節を間違えたよう
に桜の花までがほぼ満開でHCDの参加
者を迎えてくれました。

HCDのメインイベントは東京湾を見
下す同窓会館での懇親会でした。全く
見覚えのない人と飲んで話すうちに、だ
んだん昔の姿に戻つてしまい、「おお、貴
様か」と二度目の再会の握手がこちらに
もあちらにも魔法のように生まれるので
した。西原校長も会に華をそえた後、「海
青し」の大合唱がこだまするなか、短い
時間にぎつしり詰まつたHCDは終わつ
たのです。

ここで小文はHCDの新たな展開につ
いて紹介しなければなりません。それは
HCDを契機に芽生え育つべきつある
同期生活活動の盛り上がりについてです。六
十五歳を過ぎ、私達三期生のほぼ全員が
いわゆる年金生活に入りました。高齢化
社会の尖兵として長い余命を生きて行く
ためには仲間が必要です。自衛隊や会社
に替わる何かが求められています。その
仲間社会は共通の基盤、異色の情報源、相
互信頼性等に富んでいることが望ましい
でしょう。同期生会はこれらを十分に満
たしていると思われます。このたびのH
CDの参加者数の多さは、単なる懐古だ
けでなく上に述べた希求の溢觴とも受け

にエールをおくつてくれました。卒業生
の帽子投げに目を奪われ、凛々しい女子
学生指揮官の号令に耳をそばだて、後輩
の操縦する編隊の轟音に空を仰いでいる
うちに、私達が主役の記念撮影となりま
した。撮影は担当者の心配をよそに、天
候と写真屋さんの高い技術力に恵まれて、
後日それぞれに届いた記念写真には小原
台上に三期生の笑顔の花園が広がつてい
たのです。一人一人の顔だってヨーグ見
えるヤン。

HCD懇親会でお願いしましたが、H
CDのすばらしかつた感動を不参加の同
期生に伝えることが前述の新しい流れを
作る有力な一步だとおもいます。これか
らの本当の人生を手を取り合つて進もう
ではありませんか。

HCD懇親会でお願いしましたが、H
CDのすばらしかつた感動を不参加の同
期生に伝えることが前述の新しい流れを
作る有力な一步だとおもいます。これか
らの本当の人生を手を取り合つて進もう
ではありませんか。

4期生会

◆理事 児玉 節正

防大同窓会事業でもあるホーム・カミ
ング・ディーは、平成十四年度、第四期
生の番を迎える。

ホーム・カミング・ディーとして平成十
五年三月防大第四七期生卒業式に第四期
生が校長から招待される予定である。

平成十四年七月に実施した事前調査で
はこれに同期生本人及び家族を含め四百
余名の参加希望があつた。

また、例年三月G・H市谷で開催して
いる第四期生会総会・懇親会は、平成十
四年度はホーム・カミング・ディー当日、小
原台で開催の予定である。

参加規模・場所からして平成十四年度
は象徴的な総会・懇親会となるう。

5期生会

◆会長—福地 建夫

五期生会の皆様には、新春を迎えてますます健勝で御活躍されていることとお慶び申し上げます。

さて、五期生会も一昨年の総会で選出された新役員により運営されて早一年半を経過しました。昨年八月二十三日に開催された役員会で今後の会務運営を、次重点に行つてゆくことを決めましたのでお知らせします。

一 連絡網の整備
電話のみでなく、FAX、Eメールを組合せた連絡網を整備する。

二 名簿の整備

名簿記載項目の変更が多く陣腐化が激しいことや財務上の問題から名簿の新規作成は当面行わず、名簿修正資料のみを配布する。十五年度から希望者に有料（五〇〇円程度）でプリントアウトできるよう原簿の整備を行う。また在学中に亡くなつた方を五期生会物故者に加え、御遺族の住所等を調査し、名簿に加える。

三 五期生会ホームページの開設

同窓会ホームページとの関係を含め、ホームページの内容、WEBサイト等引き続き検討する。

四 会計の現状

会の資金は現在五〇〇万円弱（会員当たり約一万円）で厳しい現状にあるが、当面は会員からの会費徴収は行わず節約に努める。

五 同窓会の実施するゴルフ、テニス、囲碁の期別対抗を積極的に支援し、代表

選手を応援し優勝を目指す。

（昨秋行われたゴルフ大会はグロスの部六位、ネットの部は五位の残念な成績でした。前回はネットの部で優勝）

以上ですが、五期生会が会員の皆様にとってより意義ある存在となるためには皆様の積極的な意見具申等御協力と御支援が必要です。

特に会務運営の柱となる連絡網、名簿の整備は不可欠ですので、変更事項の通知等よろしくお願ひ致します。

連絡先 総務担当理事 浅野勇蔵君

TEL/FAX 043-277-16226
Email fwpc8927@mb.infoweb.ne.jp

なり、それぞれの任務につくことになつている。

また、第七期生には昭和二十四年四月、志願者七千六百八十九名中から選ばれた六百三十八名が入校したもので、卒業までの四年間に退学したもの、原級にとどまつたもの等合わせて六十四名が減少し、更に、第六期生から延期になつた者二十八名を加えた者が第七期生となつたもの。

まお、十六日の卒業式に列席した要人の祝辞等は次の通り。
【横校長の式辞】独立と平和は無為と安易のうちに獲得できるものではなく、不斷の努力が必要である。

【池田総理】自衛隊の運営は民主政治の統制に服さなければならぬ。自衛隊は常に祖国と国民に奉仕する精神に充実していなければならない。

【志賀防衛庁長官】日本民族の運命をにぎうことになるよう希望する。決断力、行動力を身につけてもらいたい。

【吉田茂元総理】防衛力のあり方について「世論の議論」に惑わされること無く国防の任務に邁進してほしい。

上の祝辞に比べると志は小さいのですが、私達会の役員は会の活動の潤滑油に成れば良いと思つています。

二、最も若き今なりき

◆北斗会東部支部長 石田 澄

防衛大学校第七期生の卒業式が十六日、横須賀小原台の防衛大学校体育館で挙行された。

第七期生は五百二名が卒業、その後直ちに陸、海、空の一曹に任命され幹部候補生としてそれぞれの幹部候補生学校に入校し、各自の訓練を終えて初級幹部と

編があり、東京分会には新潟、栃木、群馬、長野が、千葉分会には茨城が、神奈川分会には静岡東部地区がそれぞれ含まれています。

東部支部の活動ぶりを紹介しましょう。

まず第一に、年に一度の総会・懇親会です。

四コ分会の持ち回りで担任しています。

今年は、埼玉分会の担当で、七月に池袋で開催しました。同伴のご夫人を含めて百名近い出席者を得て大盛会でした。この際、総会の案内、返信を通して、名簿をチェックすることができます。今年も村木君の尽力で、メール入りの立派な名簿が整備されました。

第二は、月に一度の一水会です。毎月第一水曜日に市ヶ谷の防衛庁前の料亭「四季」で昼食会を開催しています。これが支部活動の中心と言つてよいでしょう。出席者はメールで吉岡君が掌握しています。出席状況は、二十五名から四十名程度です。毎回七～八名の諸君が自薦他薦でスピーチしています。ちなみに九月四日（水）は、一十八名の出席で、若松、村木、江藤、向井、萩原、西島、落合の各君の発言がありました。西島君は神戸から、千葉君は木更津からの出席でした。年十二月の一水会は、東京（藤田君）の主催で、忘年会をかねて防衛庁十八階のレストランで開催しました。テロ事件後の厳重な警備の中でしたが、約七十名が出席して盛会でした。特にこの日は、夜景が素晴らしい大好評でした。

第三は、その他の自由活動です。

まず厚生活動です。囲碁・ゴルフ、テニス等の練成を図り、同窓会の競技会等

へ出場しています。七期生の代表の主力は当支部から出ています。前記の三種目は、同窓会の定例大会でいずれも優勝の実績があり、北斗会の士気は高いのです。他に向井君のように、防大の要請もあり、カッターの女子クルーとOBの対抗戦を実施してこれに圧勝し、次回はもう結構だと言わわれた例もあります。

ゴルフは、各分会ごとに、北斗会メン

バーが主催する定期戦が行われています。千葉では、田吾作会（千葉国際GC）、四

街道グリーンクラブ（丸の内GC）、常盤

会（藤代俱楽部）、埼玉では九七八会（上

武GC）などです。それぞれ、吉岡君、斎

藤君、坂田君が世話係を引き受けて月一

回のコンペを楽しんでいます。

さらに昨年十一月・種村君等有志の諸

君の企画による尾辻秀久参議院議員（北

斗会会員）の「財務副大臣の就任祝賀会」

を支援したこともありました。

去る九月十日、故宮田幸則君の葬儀が

東千葉でありました。東部支部の航空会

員が中心となって、喪主の奥様に協力し

ました。航空の支部会員をはじめ、多く

のご夫人が通夜と告別式に出席しました。

奥様と双子のご子息の立派な立ち居振舞

が印象的でした。

北斗会の行事を、ひとつでも多く書き入れてもらえるように、こつこつと続けてまいります。やはり、継続は力であります。そこで、一句。
つくつくし最も若き今なりき
すでに還暦は過ぎていますが、健康に留意すれば、あと二十年ほどは生きることになりそうです。余生の短い法師蟬の声をききながら、『そうだ、今が最も若いのだ』と当たり前のことに気が付きます。さて、問題は『だからどうするか』です。
アンコールに応えてもう一句。
昼と夜のネクタイ替へて涼新た

三、北斗会中部支部活動状況

◆北斗会中部支部活動状況 岩月 察芳

海、山、川の豊かな自然、歴史と高度な文化に恵まれた中部地区は、ちょうど日本の人口と地理・交通の中心にあり、例えれば「日本の臍」にあたります。

北斗会中部支部会員は愛知、岐阜、三

重、富山、石川、福井及び静岡県西部地区に在住する三十四名（陸・十八名、海..

一名、空・十五名）で構成されています。

会は会員との家族の相互親睦を目的とし、会員の遺族及び入会希望者にも広く門戸を開いております。

平成十四・十五年度の役員は、支部長岩月、理事長和田、会計浅野、理事臼田・山本（征）、監査倉掛のメンバーが新任され支部の運営を引き継ぐこととなりました。これまで年間約七一八万円程度の予算で、会員の年会費によって運営してきております。

主要な活動は、会則の整備、名簿の整備、慶弔活動、防大同窓会・北斗会総会への代表者の派遣、総会の開催（七月）、親睦旅行等を行っており、平成十二年度は栗津温泉で家族を含めて一泊旅行し、皆で還暦のお祝いをしました。平成十三年四月は浜松館山寺温泉にて桜を楽しみ、本年四月は伊勢鳥羽方面へグルメの親睦旅行を実施しました。また、七月の総会後は、家族とともに名古屋御園座で観劇を楽しむ等活発に活動をしております。

これからは、会員も再就職先も定年となる時期もあり、また、徐々に高齢化して家族の支えなくしては会の運営も十分にできなくなつてくる時期が迫つてきていると見えます。そういう意味でも会の継続と会員相互の交流が重要な意義をもつてくるのではないかでしょう。

中部地区は、常滑沖の中部国際空港の建設が着々と進められ、愛知万博も着手しました。また、日本海側を結ぶ高速道路網が整備されつつあります。伊勢・鳥羽、浜名湖、輪島の海のリゾート、北アルプス、後立山の雄大な山



9期生会

◆藤田 幸生

われわれ九期生は、四年生のとき、これまでの十余年の防大教育を基に、「学生綱領」を作りあげた。それを待ちかねたよう、第三学期に退職された横智雄初代校長を、観閲行進でお見送りした。思えばそれは、横校長の建学精神、教育方針の下、旧軍経験の指導官と防大出身の指導官両方に指導され、防大十年と言う節目を経て、「防大教育の伝統」が、固まりつつあるところであった。

以来、任官して三十七年、この間、途中で殉職等した者などで人数は減ったが、何とか無事に防大九期生としてのクラスの任務を果たし、間もなくそれを終えようとしている。この間幸いにも、実の国防のための戦は無かつた。一方、行政面

岳地帯周辺の景観と温泉、スキー場、各地に点在する歴史と文化遺産、美術工芸等などになつても飽きさせない魅力がいっぱいです。

中部支部会員は団結して支部の運営にあたっており、平成十七年度に予定されている北斗会総会に元気で皆と再会できることを楽しみしております。

防大創立五十周年を、無事に迎え得了ことを共に祝いたい。

われわれ九期生にとっても、入校四十一年である。現在、残りの一人が、統合幕僚会議議長として、まだ任務に就いている。あと少しで、総員が、制服を脱ぎ、防大九期卒業生としての第一の任務を終了する。

われわれ九期生は、四年生のとき、これまでの十余年的防大教育を基に、「学生綱領」を作りあげた。それを待ちかねたよう、第三学期に退職された横智雄初代校長を、観閲行進でお見送りした。思えばそれは、横校長の建学精神、教育方針の下、旧軍経験の指導官と防大出身の指導官両方に指導され、防大十年と言いう節目を経て、「防大教育の伝統」が、固ま

では、クラスの者が、各幕の課長、部長、

幕僚長、統幕議長等の配置をそれぞれの自衛隊において、担当させてもらつてきている。そういう意味においては、防大

九期生は、恵まれていたかもしれない。

九期生会の活動としては、任務の終わりが近づいた近年になつて、やつと活発になつてきているのが実態である。尉官の間には、余裕が無く、殆ど活動する機会は無かつた。佐官の前半も同じことであつた。むしろ、その間は、目前の業務のため、一般大学出身者を含む各自衛隊幹部候補生学校のクラスの活動を大事にしてきたようだ。佐官の後半になつてから将官が出始めた頃にて・・・更には、ボツボツ退職者が増えて・・・更には、ボツボツ退職者が増え始めた頃から、やつと防大九期生としての意識が、強くなつてきたようだ。これは、防衛庁の本庁においては、課長、部長などの配置、また、部隊においては、それが指揮官など責任ある配置に就くようになり、横の連携をとる機会が多くなつたからであろうと思われる。勿論、情報収集等の面からも、他所に居る同期生の存在価値が高くなつてきた結果であろう。

九期生会の活動は、六本木時代に「九穂の会」から本格的になつた。これは、各幕の部長クラスに九期生が多かつた時代である。集まつては、意見調整（飲み会を含む）をした。質問、不満、反論、説得、非難、説明、賞賛、提案、確認・・・おかげで、相手を見直したり、自己反省したりして極めて有意義であった。相互理解、統合精神は、増進された。九期生の团结は強まり、以後の勤務に役

立つたように思う。

それから始まる数年間は、同期生が、官（現役）民（退職者）両方に居る貴重な期間であった。同時に、現役の者は、大きな責任を負わされ、組織における権限も影響力も大きい時期であった。この時期にもらった民間に出た同期生からの情報は、業務遂行上、適切な判断を下す上に、大変貴重であった。

平成十四年二月二十一日（木）「グランドビル市谷」で第三回目の九期生会総会、懇親会を実施した。毎年一回、全国から多くの同期生が集まっている。今年は、忙しい業務の間を裂いて、竹河内統幕議長も参加してくれた。民間で社長や会社役員などで活躍している者も多い。いつもながら、楽しいひと時であった。参加者は、回を追うごとに増えつある。

会長、総括役員は、一年交代で、陸、海、空、持ち回りで、来年は、空の番である。今後とも会則に従い整齊と運営していく。楽しく・・・たとえば、防大同窓会クラス対抗ゴルフ大会に優勝するため、九期生会の予選大会を何回も盛大に開くなどして・・・。

十八日（土）、十九日（日）の両日、海上幹部自衛官の原点である江田島の地において「海上自衛隊創設五十周年記念」（「のき会」記念行事）を開催したところ、御夫人を併せ百五名という沢山の同期生の参加が得られました。

一同は、想い出深い江田島の地に集い、互いに語らいながら三三五五、候補生学校、大講堂及び教育参考館などを見学しました。八方園では「にれのき会」「十五周年記念行事」の際に植樹された「楓の木」の前で、また教育参考館前で、それぞれ記念撮影を行いました。そして、改めて青春時代の熱と意気を思い出すとともに、クラスの絆の強さを再認識しました。

その感激をもう一度、更にその輪を防大十三期生会会長「牧本信近」君を中心に行防大十三期の同期生全体に広げようとするのが、今年度の戦略であります。その急先鋒が空自OB「中島」君で、彼を支える面々は陸自OB「関」君、「菅原」君、海自OBの私と「鈴木」君及び空自OB「岩崎」君の計五名であります。

今、計画されているプランは、「防衛大学校創立五十周年記念」防大十三期生（陸・海・空合同）クラス会」を「グランドビル市谷」において「平成十五年二月二十二日（土）午後四時半」から「御夫婦同伴」で開催することあります。陸・海・空の各世話役が、この十一月に牧本会長からの案内状をクラス総員に発送すべく準備を進めているところであります。

クラスの殆どが、退役し第二の人生を歩み始めた今こそ、防衛大学校第十三期生としての真の大同団結を確立

昨年は、本誌を通じて海上自衛隊同期生のクラス名簿作りに精を出していることを紹介しました。その結果、本年五月

13期生会

◆川村 成之

防衛大学校創立五十周年記念
防大十三期生（陸・海・空合同）

クラス会について

15期生会

◆萱沼 周輔
(現小平学校副校長)

し、残された人生を少しでも実り多きものとすべく皆で智慧を出し合い手を携えて前進しようとする時であり、我々の出发点となつた「小原台の想い出」を語り合うことが大切ではないかと考えています。

出来るだけ多くの方々の参加をお待ちしています。

十五期生会は平成十三年八月、「卒業三十周年記念行事」をグランドビル市谷において実施した。

全国（北は名寄、南は鹿児島）陸・海・空の現職、OBと御夫人方も含めて総勢約二百五十名が久し振りに一同に会し旧交を暖めた。

総会に引き続き、上坂冬子女史による記念講演を拝聴し、「私の出会いた李登輝とその妻」と題し一時間余熱のこもつた感銘させられるお話をあつた。

続いて懇親会に移り、期生会長永岩君の挨拶のあと、来賓として御出席戴いた曲幹事、柳田訓練部長、木村教授、金井助教授、西講師、外山講師、森本敏指導官、兼坂教官（いずれも当時の職名）各々からユーモア溢れる自己紹介を頂戴し会場は当時を思い出し大いにわいた。

今回の期生会の目玉商品（？）の一つとして名簿係佐藤君の尽力により各人の名札に、防大卒業時の写真をプリントし名札に、防大卒業時の写真をプリントし作成したことがあげられる。同期生は互いに三十年前の凜々しい顔と現物との大きな懸隔に笑い合いましたチヨッピリ

寂しくなつたりもした。

会は盛り上がり、予定を一時間以上オーバー（G・H・市ヶ谷さんごめんなさい）、

大隊毎の記念撮影のあと全員肩を組み輪になつての逍遙歌合唱そして急拵オランダのハーネグから駆けつけてくれた秋山君（現化学学校長）の音頭による万歳三唱をもつておひらきとなつた。

我が十五期生も一両年中には殆どの者が退官する時期となつた。ベビーブームに生を享け安保騒動の真最中に入校し、バルがはじけ長期景気低迷の中、第2の人生の荒海へ向かう我ら「重ゴキブリ」戦士はこれからも逞しく、しぶとく、団結固く生きてゆく決意である。（文責、萱沼）

が退官する時期となつた。ベビーブームに生を享け安保騒動の真最中に入校し、バルがはじけ長期景気低迷の中、第2の人生の荒海へ向かう我ら「重ゴキブリ」戦士はこれからも逞しく、しぶとく、団結

ました。最後は恒例の逍遙歌を齊唱し、叶君による乾杯で御開きとなりました。

記念パーティーに前後して、記念CDの作成、記念植樹、ゴルフコンペ、防衛府見学のイベントが行われました。記念CDは、従来の名簿「黎明」に、防大卒業時の顔写真（アルバムから転記）と現在の顔写真を掲載すると共に、「小原台の青春」などのビデオ、学生歌などを収録して全会員に送付しました。記念植樹は四月二十九日、三十名の会員により母校小原台において行われ、ソメイヨシノを植えると共に、記念プレートで表示しました。

同日、記念ゴルフコンペが十二組四十数名の参加を得て、野田パブリックで行なわれ、

16期生会

十六期生会は、防大卒業三十周年を記念して、「卒業三十周年」記念パーティーを始めとした記念行事を盛大に行いました。

四月二十八日、グランドビル市ヶ谷において、曲幹事、松木大隊指導官、兼坂教官をお招きして、会員と夫人合わせて二百三十名の参加を得て、総会並びに懇親会が行われました。総会では江藤期生会会长の挨拶に次いで、十名の物故者に黙祷を捧げました。会計報告の後、期生会規則改正の方向について議決しました。総会に引き続き、ご来賓を中心の大隊ごと記念写真撮影が行われ、懇親会へと移りました。折木君の開会の辞、江藤会長の挨拶の後、ご来賓各位よりご祝辭をいだき、香田君による乾杯で祝宴に入りました。



21期生会

◆会長——彌田 清

防衛庁が発足して五十年が過ぎ、自衛隊は、「我が國の防衛」という中心的な役割の他に、諸情勢の変化に対応して、「大規模災害など各種の事態への対応」や「より安定した安全保障環境の構築への貢献」などの役割を果たして参りました。この役割に応じて、国民の期待は以前にも増して、益々大きくなつてきております。防衛庁の発足より、やや遅れて創立された防衛大学校は、その中で着実に歩みを遂げ、今年で五十周年を迎えることになりました。その間、我が國の防衛の一翼を担う約二万人に及ぶ卒業生を輩出してきました。

私達、防衛大学校二十一期生も、志を同じくして小原台の地を踏み、卒業後早くも二十五年が経ちました。それぞれ同期生は、二十五年という歳月をその人生と風貌に刻み、各地各方面で活躍してい

を樂むことができました。

このようなイベントの他、期生会会則改正作業を進めております。現在の会則は昭和五十八年に制定されたものであり、今後は退職後の対応を含め、内容及び活動を充実する方向で改正することを

総会において議決しました。改正会則を開設しましたら防衛大学校ホームページ (<http://www.ndac.ac.jp/index.html>) の「防大同窓会」→「同窓会リンク集」にリンクさせ公開する予定ですので利用下さい。

開設しましたら防衛大学校ホームページ (<http://www.ndac.ac.jp/index.html>) の「防

今後五年間は、彌田会長（空）、秦事務局長（空）、林副事務局長（陸）、下出副事務局長（海）、上野副事務局長（空）、湖崎理事總務（陸）、飯尾理事總務（海）、田原理事總務（空）、只津会計（空）、野口会計監査（空）が、微力ながら期生会の発展に寄与すべく、役員を務めることになります。

今後五年間の期生会の活動としては、先ず、今年行われる五十周年事業、防衛大学校の記念行事へ積極的な参加を考えています。また平成十九年の卒業三十周年記念事業の準備、定年退官後をも見据えた期生会のハード、ソフト両面での態勢整備等、各種活動については、役員を通じて、広く期生会員の皆様の御支援、御協力をいただきながら、進めていきたいと考えています。何より、形式的な期生会運営ではなく、「実のある、また、楽しい活動」をとおして同期生間の団結、親睦が図れるよう尽力する所存です。

最後に、殉職された方々、御逝去された方々を悼みつつ、同期生会の今後の一層の発展を期して、平成十四年度二十一

残念でしたが、空幕防衛部長新野君のはかりにより本庁舎最上階からの展望

ます。これまで期生会としては、卒業以来、平成八年度までの二十年間を松澤初代会長を中心として、そして平成九年度から十三年度まで河村前会長を中心となつて、期生会の発展に尽力し、活躍していました。その間、期生会則等の整備及び改正、二十周年記念事業の実施等、現在の期生会の態勢を確立し、活発な運営がなされました。

今後五年間は、彌田会長（空）、秦事務局長（空）、林副事務局長（陸）、下出副事務局長（海）、上野副事務局長（空）、湖崎理事總務（陸）、飯尾理事總務（海）、田原理事總務（空）、只津会計（空）、野口会計監査（空）が、微力ながら期生会の発展に寄与すべく、役員を務めることになります。

支部だより

沖縄地域支部

事務局長 宮崎 剛

防衛大学校創立五十周年にあたり、沖縄地域支部は記念行事を平成十四年九月七日（土）記念行事を那覇市内のホテルにおいて、第一部「講演会」第二部「懇親会」の二部構成で実施しました。

小西忠支部長（海上一期）を中心に、支部事務局が銳意準備を進めた結果、支部会員の約三分の二にあたる百二十八名の参加者を得、講師三名、招待者六名の方々と共に防大創立五十周年を祝つたのであります。

【講演会】には、村木鴻二（航空六期）元航空幕僚長（日立製作所（株）顧問）、藤繩祐爾（陸上八期）元統合幕僚會議長（株）富士通顧問）、藤田幸生（海上九期）元海上幕僚長（三菱重工業）が登壇し、その他の出席者は、元海軍幹部や元陸軍幹部など、防大創立五十周年に貢献した多くの人々でした。

村木氏は、ウイングマークを取りたての頃、超低高度の水平爆撃訓練において、主翼下の燃料タンクを地面に接触させ、あと数センチ高度が低かつたら死に至つたであろう経験を教訓に「安いで危を思ふ、思えば必要なわち備えあり、備えあれば憂いなし」を強調されました。

藤繩氏は、十年単位でのそれぞれの立場での出来事を教訓と共にお話しになり、「統合は時代の必然」であること及び「自衛官として精進と人間性の洞察」具体的には、きつい仕事から逃げない、自分はどこに居るべきかを考えることを強調されました。



（海上一期）
元海上幕僚長（三菱重工業）

藤田氏は、沖縄勤務時代の経験がその後の勤務に大いに生きたことをお話しになりました。南西地域の重要性が増してくることは

工業（株）顧問）の三氏をお招きし、それぞ

講師の方々には、それぞれ違った観点から貴重なお話を頂きました。

続いて「懇親会」は、小西支部長の挨拶、沖縄県防衛協会会長儀間氏の「祝辞」、南西航空混成団司令内山空将（十三期）の現役代表挨拶と続き、藤井建吉副支部長（陸上七期）の乾杯でスタートしたのであります。

最後になりましたが、阿部防衛大学校同窓会会长から祝電を賜り、また同窓会本部より様々なご支援を頂き、この場をお借りし御礼申し上げます。

総合司会を実施した航空四十四期の津田一尉が「美人だつた！」という、もつぱらの評判も付け加えて、沖縄地域支部に創立五十周年記念行事の紹介を終ります。



懇親会は、

様々なゲループで昔話に花が咲く中、陸上自衛隊員による「沖縄の島歌」が披露されたり、参加者全員での記念撮影が行われるなど



確実、貴重な沖縄勤務の間に何事も前向きにとらえ、で

きるだけ多くの人生の糧を得るよう強調されました。

その後は、陸上・海上・航空・同期・同部屋などのグループに分かれ那覇市内へと消えて行つたのであります。

参加者の笑顔を見送った役員一同、ホット胸をなで下ろすとともに、やつて良かったなーという達成感でいっぱいでした。

第五回群司令高橋海将補（十九期）の締めの乾杯で懇親会はお開きとなつたのですが、延べ四時間に及ぶ記念行事は本当にアツと言う間に終了したのであります。

盛り上がったのでした。

もちろん逍遙歌もありました。海上二十九期の橋口三佐のすばらしい口上（何故かグラライター部）を機に、全員が一つの輪となり高らかに歌い上げたのでした。

第五航空群司令高橋海将補（十九期）の締めの乾杯で懇親会はお開きとなつたのですが、延べ四時間に及ぶ記念行事は本当にアツと言う間に終了したのであります。

その後は、陸上・海上・航空・同期・同部屋などのグループに分かれ那覇市内へと消えて行つたのであります。

九州地域支部

支部長 中野 純人

九州支部は西部地域支部であり、通称、九州防大同窓会と称し、九州七県に居住する会員で構成され、会員数は退職会員八〇〇人現職会員一、一〇〇人計一、九〇〇人であります。

事務局を福岡市に置き、各期の代表及び現職陸海空の代表の役員約二〇人で構成し、二ヶ月毎に事務局会同を開催し、活動としては先ず「総会、懇親会」があります。平成三年から毎年福岡市で実施し、すでに十二回になります。近年の参加者は退職会員一二〇人、現職会員一〇〇人、計二四〇人です。今年は五十周年記念であり、会場もやや大きくなり、防衛大学校校長の講演を計画し、平成十五年二月に福岡市で開催する予定です。

九州の会員の皆様には、この機会にぜひ参加されますようお願い致します。

会の組織としては、昨年までに九州の各県に同窓会支部を作つてもらいました。それまでは、退職会員は各人が九州本部に直結していましたが、実際に交流、活動しようとすると近くの人相互でないとできないものであり、県毎の同窓会を作り、退職会員相互、及び現地の部隊との交流を推進してもらうことと致しました。そして、これに会のシンボルとして各県入りの防大の校旗を作製配布し、また、平成十四年七月には九州全県の支部長会同を開催し、全員の顔合わせと總

合調整を実施しました。

毎年七月には防大学生の部隊実習がありますが、九州の陸海空各部隊で実習する学生の激励会の支援を行っています。

実際には実習部隊が行う激励会に本部または県支部から何人かが参加するかたちで、部隊によりやり方は変わりますが、それなりに定着してもらいたいと願っています。

また秋にはゴルフ大会を実施しています。七〇人程度の参加で、今のところ退職会員だけですが、状況が許せば現職も入つての大会にしたいと願っています。毎年、参加の皆さんのが嬉しそうな顔が楽しみです。

各部隊の記念行事等には同窓会としてできるだけ出席しています。各県支部ができる、地方の部隊の行事にも参加できると思いますので現職の皆さんも声をかけて頂き、交流がさらに深まるよう願っています。

最後に、東京本部も役員交代がされました。しかし、九州支部も次の総会で支部長交代を考えています。九州防大O.B.会の時代から十二年になりますが、その間、御指導、御協力を頂いた多くの皆様には感謝申し上げますとともに、同窓会、九州支部のさらなる発展を心から祈っています。有り難う御座いました。

中野 純人
福岡市
PX114317@nifty.ne.jp

広島地区支部

理事兼総務 土手義孝記

盛況裏に広島防衛大学校同窓会が主催する防衛大学校創立五十周年行事を終了

新年明けましておめでとうございます。おかげましては今年も心新たに新年をお迎えになられましたことお喜び申し上げます。

昨年は、防衛大学校創立五十周年となり、歴史の節目を迎える。この半世紀の間、同窓生は、二万五名近くとなり、防衛大学校創設時に生まれた同窓生が現在自衛隊の中核として活躍するなど、国の平和と安全に献身的に職務を遂行していました。

自衛隊の任務は、教育訓練の時代から国際情勢の変化に即応する実任務が主となり、ゴラン高原及び東チモールのPKO並びに対テロ措置法に基づくインド洋への艦艇派遣等における同窓生の肩にかかる重責は大なるものがあります。

広島防衛大学校同窓会（以下「広島同窓会」という）は、創立五十周年広島同窓会実行委員会を設立し広島経済圏で在住している同窓生に集まって頂き記念行事を実施しました。

行事内容は、十月十三日（日）テニスを、十月十九日（土）郷原GCでゴルフコンペを、十月二十六日広島百山「極楽寺山」のハイキングを実施し、延べ百名

カープの大野豊氏を招き、同氏が現役引退時述べられた「我が

▲ゴルフ優勝九期航空満田龍平氏

ゴルフコ

ンペの成績

は、優勝九

期（空）満

田 龍平氏

（グロス七

位十九期

（空）坂田

直文氏（同

八十）でし

た。なお、

期別対抗ゴ

ルフは、優

勝十一、十四、十七、十九期生連合チ

ム、第二位八期生単独チームでした。

創立五十周年行事の締めくくりとして、十一月二十三日（土）広島弥生会館にて記念講演会・懇親会を実施しました。

本行事には、防衛関係団体等の会長、呉地方総監、第十三旅團長等現役・O.B.

同窓生及び家族等百名余りが出席しました。

まず、記念講演会では、N.H.K.野球解説者であ

り、スポー

ツニッポン

野球評

論家で元

広島東洋

カープの

大野豊氏

を招き、

同氏が現

役引退時

述べられ

た「我が



▲記念講演会講師 大野 豊氏



選んだ道に悔いなし」の表題で講演されました。

講演内容は、現役二十二年間で出場試合七百七試合百四十八勝百敗百三十八セーブのほか、沢村賞、最優秀防衛率投手及び最優秀救援投手等の数々の実績を残しました。

特に、講演の中で大野氏は、「出雲信用金庫に勤務しながらノンプロ野球から広島東洋カープにドラフト外で入団し、当初は、母親を楽にさせることを目標に血液の渾む練習を重ね漸く一軍に這い上がることができました。

実績のない時代は、ファンから厳しいヤジを浴びましたがこれに反発することなく自分で自身を暖かく応援してくれているものと考へて今に期待に応えられる投手に成るなどと自分自身を奮いたせました。

この間、良き監督、コーチ、友達に出会い厳しく暖かい指導を受け、現役時代、怪我による故障以外一軍に落ちたことはありませんでした。野球に取組む姿勢は、常に戦う前に自分の足元を見ながら決して諦めないというプラス指向と目的意識を持った練習することで、転んでも

また、自分自身を暖かく応援してくれているものと考へて今に期待に応えられる投手に成るなどと自分自身を奮いたせました。

真に創立五十周年行事に相応しい記念講演会でした。

講演会終了後、講演会講師も参加して防大一期生から昨年四月卒業の四十六期生までの幅広い同窓生と家族を交えて懇親会を実施し、盛況裏に防大創立五十周年行事を終了することができました。

▲広島同窓会令夫人
(懇親会において)

創立五十周年行事を推進するに当たり、五十年行事に相応しい

関西地域支部

会長 牧 次郎

平成十一年十一月二十日に発会し、十三年十一月二十四日ホテル阪急インター・ナショナルにおいて総会行事を行い、三期事業をスタートさせました。



総会行事は、八期藤繩佑爾氏を招き講演会を行い、百四十五名の会員、家族、父兄会、走水会の方々が出席し、その後の懇親会も和やかな雰囲気のなか盛会裡に終える事が出来ました。関西支部の事業は、「同好の志の集い」とし、趣味・教養と云つた文化・スポーツ的活動を主体に轻易に行なうことにしていましたが、今年は、母校の半世紀を飾る節目となる五十周年でもあり、記念講演会と総会行事に力を注ぐことになりました。

手始めに、三月一日神戸大学工学部情報知能工学科教授高森年氏(防大七期卒)を迎、「二十一世紀への新たな挑戦、マイクロ・ナノテクノロジー」と題し、五十周年の当初を飾るに相応しい講演会を行い、約百名の会員等が先端科学の世界に熱心に耳を傾け、各なりに二十一世紀へ対応する教養を深めた事に大いに満足したようでした。

「同好の志の集い」としての事業も、逐次定着しており、五月(神戸港)と七月の海の日(大阪港)のカッター競技への参加、六月一日の歴史探訪「楠公の史跡千早赤坂村編」、十二日のゴルフコンペ、十五・十六日のテニス・水泳を楽しむ会、七月二十一日の会員スピーチ、九



▶三十六期海上
杉山重一氏ご家族(ハイキング)

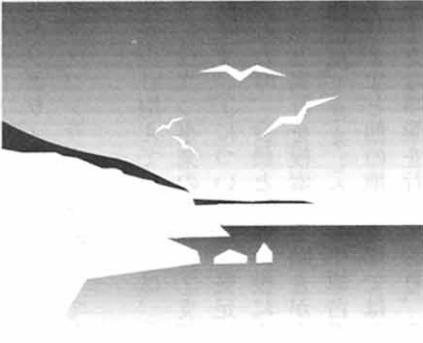
月二十二日の京都嵯峨野「大覺寺散策」等多彩な行事を無難に行いました。

因みに、各行事の特徴を紹介しますと、

カッターは十年来漕ぎ手が変わらないため、歴史探訪はハイキングを兼ねるが運営を越えた会員に天王山や金剛山の上り下りはハードな運動で次回は伏見にするとの事ですが、担当の八期山本茂さんが居なくなる次の担当が心配だ。ゴルフは草分け期の四期小林隆さんが担当しているが、意外にゴルフ人口が少なく、走水会と十七期井上恵由さんが参加者募集に苦労している。テニスは総務理事の河野さんの趣味の延長でこの位の規模が丁度良いそうだ。

会員スピーチは三回目で六人が終了、順番待ちしても出来ない人もあるのだろうが、今回の「遠くて近い国オランダ(七期中一皓)」「住んでわかる中国人人質(二十期藤原隆道)」は時期を得た話題で四十五名が参加し、会員のお嬢さんが参加するトピックスが生まれた。只、終了後のビールパーティを楽しみにしている不埒な噂も本音に近いようだ。

京都の古刹探訪は一期の中田壽美夫顧問の法曹会との繋がりで東福寺・東寺・大覺寺の未公開分野が拝観でき、北海道や関東からの参加者もあり、担当の事務局次長十三期盛田さんの悩みは七十名が限界の参加人数の絞り込みにあり、先着順を基本にしていると聞くが、毎年申し込みを忘れた突然の参加者があるのに四苦八苦すると云つたことが、他の行事とは全く逆で羨ましい悩みであることも面白く、よくよくご注意のほど。



十一月二十三日には、総会と記念行事をホテル・ニューオータニ大阪で行うことにしており、本部から頂いた支援金を基に「古典文化狂言と外国軽音楽の夕べ」を催し、五十周年を飾るに相応しい関西らしいエンターテインメントにすると理事一同張り切っています。

最後に、会員諸兄の今後との協力ををお願いし、支部の報告とさせて頂きます。

(平成十四年九月末 七期 坂口 寄稿)

【事務局連絡先】七期 河野 光男
●FAX ○六一六九一〇六一一一
【ホームページ】
<http://www.kcat.zaqq.ne.jp/kazu-n/>
[eメール]
bodaikansai@yahoo.co.jp

関西防大同窓会第三期事業結果・四期事業の概要

事業名		内 容 等	期 日	時 程	場 所	実施要領・成果	担 当
総 会		・総会議事（事業成果及び計画、会計報告会則の改正、役員改正）	14.11.23 (土)	1600～1620	ホテル ニューオータニ	・会費補填 300,000	理事有志
		・エンターテインメント 古典文化狂言と豪州軽音楽の夕べ		1630～1750			
		・懇親パーティ		1800～1930			
研修事業	研修会 会員スピーチ	・「住んでわかる中国人気質」藤原隆道 (#20陸) ・「遠くて近い国オランダ」中一皓 (#7空)	14.7.27 (土)		大阪弥生会館	45名 (懇親会39名)	事務局 (河野)
古利探訪		・楠公史跡	14.6.1 (土)		千早赤坂村	17名	(山本)
		・大覚寺	14.9.22 (土)		京都嵯峨野	70名	(盛田)
親睦事業	ゴルフコンペ	・健康の維持	14.6.12 (水) 14.12.1 (日)		きさいちカントリークラブ 明日香カントリー倶楽部	16名	(小林)
	カッター競技参加	関西小原台倶楽部事業の継続、拡大	14.5.12 (日) 14.7.20 (海の日)				(中乗)
	テニス同好会	定例会 大会	毎月1回 14.6.15～16		八尾 四条畷市府民の森	13名	(河野)
母校支援	防大入校者 壮行会等激励	地連行事の支援 (近畿2府4県の入校者)	14年2月		大阪地連 その他5地連	20,000 10,000 計 70,000	
	陸海空自衛隊の支援	3師団のUNDOF派遣激励 戦艦はるな派遣激励	13年12月 14年2月			100,000 100,000 計 200,000	
	遠洋航海激励	候補生の遠洋航海前の関西地区寄港	14.3.24		有志による激励パーティ等への参加		
事務活動	ホームページの掲載				http://www.kcat.zaqq.ne.jp/kazu-n/		(中)
	電話設置(FAX共用)・Eメール				☎ 06-6910-6111 Eメール bodaikansai@yahoo.co.jp		(三浦)
	名簿の作成・送付				会費納入会員への送付250名		(三浦)
	事務活動・理事会等						
50周年	記念講演会	・講師 高森 年 神戸大学工学部情報知能工学科教授	14.3.2 (土) 1630～1800	ホテル ニューオータニ	・参加者 講演会 93 懇親会 85 O 65 62 J 19 14 赴歓飲食会 9 9 ・会費補填 170,000	事務局 理事有志	
		・演題「21世紀への新たな挑戦： マイクロ・ナノテクノロジー」					

4期事業の概要 1 総会 15.11.15日 (土) 場所 未定 講演 拓殖大学 森本教授に依頼予定
2 その他の事業は、例年と同じ程度に実施。細部は15年4月頃案内状で連絡します。

東海支部は、愛知、岐阜、三重の三県を範囲として平成十二年十二月に発足し、やっと満一歳となりました。人員構成は現職会員三六〇名、退職会員二九〇名の計六五〇名です、特色としては海上自衛隊の基地が範囲の中にならぬためか海上の会員が少ないことでしきょうか。

東海支部の近隣の状況ですが、平成十一年関西支部が既に発足しており、北陸、浜松の同窓生を東海に含めるか否かの議論がありましたが現在の東海三県に落ち着きました。平成十四年八月に北陸支部が発足し、関西支部とともに東海支部の兄弟支部として今後お付き合いただければと願っています。お互いの総会等における交流のみならず、合同で何か事業が出来たらすばらしいと思います。

平成十三年七月、小牧基地に部隊実習に来た防大二年生の激励会に、國枝副会長(一期)、仁木(九期)が参加しましたが、実習生の元気さと明るいごまことに時代の移り代わりを感じ、ほほえました。十二月の総会では前統幕議長の藤繩氏にご講演をしていただきました。参加者は現職会員三十五名、退職会員五十五名計九十名でした。

平成十四年度は、前年同様七月に小牧基地で防大二年生の激励会が行われ、垣内監査役(七期)が参加しました。今年の総会は、創立五十周年の予算により、

平成十三年七月、小牧基地に部隊実習に來た防大二年生の激励会に、國枝副会長(一期)、仁木(九期)が参加しましたが、実習生の元気さと明るいごまことに時代の移り代わりを感じ、ほほえました。十二月の総会では前統幕議長の藤繩氏にご講演をしていただきました。参加者は現職会員三十五名、退職会員五十五名計九十名でした。

平成十三年七月、小牧基地に部隊実習に來た防大二年生の激励会に、國枝副会長(一期)、仁木(九期)が参加しましたが、実習生の元気さと明るいごまことに時代の移り代わりを感じ、ほほえました。十二月の総会では前統幕議長の藤繩氏にご講演をしていただきました。参加者は現職会員三十五名、退職会員五十五名計九十名でした。

平成十三年七月、小牧基地に部隊実習に來た防大二年生の激励会に、國枝副会長(一期)、仁木(九期)が参加しましたが、実習生の元気さと明るいごまことに時代の移り代わりを感じ、ほほえました。十二月の総会では前統幕議長の藤繩氏にご講演をしていただきました。参加者は現職会員三十五名、退職会員五十五名計九十名でした。

例年より華やかにと言ふことで十二月五日に地元のソプラノ歌手下垣真希さんによるソプラノコンサートを計画しております。

東海支部が現在抱えている課題は、①会員・後輩に役立つ事業の企画と②支部

会費の問題です。①については、発足以来二年経過した今、会員と後輩に役に立つ事業の企画と実行を模索する動きが支部役員の間に出てきました。「小原台だより」によりますと他の地域支部ではなかなかユニークな事業を行つており、これらを参考にして新しい事業に取り組めたらと思つております。②の支部の会費ですが、支部としての運営会費を皆さんどのように集めておられるでしょうか？ 東海支部では、支部の事務・通信連絡費を年千円とし、十年分一円を退職会員から一括徴収の形で納めていただいています。一～四期はほぼ完納されていますが、その他の期では会員の理解が十分に得られていない状況で、平均では六〇%に留まつております。こういった状況からも、同窓会本部からの恒常的な助成が望まれるところです。

小原台での本部の五十周年記念事業はもとより、各地での記念事業のご盛会を祈念しております。

【東海支部連絡先】事務局長 仁木一男

電話 ○五二一四四一一〇七一

niki@nagoyadenki.co.jp

小原台クラブ

幹事長 中島 正雄

小原台クラブの事業について

日頃、小原台クラブの活動に対し、ご理解、ご協力を賜りありがとうございます。

当クラブは、菅沼会長（一期）以下、船山副会長（二期）、根岸副会長（五期）及び渡辺副会長をはじめ、各役員全員、納得すれば「まずは行動が先」をモットーに、着実に活動を重ねております。本年は当クラブ創設二十五周年目を終えようとしております。五十年と二十五年という奇縁のなか、次の事業が役員会で決定されました。当クラブらしく、細部実施要領はまさに走りながら詰めて行きました。また、電子メールの利便性をフルに活用しました。

二、小原台クラブ特別講演会 「勝利への道」

過去のバブル繁栄に日本は、未だにその後遺症から抜けきません。挙句の果て、政治が悪いとか、大手企業経営者も悪い、さらに教育も悪だ、と自分をさておいて周辺環境にとがく目を向ける傾向にあります。この指摘は事実でしようが、個人、個人の人生をみたとき、残念ながら一種の生存勝負の苦労が続いております。そこには、やはり何か目標があります。京都大学アメリカンフットボール監督 水野氏（七期）の講演は、まさに当を得たものでした。限界のない「信念の持続」こそ、勝利という目標への道である、と水野氏の身体全体から湧き出したわかり易い言葉で語りかけて頂きました。

た。

場所がグランドヒル市谷でしたので、参加者は市谷基地、目黒基地に近いこともあり、百二十名を期待しておりましたが、残念ながら約百名の聴講者となりました。

三、小原台クラブ会報の増刷

当クラブの会報は毎年発行しますが、今年の第二十五号会報は、創立五十周年記念事業の参加特別号として、会員のみならず期生会会長とか防衛大とかに無料配布するため約一、〇〇〇部を印刷しました。現在、わずかしか残っておりませんので、希望者（熱望）は同窓会本部へ連絡して頂ければ送付いたします。

—以上—

得られていない状況で、平均では六〇%に留まつております。こういった状況からも、同窓会本部からの恒常的な助成が望まれるところです。

一、小原台クラブ座談会 「二十一世紀を想う」

船山副会長が司会役となり、基調講演及び自由討論の部を設定し、約二時間、中身の濃い意見交換の場となりました。

基調講演は、船山氏が自ら経営する情報通信国際コンサルタント会社（アイセック社）の代表取締役としての迫力を示して、「科学技術」「経済」「社会」「政治」及び「安全保障」の五つ



平成15年度 防衛大学校同窓会予算

14. 12. 20

(単位:円)

	項目	15年度予算	14年度予算	14年度比
収入	会費 (47期生)	20,100,000	18,320,000	+ 1,780,000
	預貯金利息	1,184,000	371,000	+ 813,000
	同窓会名簿代	12,600,000	0	+ 12,600,000
	積立金からの繰り入れ	0	8,959,000	- 8,959,000
	収入計	33,884,000	27,650,000	+ 6,234,000
事業計画の推進	(現職・OB会員交流)	300,000	500,000	- 200,000
	(同窓会主催親睦交流会開催)	210,000	300,000	- 90,000
	(ホームカミングデーの実施)	800,000	800,000	0
	(会員の出版等支援)	50,000	0	+ 50,000
	(防大卒業留学生との連携)	200,000	400,000	- 200,000
	(全国的な情報網の維持整備)	100,000	100,000	0
	50周年事業	—	—	—
	(記念祝賀会)	0	2,000,000	- 2,000,000
	(地方事業支援)	0	1,500,000	- 1,500,000
	(通信費)	0	2,000,000	- 2,000,000
	(諸支援)	300,000	0	+ 300,000
	顕彰碑献花費	500,000	500,000	0
	総会／講演会費	1,500,000	1,500,000	0
	期生会支援費 (48期生助成)	100,000	100,000	0
	(51期生発会)	100,000	100,000	0
	校友会对外活動助成費	1,000,000	1,000,000	0
	安全保障講座助成金	100,000	100,000	0
	開校記念祭助成金	2,000,000	2,000,000	0
	慶弔費 (供花、弔電)	350,000	350,000	0
支出	職員定年退職者記念品費	100,000	100,000	0
	複写機賃貸料	350,000	350,000	0
	電話／FAX維持費	400,000	400,000	0
	小原台事務局運営費	100,000	100,000	0
	代議員会運営費	700,000	700,000	0
	機関誌発行費	3,300,000	4,000,000	- 700,000
	同窓会名簿作成	11,755,000	250,000	+ 11,505,000
	記念品作成	500,000	500,000	0
	会長運営費	400,000	500,000	- 100,000
	事務員雇用費	2,000,000	2,000,000	0
	本部事務局室賃貸料	2,900,000	2,900,000	0
	事務費	350,000	350,000	0
	通信費	150,000	150,000	0
	交通費	400,000	400,000	0
	会議費	200,000	200,000	0
	予備費	1,500,000	1,500,000	0
	小計	32,715,000	27,650,000	+ 5,065,000
	積立金への繰り入れ	1,169,000	0	+ 1,169,000
	支出計	33,884,000	27,650,000	+ 6,234,000

平成13年度 防衛大学校同窓会決算報告

平成14年3月31日

(単位:円)

	項目	予算	実績	備考
収入	会費 (45期生他)	18,120,000	6,388,432	会費納入率34%
	預貯金利息	510,000	421,730	
	積立金からの繰り入れ	2,970,000	14,443,379	会費減に伴う繰入増
	収入計	21,600,000	21,253,541	
	事業計画の推進	—	—	
支 出	(現職・OB会員交流)	550,000	1,344,240	支部支援
	(同窓会主催親睦交流会開催)	300,000	310,745	
	(ホームカミングデーの実施)	600,000	600,130	
	(会員の出版等支援)	50,000	0	
	(防大卒業留学生との連携)	400,000	102,249	
	(全国的な情報網の維持整備)	50,000	28,980	
	総会／講演会費	1,500,000	1,210,168	
	期生会支援費 (49期生助成)	100,000	100,210	
	(46期生助成)	100,000	0	14年5月に振込
	校友会对外活動助成費	1,000,000	1,000,420	
	安全保障講座助成金	0	100,210	
	開校記念祭助成金	2,000,000	1,995,420	
	顕彰碑献花費	500,000	373,420	
	慶弔費 (供花、弔電)	350,000	316,335	
	職員定年退職者記念品費	100,000	107,877	
	複写機賃貸料	350,000	551,970	
	電話／FAX維持費	400,000	242,383	
	小原台事務局運営費	100,000	100,210	
	代議員会運営費	700,000	836,243	
	機関誌発行費	3,300,000	3,310,449	
	同窓会名簿維持費	250,000	410,205	
	記念品作成	0	600,420	
	会長運営費	400,000	230,360	
	事務員雇用費	2,000,000	2,000,000	
	本部事務局室賃貸料	2,900,000	2,838,581	
	事務費	350,000	161,955	
	通信費	150,000	82,337	
	交通費	400,000	354,590	
	会議費	200,000	163,043	
	予備費	1,500,000	0	
	50周年記念事業委員会	1,000,000	1,000,210	
	国債購入経費	0	780,181	
	支出計	21,600,000	21,253,541	

防大同窓会総会のご案内

平成14年度同窓会総会を下記のとおり開催致します。
ご出席を賜りたくご案内申し上げます。

記	
1 日 時	平成15年3月25日(火) 16:00～20:00
(1) 総会	16:00～17:20
(2) 講演会	17:20～18:20
(3) 懇親会	18:30～20:00
2 場 所	グランドヒル市ヶ谷 新宿区市谷本村町4-1 (TEL. 03-3268-0111)
3 懇親会費	4,000円
参加される方は、同封の返信用はがきにて平成15年2月28日(金)までにお申し込み下さい(欠席の方は、返事不要です)。	

平成14年度同窓会行事

平成14年度同窓会行事が次のとおり実施されました。

- 6月7日(金) 臨時代議員会
(グランドヒル市ヶ谷)
次期会長として渡邊信利氏(陸6期)が選出されました。
 - 12月20日(金) 定例代議員会
(グランドヒル市ヶ谷)
下記議案が承認されました。
 - 1 平成13年度事業報告、決算報告及び財産目録
 - 2 平成15年度事業計画及び予算案
 - 3 平成15年度事の人事案
 - 4 MCI事業案

本部事務局からのお詫び

11月17日に行われました防大公式行事は、当初の予定（記念式典 10:00～10:40、観閲式 11:45～12:45）より大幅に早まり（記念式典開始 10:00、式典終了後引き続き観閲式開始、観閲式終了 11:20）、皆様には大変ご迷惑をおかけしました。私どもがこの変更を承知致しましたのは同窓会行事の数日前でありましたが、少なくとも同窓会行事に参加された方々にはこれをお知らせ出来た筈であります。この点につきまして、私どもの不行き届きお許し戴きたくお願い申し上げます。

本部・事務局からのお知らせ

平成14年度同窓会本部役員											
事	事	人	經	總	廣	總	副	事	理	副	副
業	業	事	理	務	廣	務	事	理	事	長	副
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	會長
担	部	担	部	担	報	担	部	事務局員	事務局員	理事長	副會長
當	長	當	當	當	當	當	長	監	副長	長	副長
今	久	森	永	若	木	日	高	佐	谷	川	阿
久	保	永	田	木	木	高	久	々	安	名	部
大	宏	吉	洋	利	功	萬	萬	木	二見	澤	松
11	11	10	10	10	10	9	12	11	12	11	11
(陸)	(空)	(海)	(空)	(陸)	(空)	(空)	(空)	(海)	(空)	(陸)	(空)

地域支部等役員（平成14年末現在）



大講堂前



(国の護り)

防衛大学校同窓会本部連絡先

〒160-0003 東京都新宿区本塩町21-3-2

局 線 TEL・FAX 03-3351-8910 専用線 TEL・FAX 8-6-28895